ISSN 1881-6770

# Bulletin of Yokohama Museum of Art No.25

横浜美術館
研究紀要
第 25 号

# Bulletin of Yokohama Museum of Art No.25

横浜美術館　研究紀要　第 25 号
Bulletin of Yokohama Museum of Art No.25　2024

# 目次


横浜美術館「市民のアトリエ」の理念と活動実績
森 未祈・北川 裕介｜ 9

The Principles and Achievements of the Yokohama Museum of Art's Citizens' Workshop
Mori Mineku, Kitagawa Yusuke｜ 121

大谷研究室旧蔵「こどもの国児童館・A地区児童遊園」資料群に見る
イサム・ノグチと大谷幸夫による設計過程―上　原案完成まで
中村 尚明｜ 25

Isamu Noguchi and Sachio Otani's Playground and Children's House at Kodomo No Kuni:
A Plaster Model and Drawings from the Otani Associates
Nakamura Naoaki｜ 122

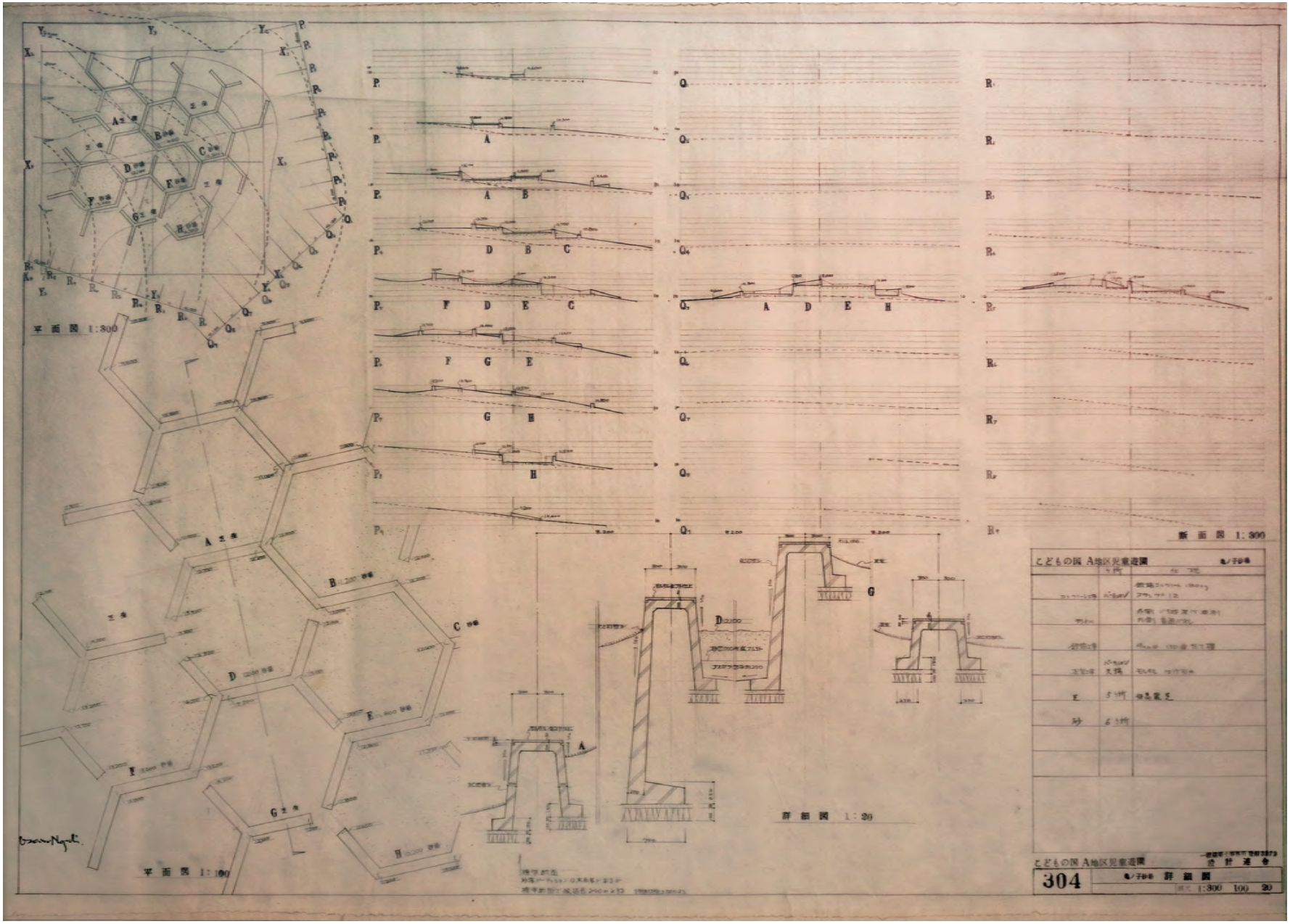
横浜市所蔵カメラ・写真コレクションにおける
カテゴリー［カメラ］に属する収蔵品の概要
日比谷 安希子｜ 107

An Overview of the Items in the Camera Section of the Collection
of Camera and Photography of the Yokohama City
Hibiya Akiko｜ 124

PL.1　市民のアトリエ　平面室（2010年時）　撮影：笠木靖之

PL.2　市民のアトリエ　立体室（2010年時）　撮影：笠木靖之

PL.3　市民のアトリエ　版画室（2010年時）　撮影：笠木靖之




PL.4　イサム・ノグチ《こどもの国A地区児童遊園 304 亀ノ子砂場詳細図》作図：大谷研究室（旧設計連合）、1965-66年、鉛筆、トレーシングペーパー、55.1×80.0cm、大谷研究室旧蔵「こどもの国児童館・A地区児童遊園」資料群
Isamu Noguchi 〈304 Detail Drawings of “Tortoise Shell Sandpit.” Playground in Zone A of the Kodomo No Kuni〉 Drawn by Otani Associates (former Sekkei Rengo), 1965-66, pencil on tracing paper, 55.1×80.0cm, Otani Associates Kodomo No Kuni Collection

PL.5　トロピカル・ソホ・レフレックス

# 横浜美術館「市民のアトリエ」の理念と活動実績

森 未祈・北川 裕介

## 1. はじめに

1989年に開館した横浜美術館は、本格的な創作設備を有する国内で数少ない美術館の一つだ。石造りのシンメトリーな外観が特徴の建築は丹下健三・都市・建築設計研究所による設計で、展示室を中心に北側にアトリエ棟、南側に美術情報センターを含む棟を配している。アトリエ棟の入口を進むと「子どものアトリエ」(小学6年生(12歳)までが対象)があり、その上階の「平面室」、「立体室」、「版画室」の3室からなるのが「市民のアトリエ」(12歳以上が対象)だ。市民のアトリエは施設名であり、同時にその運営体を指す名称でもある。本稿は、市民のアトリエのこれまでの活動について概観し、考察しようとするものだ。

2023年12月現在、横浜美術館は大規模改修工事のため休館している。休館中はこれまでの活動を見直し、再開館に向けての活動方針を計画する段階にあり、教育普及活動についても例外ではない。そこで本稿では、運営方針について改めて職員の共通認識が得られるよう、これまでの市民のアトリエの活動を総括し、市民のアトリエ設立の経緯、理念と命題が成立した背景とそれらの意味を明らかにしたい。加えて、これまでの活動の実績を追い、1989年11月の開館から2021年3月に休館するまでの概ね32年間の変化を俯瞰する。これにより、今後の横浜美術館の市民のアトリエおよび教育普及活動、さらには美術館全般における創作の場の意義を考察していきたい。

オープンから30年以上が経って開館当時を知る職員が次々と退職し、市民のアトリエの職員も代替わりが進んでいる。筆者は市民のアトリエの活動のごく一部に関わったに過ぎないが、開館以降初めての長期休館という変革期に携わる者として、過去の記録を残すことを使命と捉えた。本稿は1、4、5章を森 未祈(2019年度から市民のアトリエ所属)が、2、3章を北川裕介(2022年度に市民のアトリエ所属)が執筆する。

## 2. 市民のアトリエの沿革と横浜美術館の教育普及組織の変遷

### 2.1 市民のアトリエの設立の背景と開館準備

横浜美術館開館に向け本格的に準備が進められた1980年代は、「第三世代の博物館」像[1]が提唱された時期であった。それまでの、資料や作品の保存と公開を主な目的とした博物館から、市民の参加や体験を運営の軸とする博物館へと意識が変化していく過渡期にあり、日本の美術館における教育普及活動が活発化していた時期である。例えば1981年開館の宮城県美術館や、1986年開館の世田谷美術館などは、知識や技術の習得を目的としないワークショップという手法を用いて実験的な試みをおこなっていた。また、1977年に開館したフランスのポンピドゥー・センターは、「美術館」「図書館」「映画館」等で構成された複合文化センターとして世界的に注目されており、横浜美術館が建設される際に参考にされた。

日本では1970年代から美術館建設ブームが始まり、全国各地に美術館が建てられたが、横浜市においては都市の発展に伴うインフラの整備が優先されていたこともあり文化施策の遅れが目立っていた。そのような状況下、将来を見据えた大都市をつくるためには文化行政の強化が必要不可欠であると考えられ、1979年に「横浜市文化問題懇談会」が設置され、1981年1月『みんなでつくろうヨコハマ文化 横浜市の文化行政を進めるにあたって』が提言された。提言には後のアトリエ設立につながる以下の記述が見られる。「優れた美術品の鑑賞と自らの心を作品制作に反映させようとする行為は、生活の質をたかめようとする市民の欲求の表われである。」「美術館は現代文化の創造を造形活動の側面からすすめるものでありたい。」この提言を受けて1981年に「横浜市美術館基本構想委員会」が設置され、1982年3月「横浜市美術館の基本構想のあり方について」が答申された。答申では、美術館の理念や美術資料の収集方針、美術館の諸機能等が提示された。以下、横浜美術館の理念を抜粋する。

美術館の理念

⑴国際港都横浜にふさわしい世界に開かれた美術交流の場としての美術館。

⑵近代、現代美術が親しみ易く鑑賞できる機能を持つと同時に、市民や芸術家に創造活動の場を提供する美術館。

⑶美術資料(美術作品及び関連資料、以下同様)の収集、展示、保存、研究及び美術の教育、普及並びに美術情報センターとしての機能をそなえた美術館。

⑷横浜は長崎とともに写真発祥の地である特色に鑑み、写真の収集に力をそそぐ美術館。

⑸美術と他の芸術分野との関連を考慮しながら、市民の美術活動を育成し、発展させる場としての美術館。

理念の⑵、⑶、⑸では、創造活動の場の提供や、美術教育、市民の美術活動の育成と発展について示されている。また、美術館の諸施設の頁には「創造と学習の場としてのアトリエ(実験工房)、教室、講座用の部屋を広く多く用意する。」と記されている。実験工房という仮称を用いているが、すでに市民を対象としたアトリエを構想していたことがわかる。さらに、美術館の諸機能の頁には教育普及について下記のように示されている。

教育・普及

美術館は、旧来の行政の中での社会教育という固定したものの見方からとらえるのではなく、市民の文化的形成としての生涯教育のなかでとらえなければならない。

市民の総合的文化活動を育成する立場から、市民の要求に対する受け身の姿勢ばかりでなく、創造活動及び研究の場を提供するなど市民へ能動的に働きかける姿勢が大切である。(後略)

美術館を社会教育ではなく生涯教育[2]のなかでとらえると提示したことには、社会教育より広い概念の中に美術館を位置付けようとする時代的な背景が伺える。また、「市民の要求に対する受け身の姿勢ばかりではなく」と示されたのは、横浜市の市民活動が盛んだったことに起因するのではないだろうか。横浜市には社会教

育の代表的施設である公民館は存在せず、代わりに市民が自主的に活動できる場として1973年より地区センター[3]が整備され、市民による自主活動の拠点を担っていた。受け身ではなく、市民へ能動的に働きかけることによって、これらの施設と美術館に差異を持たせようとする横浜市の姿勢が示されていると考えられる。

その後、1983年に「横浜市美術館設計条件研究委員会 報告書」が提示され、みなとみらい21エリアに美術館を建設することが決定し、建設計画と規模が示された。市民のアトリエについては「市民用アトリエ150㎡×2、実験工房(アトリエディセット[4]方式)300㎡」と記載されており、のちに平面室、立体室、版画室となる3室を設ける方針が示された。以降の開館までの流れを以下に記す。

| 年 | できごと |
|---|---|
| 1983 | 「子どものアトリエ研究会」設置 |
| 1985 | 「横浜市美術館(仮称)開設準備委員会」発足 |
| 1986 | 「市民のアトリエ研究会」設置 |
| 1988 | 「市民のアトリエ企画検討委員会」設置 |

全国的にも前例のなかった子どものアトリエについては1983年に研究会が発足し、3年後の1986年に市民のアトリエ研究会が設置され、ようやく市民のアトリエの理念や活動内容について検討が開始された。

### 2.2 横浜美術館の組織の変遷と市民のアトリエ職員の専門性

横浜美術館の設置者は横浜市であり、現在は、公益財団法人横浜市芸術文化振興財団(以下「横浜市芸術文化振興財団」)が指定管理者となって管理運営を担っている。横浜市芸術文化振興財団は複数の文化施設を管理運営していることから職員の異動や配置換えが頻繁におこなわれる。以下が財団の変遷である。

| 年 | 財団の変遷 |
|---|---|
| 1987 | 財団法人横浜市美術振興財団が設立 |
| 2002 | 財団法人横浜市美術振興財団と財団法人横浜市文化振興財団(1991年設立)が統合し、財団法人横浜市芸術文化振興財団となる |
| 2006 | 横浜美術館に指定管理者制度が導入され、財団法人横浜市芸術文化振興財団が指定管理者となる |
| 2009 | 公益財団法人横浜市芸術文化振興財団に移行する |

横浜美術館開館時の市民のアトリエは、振興部アトリエ課内に設置されるところからスタートし、いくつかの部署を経て、現在の教育普及グループに位置付けられた。

年度によって増減はあるが、教育普及グループには約10名の職員が在籍しており、そのうち約3名が市民のアトリエを担当している。アトリエには専門的な機材や設備が数多くあることから、担当職員は豊富な知識と経験が必要とされる。さらに制作を伴うプログラムを企画し実施するため、実技を学んだ職員が配属されることが多く、開館時は教員資格も必須であった。以下が、部署と肩書きの遷移である。

| 年度 | 部署 | 所属職員の肩書き |
|---|---|---|
| 1989-2008 | 振興部→事業部→美術学習部→学芸部→学芸教育グループ | 指導員 |
| 2009-2011 | 学芸教育グループ | コーディネーター |
| 2012-2015 | 教育普及グループ | ワークショップコーディネーター |
| 2016-2020 | 教育普及グループ | 創作・造形エデュケーター |

職員の肩書きは、開館以降「指導員」が長く用いられた。指導という言葉は、ある目的に向かって教え導くことを意味する。その後、調整やまとめ上げるという意味を持つ「コーディネーター」を経て「エデュケーター」へと移り変わる。エデュケーターは広義には教育者という意味の単語であり、美術館の教育普及担当者を指す呼称として一般的だ。さらに、近年では学びや相互に知識を共有しあう「ラーニング」という言葉に着目し、教育普及やエデュケーションという言葉をラーニングに置き換える美術館が国内に現れ始めた。

開館以降、時代に即して部署の位置付けや名称を更新してきたように[5]、今後も活動方針に沿った名称のあり方を検討し続けることが必要だろう。

## 3. 市民のアトリエ研究会と理念、命題の成立

### 3.1 市民のアトリエ研究会の概要

以下に市民のアトリエ研究会の概要について記載する。

■活動期間

1986（昭和61）～1987（昭和62）年度

■成果物

『横浜市美術館（仮称）「市民のアトリエ」調査委託報告書』昭和62年3月31日（以下、S62年報告書）

『横浜市美術館（仮称）「市民のアトリエ」調査委託報告書』昭和63年3月31日（以下、S63年報告書）

■調査目的と方法（S62年報告書から抜粋）

横浜市美術館（仮称）の開館を2年後にひかえ、市民のアトリエの基本的な理念、具体的な活動内容、運営形態を検討する。また、設備の再検討を行なうと同時に、今後の問題点及び、計画実施にあたっての運営形態を検討する。

■委員[6]（S63年報告書所載の名簿順。肩書き、所属は当時）

山野辺義雄（世話人、東海大学）、坂本一道（東京藝術大学）、奥谷博（画家）、島田勝吾（すいどーばた美術学院）、立石雅夫（トキワ松女子短期大学）、海野阿育（鶴見大学）、海老塚耕一（多摩美術大学）

■横浜市美術館（仮称）開設準備室（研究会に常時出席していた職員）

浅見信夫、林信行、関淳一

委員及び職員は、作家や教育者など、全員が実技を学んだ専門家で構成された。成果物として2冊の調査委託報告書が発行され、市民のアトリエの理念と命題が明示された。

### 3.2 市民のアトリエの理念

1986年に市民のアトリエ研究会が設置された際、すでに横浜美術館は着工しており、市民のアトリエ3室の性質は概ね決定していた。よって、市民のアトリエ研究会では「横浜市美術館の基本構想のあり方について」及び「横浜市民文化振興協議会報告書」[7]を前提資料とし、基本的な理念や具体的な活動内容、運営形態等につ

いて調査・研究された。以下にS62年報告書に記載された理念を抜粋する。

⑴市民のアトリエは設備・機材を指す意味での施設ではなく施設を足場として企画・活動を行なう機関である。
⑵創作という視点から美術・造形の理解を深めようとする立場をとる。
⑶美術館の教育・普及機能の一環として、美術へ対する興味を広く市民に普及することを目的とする。
⑷創作の体験を通し、特に近・現代の美術への理解を広めることを目的とする。
⑸底辺の拡大と共に、美術造形活動研究機関として、美術造形の現状を刺激し、活性化・尖鋭化することを目的とする。
⑹子どものアトリエと連携し、活動を通し学校教育の援助、また美術教育の発展に寄与することを目的とする。
⑺国際性を持った活動を行っていく。海外の作家及び美術状況に常に目を開き、広い視野から美術創造をとらえ、かつ国際的な立場での活動を行っていく。

（中略）市民のアトリエ理念の⑴としてあげた、市民のアトリエは、施設ではなく機関であるということに基づき、アトリエで行なわれる活動は、すべて市民のアトリエの意図に基づくものでなければならない。
また同時に、美術館活動の目的である教育・普及の一環をにない、市民のアトリエは創作活動を通し、広く市民に開かなければならない。従来、美術館では鑑賞の立場から研究及び普及活動が行なわれてきたが、市民のアトリエでは創作の立場から、研究及び普及が行なわれなければならない。このことは一般市民が創作を通し、美術及び美術作品の理解を深め、また、創作そのものを楽しみ、創造の一端に寄与することを意味すると同時に、市民のアトリエが現代の美術の最前線で、刺激的な活動を行ない、その状況を活性化・先鋭化してゆかなければならないことを意味する。（後略）

### 3.3　市民のアトリエの命題

S63年報告書において「〈つくる〉ことにより美術を考える」という命題が示され、下記の補足がなされた。

「〈つくる〉ことにより美術を考える」事が創作体験を通して「美術とは何か」を自己の中で成長させ得ると考える時、市民のアトリエが、「何かを判らせよう」とすることより、「造形」「創造」と云うものを市民が「感じる事の出来る場」あるいは「出会いの場」となることが必要であると思われる。
一方、美術館の中のアトリエと云う環境を考えた場合、「鑑賞と創作」、つまり見る事と創る事との相互作用が美術への認識を深めるのだと云う事実をその内容に取り込む事が必要であろう。

また、上記の文章の他に、各委員による論考も掲載された。様々な解釈が可能な命題であるだけに、解釈の細部において統一をはかることに困難を極めたことは想像に難くない。しかし、各論考を読むと「自らに向かい合う」「みる事とつくる事の相互作用」という考えが随所に見られ通底していた。一部だがそれらの箇所を抜粋する。

「参加する人々が、積極的にものを創りだすことをとおして、自らの内にある美の感性を啓発し、能動的に鑑賞し批評しうる自分をみいだす手がかりを得る場として捉えたい。」(立石、13頁)

「創作することによって、人間の生きる豊かさや、人間の根源に触れ、人間の創造性に触れていくとき、人は自らに向かい合うことが出来る。」(島田、19頁)

「私は、〈つくる〉ことと〈みる〉こととの関係を、できる限りさまざまな角度からアプローチすること、そして、眼でみるという営みと、手でつくるというはたらきを、具体的な事物のうえで結びつけてみることを試みる場としての講座の在り方を提案してみたい。」(坂本、10頁)

「美術としての、もの、ことを考え探るのでは先ずなく、ただ自分の持った手の記憶を探り出す作業を、作ることにより始めたらよいのではなかろうか。ここでの作るという作業は、実際は作るというよりは、手を、目を、思考を動かすことであり、したがってすぐに作品に向かうことはない。」(海老塚、23頁)

「〈つくる〉ことにより美術を考える」という命題は、上記の考えや理念を踏まえると、創作体験の喜びを出発点に美術への思考を深め、創作と思考を往還することを促していると解釈することができる。

生涯教育における学びとは、各人の様々な課題に応じておこなわれるものであり、事業によって得られる学びのすべてをコントロールすることはできないし、すべきではないと考える。だが、公立美術館の中の市民のアトリエは、理念や命題を踏まえて明確な目的のもと事業を実施していくことが必要だ。そのことが、市民の文化活動の育成にも寄与するのではないだろうか。

## 4. 市民のアトリエの活動実績 1989年度から2020年度まで

### 4.1 『横浜市美術館(仮称)「市民のアトリエ」調査委託報告書』に記載された活動内容

S62年報告書、S63年報告書は、前述した理念や命題の他、具体的な活動内容にも触れている。それぞれで記載内容が異なるが、S63年報告書で世話人の山野辺によって述べられた以下の内容が委員の最終結論だと考えられる。

1. 長期講座

「美術の造形的表現方法を学ぶ講座」、「美術を考えることを主体とする講座」、「美術の造形的原理を学ぶ講座」等を設け、この三つの講座を有機的に関連づけながら長期講座を構築する。(後略)

2. 短期講座

短期講座は美術を様々な角度から学ぶことを目的として下記の講座をおく。(後略)

3. 公開制作

美術専門家の制作プロセスを公開し、その造形的意味を学習する。

4. フリースクール

受講生各自が抱えている美術の問題を自由に相談することの出来る講座の窓口になるものを置く。

以上の方針を踏まえて、1989年11月の開館と同時に市民のアトリエの活動が始まった。上記1〜3の事業が初年度から実施され、「4. フリースクール」として示されたことは、「研究会」(初年度開始)や「制作公開相談会」(1993年度開始)という事業で実現したと考えられる。以降2020年度までに、上記4項目には収まらない数多くの事業が実施された。それらの事業は「横浜美術館全記録1960-2021―構想、建設、開館、運営、活動」[8]第Ⅲ章 個別年表に列記されている。ここでは全体を概観するために、事業枠の名称、開催年度、概要、対応する理念を表1「市民のアトリエの事業枠一覧」に示す。また、表2「横浜美術館の収支と市民のアトリエの動向」では、横浜美術館全体の収支の変遷と市民のアトリエの動向の連関を示す。

### 表1　市民のアトリエの事業枠一覧

事業枠は「横浜美術館 全記録 1960-2021―構想、建設、開館、運営、活動」第Ⅲ章 個別年表01〜10に沿って作成した。
個別年表「09 メディア懇談会」には、市民のアトリエの事業に該当するものがなかった。
市民のアトリエの理念は以下の通り。
⑴市民のアトリエは設備・機材を指す意味での施設ではなく施設を足場として企画・活動を行なう機関である。
⑵創作という視点から**美術・造形の理解を深めようとする**立場をとる。
⑶美術館の教育・普及機能の一環として、**美術へ対する興味を広く市民に普及する**ことを目的とする。
⑷**創作の体験を通し、特に近・現代の美術への理解を広める**ことを目的とする。
⑸底辺の拡大と共に、**美術造形活動研究機関として、美術造形の現状を刺激し、活性化・尖鋭化する**ことを目的とする。
⑹子どものアトリエと連携し、活動を通し**学校教育の援助、また美術教育の発展に寄与する**ことを目的とする。
⑺**国際性を持った活動を行っていく。**海外の作家及び美術状況に常に目を開き、広い視野から美術創造をとらえ、かつ国際的な立場での活動を行っていく。

| 個別年表 | 事業枠 | | 開催年度(西暦) | 概要<br>(記載のないものは一般[原則として12歳以上]対象) | 対応する理念<br>(※1は名称の定義のため省略) | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 |
| 01<br>みる：<br>展覧会事業<br><br>03<br>つくる：<br>市民のアトリエ | 公開制作 | | 1989<br>｜<br>2002 | • 作家を招聘し、制作の過程を公開。<br>• 参加者と共に作品を制作。<br>• 成果展示。<br>• ワークショップやトーク、レクチャー、公演の実施。<br>• ボランティアの参加あり。<br>• 記録紙や記録映像を制作した場合もある。<br>• 会場：アートギャラリー、ポルティコ、屋外、市民のアトリエ、子どものアトリエ等<br>• 頻度：年1回 | ○ | ○ | ○ | ○ | | ○ |
| | 修了生・研究会生作品展 | | 1990<br>｜<br>2006 | • 講座受講生、研究会生による作品展。<br>• 2005年度からは「市民のアトリエワークショップ展」に改称。<br>• 会場：アートギャラリー<br>• 頻度：年2-7回 | ○ | ○ | | | | |
| | アーティスト・イン・ミュージアム横浜 | | 2005<br>｜<br>2006 | • 作家が横浜に長期滞在しながら美術館を中心に市内各所で作品制作やワークショップを展開。<br>• 「公開制作」の流れを汲む。<br>• 2005-2009年度実施のうち、2005年度は市民のアトリエが担当。2006年度は館内連携事業として実施。<br>• 会場：アートギャラリー<br>• 頻度：年1-2回 | ○ | ○ | ○ | ○ | | |
| | ワークショップ参加者の作品展 | | 2009<br>2013 | • 講師の作品と参加者の作品展。<br>• 会場：アートギャラリー<br>• 頻度：不定期 | ○ | ○ | | | | |
| 02<br>つくる：<br>子どものアトリエ | 個人の造形講座<br>個人の鑑賞講座<br>専門館連携 | | 1990<br>1991<br>2009<br>2018 | • 子どものアトリエ主体の事業への協力。<br>• 会場：子どものアトリエ、市民のアトリエ<br>• 頻度：不定期 | ○ | ○ | ○ | | ○ | |

| 個別年表 | 事業枠 | | 開催年度(西暦) | 概要<br>(記載のないものは一般[原則として12歳以上]対象) | 対応する理念<br>(※1は名称の定義のため省略) | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 |
| 03<br>つくる：<br>市民のアトリエ | 一般講座 | ワークショップ<br>トーク<br>レクチャー<br>オンラインプログラム | 1989<br>｜<br>2020 | • 立体、平面、版画、写真、映像、デザイン、身体表現等様々な表現を扱う。<br>• 作家や職員が講師を務める。<br>• 短期～長期開催。<br>• 学芸員と連携する場合もある。<br>• 会場：市民のアトリエ、オンライン等<br>• 頻度：通年 | ○ | ○ | ○ | ○ | | ○ |
| | | 制作公開相談会 | 1993<br>｜<br>2002 | • 各自の制作についての相談会。<br>• 様々なジャンルの作家がアドバイザーを務める。<br>• 参加者同士の意見交換。<br>• 会場：市民のアトリエ<br>• 頻度：年2-5回 | ○ | ○ | | ○ | | |
| | | 視覚に障がいのある人とない人がともに楽しむプログラム | 2012<br>｜<br>2013 | • 視覚に障がいのある人とない人を対象とした鑑賞、創作のワークショップ。<br>• 作家や職員が講師を務める。<br>• 会場：市民のアトリエ<br>• 頻度：年1-2回 | ○ | ○ | ○ | ○ | | |
| | | ライブラリー・トーク | 2018<br>｜<br>2020 | • 「写真集」をテーマに写真家等が独自の視点から語るトーク。<br>• 学芸員、司書と連携。<br>• 会場：美術情報センター、オンライン<br>• 頻度：年1回 | ○ | ○ | | ○ | | |
| | 研究会<br><br>※開館前の「市民のアトリエ研究会」とは異なる | | 1989<br>｜<br>2004 | • 自主的に制作に取り組む場を提供。<br>• 職員またはインストラクターが常駐。<br>• 短期～長期開催。<br>• 1989年度-版画研究会(銅版画、リトグラフ、シルクスクリーン)開始。<br>• 1992年度-表現研究会(絵画・平面)、造形研究会(立体)開始。<br>• 会場：市民のアトリエ<br>• 頻度：通年 | ○ | ○ | ○ | ○ | | |
| | 展覧会関連 | ワークショップ<br>デモンストレーション<br>トーク<br>レクチャー<br>オンラインプログラム | 1989<br>｜<br>2020 | • 出品作品や作家、テーマに焦点をあてて「つくる」視点から展覧会の見どころや魅力を紹介。<br>• 鑑賞と制作体験を組み合わせる場合が多い。<br>• 企画展、コレクション展、横浜トリエンナーレ等にあわせて開催。<br>• 作家や職員が講師を務める。<br>• 担当学芸員と連携。<br>• 会場：展示室、市民のアトリエ、オンライン等<br>• 頻度：不定期 | ○ | ○ | ○ | ○ | | ○ |
| | 中学生講座 | | 1990<br>｜<br>2013 | • 中学生を対象とした創作ワークショップ。<br>• 作家や職員が講師を務める。<br>• 会場：市民のアトリエ<br>• 頻度：通年(1998-2006年度)、<br>夏期(1990-1997、2009-2013年度) | ○ | ○ | ○ | | | |
| | オープンスタジオ | | 2005<br>｜<br>2020 | • 「研究会」の流れを汲む。<br>• 自主的に制作に取り組む場を提供。<br>• 内容は部屋の性質に合わせて版画、クロッキー、テラコッタ、木彫に限定。<br>• 職員またはインストラクターが常駐。<br>• 短期～長期開催。<br>• 会場：市民のアトリエ<br>• 頻度：通年 | ○ | ○ | ○ | ○ | | |
| | 横浜 美の職人 | | 2010<br>｜<br>2012 | • 市内の「美」にまつわるレクチャー、実演、創作ワークショップ。<br>• 職人が講師を務める。<br>• 地域の文化への理解促進。<br>• 会場：市民のアトリエ、市内工場<br>• 頻度：年2-4回 | ○ | ○ | ○ | | | |

| 個別年表 | 事業枠 | | 開催年度(西暦) | 概要<br>(記載のないものは一般[原則として12歳以上]対象) | 対応する理念<br>(※1は名称の定義のため省略) | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 |
| 03<br>つくる：<br>市民のアトリエ | 専門館連携 | | 2010<br>2016<br>2017 | • 財団が管理運営する文化施設が協働し、リソースを活用した事業を実施。<br>• 写真技法、ダンス、施設ガイドツアー。<br>• 作家や職員が講師を務める。<br>• 会場：市民のアトリエ、<br>横浜市民ギャラリーあざみ野等<br>• 頻度：不定期 | ○ | ○ | ○ | ○ | | |
| | 横浜みどりアップ・ワークショップ | | 2011<br>｜<br>2020 | • 横浜市が推進する「横浜みどりアップ計画」に連動した受託事業。横浜市環境創造局と連携して実施。<br>• 市内公園の散策などを取り入れたワークショップ。<br>• 自然への理解促進。<br>• 作家が講師を務める。<br>• 会場：市民のアトリエ、環境活動支援センター等<br>• 頻度：年1-4回程度 | ○ | ○ | ○ | | | |
| | 大学連携 | | 2012<br>｜<br>2020 | • 美術館と大学が連携し、リソースを活用した事業を実施。<br><br>【2012-2015年度　横浜美術大学】<br>• 一般参加者を対象としたワークショップ。<br>• 作家や職員が講師を務める。<br>• 学芸員と連携する場合もある。<br>• 会場：市民のアトリエ、横浜美術大学<br>• 頻度：年1-2回<br><br>【2015-2020年度　横浜国立大学教育学部】<br>• 特別養護老人ホームの利用者を対象としたワークショップ(2020年度はコロナ禍で中止)。<br>• 学生と協働して企画、運営。<br>• 作家や職員が講師を務める。<br>• 会場：戸部ハマノ愛生園<br>• 頻度：年1回<br><br>【2017年度　東京藝術大学】<br>• 一般参加者を対象としたアニメション・ワークショップ。<br>• 学生が運営補助として参加。<br>• 作家が講師を務める。<br>• 学芸員と連携。<br>• 会場：市民のアトリエ、レクチャーホール<br>• 頻度：単発 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | |
| | フレンズ | | 2012 | • 「横浜美術館コレクション・フレンズ」(市民が収蔵作品のサポーターになる支援プログラム)該当作品に関するレクチャー、見学会。<br>• 該当作品が展示されるコレクション展にあわせて開催。<br>• フレンズのメンバーと一般が対象。<br>• 作家や職員が講師を務める。<br>• 学芸員、渉外担当と連携。<br>• 会場：市民のアトリエ、展示室、外部工房<br>• 頻度：単発 | ○ | ○ | | | | |
| | シルバー・アートフェスタ | | 2013 | • 展覧会に関連する技法紹介、デモンストレーション、創作体験。<br>• 子どものアトリエと連携。<br>• 会場：グランドギャラリー<br>• 頻度：単発 | ○ | ○ | ○ | | | |
| | 企業連携 | | 2020 | • 企業の就労者を対象とした創作ワークショップ。<br>• 職員が講師を務める。<br>• 近隣企業とのネットワーク構築。<br>• 会場：企業オフィス<br>• 頻度：不定期 | ○ | ○ | ○ | | | |

| 個別年表 | 事業枠 | | 開催年度(西暦) | 概要<br>(記載のないものは一般[原則として12歳以上]対象) | 対応する理念<br>(※1は名称の定義のため省略) | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 |
| 04<br>まなぶ：<br>美術情報センター、研修、教育プロジェクト、シンポジウム等 | 教員研修 | | 2004<br>｜<br>2006<br><br>2019 | 【2004-2006年度】<br>• 市内の中学・高等学校の教員を対象とした創作ワークショップ。<br>• 作家や職員が講師を務める。<br><br>【2019年度】<br>• 市立学校の教員を対象とした創作ワークショップ。<br>• 職員が講師を務める。<br><br>• 会場：市民のアトリエ<br>• 頻度：年1-3回 | ○ | ○ | ○ | | ○ | |
| | レクチャー&デモンストレーション | | 2007 | • 美術品の取り扱いと保存に関するレクチャー、デモンストレーション。<br>• 専門家が講師を務める。<br>• 版画、油彩画、日本画、彫刻。<br>• 会場：アートギャラリー<br>• 頻度：単発 | | ○ | | | | |
| | 横浜市芸術文化教育プラットフォーム学校プログラム | | 2009<br>｜<br>2020 | • 横浜市が推進する、市内の芸術団体、文化施設、学校、アーティスト、企業、地域住民、行政等が連携・協力するプラットフォームのうち、学校教育とアートをつなぐ「学校プログラム」の一部をコーディネーターとして担当。<br>• 市立中学校を対象にした創作または鑑賞の出張授業。<br>• 作家が講師を務める。<br>• 会場：市立中学校<br>• 頻度：年1-3校程度 | ○ | ○ | ○ | | ○ | |
| | 展覧会関連 | トーク<br>デモンストレーション<br>ワークショップ | 2018<br>2019<br>2020 | • 展覧会のテーマや出品作品、作家に焦点をあてて「つくる」視点から展覧会の見どころや魅力を紹介する。<br>• 鑑賞と制作体験を組み合わせる場合が多い。<br>• 企画展、コレクション展、横浜トリエンナーレ等にあわせて開催。<br>• 作家や職員が講師を務める。<br>• 担当学芸員と連携する。<br>• 会場：展示室、市民のアトリエ、オンライン等<br>• 頻度：不定期 | ○ | ○ | ○ | ○ | | |
| 05<br>人材育成、市民参加 | ボランティア | | 2008<br>2017 | • 一般講座や展覧会に関連したワークショップの運営補助ボランティア。<br>• 会場：市民のアトリエ<br>• 頻度：不定期 | ○ | ○ | | | | |
| | 研修 | | 2013<br>｜<br>2014 | • 横浜国立大学教育人間科学部美術科の学生を対象とした教育普及活動に関する研修。<br>• 職員が講師を務める。<br>• 会場：市民のアトリエ<br>• 頻度：年1回 | ○ | ○ | | ○ | ○ | |
| 06<br>上映会、展覧会関連、パフォーマンス等 | アーティスト・イン・ミュージアム横浜 | パフォーマンス | 2005<br>｜<br>2006 | • 作家によるパフォーマンス。<br>• 2005年度は市民のアトリエが担当。2006年度は館内連携事業として実施。<br>• 会場：ボルティコ、グランドギャラリー等<br>• 頻度：年1回 | ○ | ○ | | ○ | | |
| 07<br>出版 | 記録誌 | | 1994<br>1997<br>2016 | • 「公開制作」の記録誌を編集、発行。<br>• 頻度：不定期 | ○ | ○ | | ○ | | ○ |
| | 研究紀要 | | 1997<br>2001 | • 横浜美術館が年1回刊行する研究紀要に、職員が講座の実施に基づく報告、研究論文を執筆し、掲載。<br>• 頻度：不定期 | ○ | ○ | | ○ | | |
| 08<br>営業渉外 | かもめスクール | | 2015<br>｜<br>2017 | • (社)横浜みなとみらい21主催で2014-2017年度に開催されたうちの一部を担当。<br>• みなとみらい21地区の就労者を対象とした創作ワークショップ。<br>• 職員が講師を務める。<br>• 会場：市民のアトリエ<br>• 頻度：年1-2回 | ○ | ○ | ○ | | | |

| 個別年表 | 事業枠 | | 開催年度(西暦) | 概要<br>(記載のないものは一般[原則として12歳以上]対象) | 対応する理念<br>(※1は名称の定義のため省略) | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 |
| 10<br>周年事業 | 講演<br>ワークショップ | | 2009 | • 開港150周年を記念した講演やワークショップ。<br>• 専門家、職員が講師を務める。<br>• 会場：市民のアトリエ、円形フォーラム、市内各所<br>• 頻度：不定期 | ○ | ○ | ○ | | | |

横浜美術館ウェブサイト「横浜美術館 全記録 1960-2021—構想、建設、開館、運営、活動」第Ⅲ章 個別年表
https://yokohama.art.museum/report/1960-2021/(参照 2023-11-25)

## 表2　横浜美術館の収支と市民のアトリエの動向

| 年度西暦(和暦) | | 収入(円) | 支出(円) | 収入平均(円) | 支出平均(円) | 市民のアトリエの動向 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1989 | (平成元) | 1,671,341,491 | 1,642,979,389 | 1,688,902,406 | 1,668,315,420 | **【第Ⅰ期】開館～1990年代**<br>**• 活動基盤の構築**<br>**• 大型事業の推進**<br>**• 市民参加の活況**<br><br>【背景】<br>• 潤沢な財源<br><br>【特徴的な事業】<br>• 公開制作(1989-2002年度)<br>• 研究会(1989-2004年度)<br>• 修了生・研究会生作品展(1990-2006年度)<br>• 制作公開相談会(1993-2002年度) |
| 1990 | (平成2) | 1,744,456,833 | 1,634,086,365 | | | |
| 1991 | (平成3) | 1,622,853,558 | 1,571,358,041 | | | |
| 1992 | (平成4) | 1,676,686,402 | 1,687,351,129 | | | |
| 1993 | (平成5) | 2,250,094,568 | 2,139,319,010 | | | |
| 1994 | (平成6) | 1,689,948,551 | 1,732,476,778 | | | |
| 1995 | (平成7) | 2,005,495,718 | 2,005,714,522 | | | |
| 1996 | (平成8) | 1,337,396,195 | 1,385,971,716 | | | |
| 1997 | (平成9) | 1,619,417,805 | 1,589,588,300 | | | |
| 1998 | (平成10) | 1,268,083,194 | 1,337,783,863 | | | |
| 1999 | (平成11) | 1,692,152,148 | 1,624,840,511 | | | |
| 2000 | (平成12) | 1,410,045,973 | 1,370,965,387 | 1,115,737,646 | 1,104,272,074 | **【第Ⅱ期】2000年代**<br>**• 事業変革期**<br>**• 集客と収入重視の堅実な事業運営**<br><br>【背景】<br>• 財団の統合(2002年)<br>• 指定管理者制度の導入(2006年)<br>• 財源の縮小<br><br>【特徴的な事業】<br>• アーティスト・イン・ミュージアム 横浜(2005-2006年度)<br>• オープンスタジオ(2005-2020年度) |
| 2001 | (平成13) | 1,399,726,749 | 1,334,407,192 | | | |
| 2002 | (平成14) | 1,072,113,447 | 1,137,494,800 | | | |
| 2003 | (平成15) | 1,067,095,527 | 1,123,267,603 | | | |
| 2004 | (平成16) | 965,376,662 | 1,070,014,284 | | | |
| 2005 | (平成17) | 1,383,207,539 | 1,242,398,984 | | | |
| 2006 | (平成18) | 985,873,801 | 916,475,784 | | | |
| 2007 | (平成19) | 954,233,054 | 923,800,169 | | | |
| 2008 | (平成20) | 1,049,836,355 | 1,048,601,478 | | | |
| 2009 | (平成21) | 869,867,349 | 875,295,062 | | | |
| 2010 | (平成22) | 1,290,254,834 | 1,265,093,153 | 1,161,621,446 | 1,122,646,351 | **【第Ⅲ期】2010年代～2020年**<br>**• 外部機関との連携強化**<br>**• 社会課題への取り組み**<br><br>【背景】<br>• 指定管理者制度<br>• 文化芸術基本法(2017年)<br><br>【特徴的な事業】<br>• 横浜市芸術文化教育プラットフォーム 学校プログラム(2009-2020年度)<br>• 横浜みどりアップ・ワークショップ(2011-2020年度)<br>• 大学連携(2012-2020年度) |
| 2011 | (平成23) | 894,053,173 | 823,119,888 | | | |
| 2012 | (平成24) | 1,282,003,781 | 1,139,599,175 | | | |
| 2013 | (平成25) | 1,273,558,705 | 1,214,638,426 | | | |
| 2014 | (平成26) | 1,017,210,506 | 1,010,629,647 | | | |
| 2015 | (平成27) | 1,095,794,324 | 1,080,605,445 | | | |
| 2016 | (平成28) | 1,126,428,135 | 1,126,428,135 | | | |
| 2017 | (平成29) | 1,040,713,482 | 1,024,235,845 | | | |
| 2018 | (平成30) | 1,281,788,089 | 1,216,300,344 | | | |
| 2019 | (令和元) | 1,328,226,369 | 1,307,143,182 | | | |
| 2020 | (令和2) | 1,147,804,513 | 1,141,316,619 | | | |

年度別の収入・支出の出典は以下の通り
横浜美術館ウェブサイト「横浜美術館 全記録 1960-2021—構想、建設、開館、運営、活動」第Ⅰ章 論考集 総論「横浜美術館のはじまり」柏木智雄、22頁
https://yokohama.art.museum/wp-content/uploads/2023/10/1-02.pdf(参照 2023-11-25)

### 4.2　市民のアトリエの活動の変遷

表1では事業枠のみを示した。これらの事業枠の中で多数の事業が実施され、その蓄積によって市民のアトリエは歴史を形づくってきた。

初年度から継続されたのは「一般講座」(「1. 長期講座」、「2. 短期講座」を含む)と「研究会」(2005年度から「オープンスタジオ」に改称)であり、これら二つが市民のアトリエの基幹事業であり続けてきた。一般講座は、テーマを設けて講師を招き、事前申込制で参加者を募り、内容に応じて1回から複数回の講座をおこなうものだ。絵画、彫刻など創作活動の場合もあれば、レクチャー、トークを主体とした場合もある。研究会(オープンスタジオ)は、絵画、立体、版画の分野ごとに、参加者がアトリエ設備を使って各々の制作に取り組むもので、職員またはインストラクターが常駐する。半日から数か月単位まで期間や日数には幅があり、都度申込制で運営される。

一方、「公開制作」と「制作公開相談会」は、2002年度を最後に終了した。公開制作は、作家を招聘し、美術館内外の様々な場所で市民と共に作品制作をおこない、その成果を展示する大規模な事業だ。制作公開相談会は、市民が制作した作品を持参し、作家からアドバイスや意見を求めることのできる機会だ。他に、S63年報告書には記載されていない新規事業が多数立ち上がり、終了したものも多い。これらの事業の変遷を追うと、三つの期間に分けて捉えることができる(表2)。

第Ⅰ期は開館から1990年代までだ。この時期は、公開制作に代表されるような大型事業が推進された。同時に、版画のみで始まった「研究会」が、表現(絵画・平面)、造形(立体)にも分野を広げ、一般講座も数多く実施するなど、市民のアトリエの活動の基盤を構築した時期だ。この時期の横浜美術館の年間収入の平均は16.8億円、年間支出の平均は16.6億円であり、潤沢な財源が市民参加の活況を下支えしたと言えるだろう。

第Ⅱ期は2000年代の変革期だ。2002年には財団の統合があり、2006年には指定管理者制度が導入された。2007年にはリーマン・ブラザーズの経営破綻を契機とした世界金融危機も発生している。このような変化を背景に、横浜美術館の年間収入の平均は11.1億円、年間支出の平均は11億円となり、大幅に財源が縮小し、事業内容の変更を余儀なくされた。先述した公開制作が終了したのもこの時期で、新規事業が立ち上がっても比較的短期間で終了することが多かった。一般講座や研究会(オープンスタジオ)は、集客と収入が重視され、堅実な事業運営が求められる傾向にあった。

第Ⅲ期は2010年以降で、教育機関や福祉施設といった外部との連携が活発になったことが特徴だ。横浜美術館のこの時期の年間収入の平均は11.6億円、年間支出の平均は11.2億円で第Ⅱ期より増えてはいるものの、2014年と2019年の二度にわたる消費税増税の影響は看過できない。第Ⅲ期も大型事業はおこなわず、その分、外部機関と連携し、環境問題や高齢化といった社会課題に取り組む小規模な活動を充実させていった。この背景には2006年の指定管理者制度の導入がある。共同事業体(財団法人横浜市芸術文化振興財団・株式会社相鉄エージェンシー・三菱地所ビルマネジメント株式会社)は、横浜美術館の第一期指定管理[9]の提案書で「美術とまち、アーティストと市民をつなぐアート・コミュニケーション・ミュージアム」というスローガンを掲げ、地域に開かれた美術館像を提示した。市民のアトリエもこの全体方針に則って、地域との連携を強化させていった時期と言えるだろう。

### 4.3　理念と活動実績を照らし合わせたときに浮かび上がる課題

このようにこれまでの活動を概観すると、初めは市民のアトリエ研究会で示された方針に沿って事業が展開されたが、時代の状況や社会の要請に応じて少しずつ活動を変化させてきたことがわかる。この間、当初示された市民のアトリエの理念はどの程度実現されてきただろうか。

(1)、(2)、(3)、(4)の理念は根幹をなし、一貫して活動に反映されてきたと言えるだろう。(6)については、子どものアトリエや教育機関との連携は部分的に実現しており、今後も継続、発展させていくことが必要だ。

(5)、(7)については、残念ながら次第に後退してはいないだろうか。(5)のうち「美術造形活動研究機関」の取り組みとしては、研究紀要2本[10]や、公開制作の記録誌3点[11]などが挙げられるが、今後より注力すべき点だと考える。例えば、報告会やシンポジウム等の開催、外部で事例発表をおこなうなど、定期的に市民のアトリエの活動を振り返る機会を設けることが必要だろう。また、第Ⅱ期以降、財源の縮小により活動の質に変化があったことは前述した通りだ。先鋭性ある事業を担保するためには、定量、定性双方の評価の視点と、活動の質について議論できる場、十分な予算確保が必要ではないだろうか。(7)の国際性をはかるための一つの例として、市民のアトリエで事業をおこなった海外からの招聘作家の人数を挙げてみると、第Ⅰ期では11名、第Ⅱ期では6名、第Ⅲ期は該当なし[12]、と減少が見られる。これは財源の縮小に起因するところが大きい。加えて、第Ⅲ期以降、国際性よりも地域との連携や市民の活動の中間支援に比重を置いたのも要因の一つだろう。しかし、地域に軸足を置きながら国際性を視野に入れた活動を展開することは不可能ではない。例えば、これまでより積極的に横浜トリエンナーレに関わる活動を推進したり、在住外国人と美術館をつなぐ活動を実施したりするなど、身近なところから国際的な取り組みを広げることができるのではないだろうか。

## 5. むすび

1980年代、市民の参加や体験を重視する博物館像が提唱されるなか横浜美術館は開館し、市民のアトリエも設けられた。開設に先立ち市民のアトリエ研究会が組織され、理念や命題、事業内容について検討された。「〈つくる〉ことにより美術を考える」という命題は、創作体験の喜びを出発点に美術への思考を深め、創作と思考を往還することを促しており、今後も重要な指針であり続けるだろう。開館以降、運営組織の体制や職員のあり方は時代に応じて変化してきた。また、活動内容も財源や社会の変化を受け止めて変遷してきており、開設当初の理念と照らし合わせたときに様々な課題があることが確認できた。

では、近年の美術館をめぐる状況には、どのような変化が見られるだろうか。2017年、国内では文化芸術振興基本法(2001年制定)が文化芸術基本法に改正された。この改正により、文化芸術そのものの振興に加え、観光・まちづくり・国際交流・福祉・教育・産業等文化芸術に関連する分野の施策が新たに法律の範囲に取り込まれ、推進することが期待されている。2022年には博物館法が改正され、博物館同士のネットワークや、教育、まちづくり、観光、福祉といった様々な分野の主体との連携強化がうたわれた。市民のアトリエが2010年代以降に強化してきた外部機関との連携や社会課題への取り組みは、今後ますます求められていくだろう。

また、2022年8月に開催されたICOM(国際博物館会議)で、以下の新しい博物館の定義が採択された。

博物館は、有形及び無形の遺産を研究、収集、保存、解釈、展示する、社会のための非営利の常設機関である。博物館は一般に公開され、誰もが利用でき、包摂的であって、多様性と持続可能性を育む。倫理的かつ専門性をもってコミュニケーションを図り、コミュニティの参加とともに博物館は活動し、教育、愉しみ、省察と知識共有のための様々な経験を提供する。

「包摂的」「多様性」「持続可能性」といった言葉は、横浜美術館が開館した1980年代には語られることの少なかったキーワードだ。この定義が採決される前年、横浜市芸術文化振興財団は、横浜美術館の第三期指定管理[13]の提案書[14]で「みなとモデル」の3つの取組[15]と、7つの事業目標[16]を掲げた。そこに登場する「さまざまな人」「持続可能」といった言葉は、ICOMの定義にも呼応する。教育普及に関しては以下のように述べられている。

【事業目標3(教育普及)】美術と人々を様々な糸口でつなぎ、生きる力を培います。

これに基づき、教育普及グループの若手、中堅職員が中心となり、2021年度から積極的、多面的に横浜美術館の教育普及活動における今後10年の理念を話し合い、2022年4月に以下のように整理した[17]。

横浜美術館は、以下の4つの観点を重視した教育普及活動を通して、新しい価値を市民と共に創造し、共生社会の実現を目指します。

- 誰もが安心して自分らしくいられること。
- さまざまな人や作品、考え方、社会課題に出会い、コミュニケーションできること。
- 何度訪れても感性が刺激され、新しい視点を得られること。
- 自ら発見し考える力を養えること。

鑑賞、創作活動を含めた教育普及活動の理念として作成したため、〈つくる〉という表現を用いていないが、「自ら発見し考える」という思考を促す言葉は、市民のアトリエの命題とも重なる。ICOMの定義に含まれるキーワードも、「誰もが安心して自分らしくいられる」「さまざまな人」といった別の言葉に言い表されている。

このように、横浜美術館は現在の美術館をめぐる状況に応えるように目標や理念を更新している。市民のアトリエもそれに応じながら、美術館の中の創作の場であることを自覚し、その意義をいま一度見つめ直す必要があるのではないだろうか。

筆者は意義を以下のように考える。まず一つ目は、様々な立場の人々が集う美術館ならではのフラットな関係性の中で学びを深めることだ。横浜美術館開館30周年に際し発行された『美術でつなぐ人とみらい』に掲載された伊藤亜紗のエッセイ「『つくる』をめぐる実験」[18]で市民のアトリエは以下のように表現されている。「市民のアトリエは横浜美術館にとってのラボのようなものかもしれない」「参加者とアーティストとエデュケーターが一緒になって、『つくるとは何か』を研究しつづけるラボだ。」これは市民のアトリエの長年の蓄積の中で大切に育んできた参加者との関係性によるもので、再開館後もその風土を継続していくことがのぞまれている。

二つ目は、創作と鑑賞を行き来することで思考を深めることだ。横浜美術館は開館当初から「観る(みる)」、

「創る(つくる)」、「学ぶ(まなぶ)」を事業設計のキーワードとしてきた。この言葉は横浜美術館の展示室、アトリエ、美術情報センターそれぞれの機能を端的に指し示している。それらをより有機的に結び付け、鑑賞と創作を往還するプログラムを組み立てたり、来場者の行動を促したりすることが必要だ。そのためには市民のアトリエも、より一層他の部署と連携していかなければならない。

最後に、創作することで得られる根源的な喜びを忘れてはならない。機械化、情報化が進み、様々な困難に直面する現代では、多くの人々が不確かな未来に不安を感じている。そのようななか、自らの身体を動かして創作することは、確かな実感を伴い、人間性を回復する有効な手立てとなりうる。美術館という様々な人々が訪れる場所に創作の場があることで、制作を通して自らを見つめ直す機会がたくさんの人々に開かれている。いかに時代が変化しようとも、市民のアトリエは〈つくる〉ことに立脚して、人々が思考し、生きる力を獲得していくことのできる場であることが必要だ。

(横浜美術館教育普及グループ エデュケーター／森)
(横浜市民ギャラリーあざみ野 学芸員・エデュケーター／北川)

**【謝辞】**

本稿の執筆にあたり、市民のアトリエ研究会元委員の海老塚耕一氏、横浜美術館元職員の浅見信夫氏、林信行氏、三ツ山一志氏、関淳一氏、職員の柏木智雄氏、木下貴博氏にご協力いただいた。ここに感謝を示したい。

1 竹内順一による第三世代の博物館の問題提起に基づき、伊藤寿朗が博物館の主要な機能と事業形態を世代ごとに整理した。第三世代を「社会の要請にもとづいて、必要な資料を発見し、あるいはつくりあげていくもので、市民の参加・体験を運営の軸とする将来の博物館である。」と定義した。伊藤寿朗「現代博物館考」(『調査季報94号・特集／博物館を考える』1987年)

2 後に、臨時教育審議会答申によって、生涯教育に代わり生涯学習という用語が一般的に用いられるようになる。

3 「横浜市地区センター条例」1973年6月20日施行

4 アトリエディセット(Atelier 17)とは、イギリス出身の画家、版画家のスタンリー・ウィリアム・ヘイターがパリで運営した版画工房。世界中からアーティストが集まり制作がおこなわれた。

5 振興部から事業部、美術学習部への変遷については以下に詳しい。三ツ山一志「美術館教育普及国際シンポジウム1992を振り返る」(『横浜美術館研究紀要 第9号』2008年)

6 奥谷、島田、立石は1987年度より委員に加わる。

7 『豊かな市民文化の創造を求めて』横浜市民文化振興協議会、1983年6月

8 横浜美術館ウェブサイト
https://yokohama.art.museum/report/1960-2021/(参照 2023-11-25)

9 2008年4月1日から2013年3月31日までの5年間。

10 林信行「講座『新旧の素材と表現・その試み』に使用した素材について、及びその受講生作品一例の画面状態について(報告)」『横浜美術館研究紀要 第1号』1998年／馬場伸子「市民のアトリエ係における日本画に関連する講座記録と、教育普及活動についての報告」『横浜美術館研究紀要 第4号』2002年

11 スーザン・ダージェス『カメラを使わない写真』横浜美術館市民のアトリエ、1994年／『「版からのひろがり」: missing road 負の景シリーズ：森野眞弓ワークショップ1997』横浜美術館市民のアトリエ、1997年／『Collagen und Worte：コラージュと言葉：「複製技術と美術家たち」展に際してマックス・エルンストによるこの主の芸術を学んだ紳士淑女による』横浜美術館市民のアトリエ、2016年

12　海外からの招聘作家は次の通り。市民のアトリエ単独ではなく、展覧会に関連して招聘された作家を含む。
【第Ⅰ期】1992年：ケネス・タイラー、フランク・ステラ、1993年：キース・ハワード、1994年：スーザン・ダージェス、ゲリー・ファビアン・ミラー、1996年：ビチョック・ムクダマネ、1997年：キャサリン・ワグナー、1998年：レネ・ロゥビチェク、ピーター・ガイスラー、1999年：マーゴ・メンシング、ジョン・マックイーン
【第Ⅱ期】2003年：ダン・ウェルデン、2004年：ニック・セメノフ、2005年：サビーヌ・デルクール、レイチェル・ロザレン、ロイ・スターブ、クリストファー・クック

13　2023年4月1日から2033年3月31日までの10年間。

14　横浜市ウェブサイト
https://www.city.yokohama.lg.jp/business/kyoso/public-facility/kaku-katsuyou/bunka/senteihyoka/bijyutukansenntei/yma-siteikanrisentei.files/03yma2teiansho.pdf（参照 2023-11-25）

15　(1)さまざまな人や情報が行きかう場所となる
(2)持続可能かつ質の高い活動を実施する
(3)健全な経営意識を育成する

16　【事業目標1(コレクション)】魅力的なコレクションを形成、活用するとともに、未来へ継承します。
【事業目標2(展覧会)】質の高い多様な展覧会の実施を通じて新たな美術の価値を創造し、来館者の裾野を拡げます。
【事業目標3(教育普及)】美術と人々を様々な糸口でつなぎ、生きる力を培います。
【事業目標4(施設運営管理)】諸活動の基盤を整備し、社会情勢の変化に対応できる施設運営を行います。
【事業目標5(地域連携)】横浜市の中核的な文化拠点として、地域の様々な施設や団体と連携し、地域社会のポテンシャルの向上に貢献します。
【事業目標6(長期休館中の業務)】大規模改修による長期休館を活かし、横浜美術館のプレゼンスの向上を図ります。
【事業目標7(新型コロナウイルス感染症への対応)】新型コロナウイルス感染症の影響を想定し、施設運営を継続します。

17　再開館後の教育普及活動について検討するために、2021年6月に教育普及グループ内の若手、中堅職員によるe未来プロジェクトが立ち上がった。プロジェクトメンバーが主体となり、教育普及グループの職員全員での話し合いを経て2022年4月に理念を作成した。e未来プロジェクトは2022年11月に活動を終了した。メンバーは以下の通り。
【2021年度】櫻庭瑠実、園田泰士、太田雅子、森未祈、古藤陽、北川裕介
【2022年度】大塚真弓、園田泰士、森未祈、古藤陽、北川裕介、泉桐子

18　『横浜美術館開館30周年記念 美術でつなぐ人とみらい』横浜美術館、2019年、82-91頁

# 大谷研究室旧蔵「こどもの国児童館・A地区児童遊園」資料群に見るイサム・ノグチと大谷幸夫による設計過程―上　原案完成まで

中村 尚明

## はじめに

横浜市青葉区と東京都町田市にまたがる約97ヘクタールの豊かな丘陵地に、中央児童厚生施設「こどもの国」がある[1]。園内北西部、A地区と呼ばれた一画に、かつて彫刻家イサム・ノグチ（1904–1988）と建築家大谷幸夫（1924–2013）が共同してデザインした「A地区児童遊園」と「児童館」があった。これらの施設は1965年に設計が始まり、翌66年に施工された[2]。1933年作の《プレイマウンテン》（模型）以来、数々の児童遊園（プレイグラウンド）をデザインし、提案してきたイサム・ノグチにとって、「こどもの国」での仕事は初めて実施に至ったプレイグラウンド作品となった。早くも着工前から注目を集め、1966年から1967年にかけて建築専門誌でも大きく取り上げられた[3]。しかし、当初の計画のすべてが実施されたわけではなかった。まず屋外スケート場（スケートリンク）が1965年末頃、次に児童館とその周辺施設が翌年8月に竣工し、前者は1966年1月15日、後者は1966年秋頃に来園者の利用に供された[4]。建設が期待された残りの部分はごく一部を例外として実施に移されることはなかった。完成した施設も老朽化を理由に1985年にほとんどが取り壊され[5]、代わりに別の設計者による「児童センター」、大小の温室をはじめとする新しい施設が建てられ、それに伴い敷地の様相も変化した。往

1　「こどもの国」は皇太子殿下（現上皇陛下）御結婚を記念して1965年5月5日に国（厚生省所轄：当時）の中央児童厚生施設として開園した。建設資金はご成婚に際して国民から寄せられた祝い金が端緒となり、国費及び民間からの寄付で賄われた。当初は経営主体となる国の特殊法人の設立が遅れたため、財団法人こどもの国建設協力会が運営し、開園後も施設建設は継続していた。開園から1年半後の1966年11月に特殊法人こどもの国協会が発足した。現在は社会福祉法人こどもの国協会が運営している。用地は旧日本陸軍の弾薬製造所兼保管庫で、第二次大戦後に米軍が使用した後返還された。「こどもの国」の成立過程については以下を参照。
『こどもの国20年の歩み』社会福祉法人こどもの国協会、1985年／池田邦二編『こどもの国三十年史』社会福祉法人こどもの国協会、1996年／三国治編『こどもの国50年史』社会福祉法人こどもの国協会、2016年／金子淳「象徴天皇制の磁場に生まれた“夢の空間”―中央児童厚生施設『こどもの国』の設立過程から―」『静岡大学生涯学習教育研究』No.11（2009年）pp.19–37

2　『こどもの国50年史』では、1965年設計、翌年8月完成とあるが、大谷研究室旧蔵資料群の図面は1966年に作図されたものも多い。また同書では、同じイサム・ノグチ設計のスケートリンクを児童館・児童遊園とは別の施設として紹介している。これは事業（予算）区分によるものと思われるが、小論ではこれらを一体の施設として論ずる。『こどもの国50年史』pp.261–262

3　ノグチと大谷による「こどもの国」児童館・児童遊園は設計段階から竣工後にかけて次の雑誌に紹介された。イサム・ノグチ、大谷幸夫「こどもの国・児童館と遊園地」『SD』No.13（1966年1月）pp.61–63／「こどもの国 遊園・児童館／イサム・ノグチ、大谷幸夫」『建築』No.66（1966年2月）pp.84–88／大谷幸夫、イサム・ノグチ「こどもの国児童館と遊園地」『建築』No.72（1966年8月）pp.93–95／「こどもの国・児童館 屋根のある遊び場 横浜市港北区奈良町こどもの国 設計 大谷幸夫」『新建築』42（9）（1967年9月）113–119／“The Children's Land Juvenile Hall (Playground with Roofs)” *The Japan Architect. International Edition of Shinkenchiku,* No.136（November 1967）, pp.21–27

4　「スケートリンク開く 1月15日から―こどもの国―」『こどもの国ニュース』No.3（1966年1月）財団法人「こどもの国建設協力会」事務局／「完成近づく児童遊園」『こどもの国ニュース』No.11（1966年10月）／『こどもの国50年史』p.262

5　『こどもの国50年史』p.264、資料編p.22

時の面影を今に伝えるものとしては、児童館へのアプローチの一部であった石積み擁壁に縁取られた通路と門、それらに付随する旧公衆便所と階段、そして児童館敷地の中心に位置した固定遊具《丸山》と児童館西側の《小橋》などである。児童館敷地の北にはイサム・ノグチがデザインした遊具《オクテトラ》がいくつか置かれているが、当初に計画されたものではなく、A地区児童遊園オープンの3年後、1969年に彫刻家が寄贈したものである[6]。

これまで「こどもの国」児童館・A地区児童遊園のオリジナル・デザイン（原案）を示す資料と考えられてきたのは、前述の雑誌に写真掲載された石膏模型（fig.1）と、『建築』誌1966年2月号に掲載された配置図（1：1200）である。その他の資料としては、彫刻家と建築家それぞれのごく簡潔な文章と、竣工前後の現場写真、配置図やイサム・ノグチの遊具、建築部分の設計図とスケッチ（いずれも青焼）がいくつか知られている[7]。小論は美術史的観点から、「こどもの国児童館・A地区児童遊園」を彫刻家と建築家の共同による作品として位置付けることを目的とする。たとえ部分的実施に留まったとしても、あるいは既に施設が取り壊されたとしても、また仮に全く施工されなかったとしても、オリジナルの石膏模型と纏まった建築図面によってその全容が客観的に把握可能であるならば、それは既にプロジェクトではなく彼らの作品として成立しており、作曲家の楽曲のごとく、作品は存在するのである。そうであれば、原案はいかなるコンセプトでどのように作られたのか、またそれは設計から施工に至る過程でどのように変化し、何がどの程度まで実施されたのかを問うことで、作品を確認しなければならない。また、イサム・ノグチと大谷幸夫の共同はどのように行われたのか。こうした基本的な問題については、これまで史資料的に跡付けられておらず、実相を詳らかにしない[8]。

fig.1

fig.1　村井修《こどもの国児童館・A地区児童遊園石膏模型写真》1965–1966年、ノグチ・アーカイヴ（ニューヨーク）蔵
〈Plaster Model of the Playground and Children's House in Zone A of the Kodomo No Kuni〉 1965, Photo ©Osamu Murai, The Isamu Noguchi Archive (New York)©The Isamu Noguchi Foundation and Garden Museum, New York/ARS-JASPAR, 写真©村井修

6　「『こどもの国』に変った彫刻」『こどもの国ニュース』No.46（1969年12月）

7　註3の雑誌のほか、下記の資料がある。
Isamu Noguchi, *Isamu Noguchi A Sculptor's World,* Steidl, 2004（Original 1968）, p.179, Pl.251–253／大谷幸夫「イサム・ノグチさんのこと」『PLAY MOUNTAIN イサム・ノグチ＋ルイス・カーン』マルモ出版、1996年、pp.136–138／Ana Maria Torres, *Isamu Noguchi A Study of Space,* The Monacelli Press, 2000, pp.28–35／『「こどもの国」のデザイン—自然・未来・メタボリズム建築』文化庁国立近現代建築資料館、2020年、pp.10–14

8　イサム・ノグチのプレイグラウンドの系譜を記述したシェイナ・ラリヴェーは次のように指摘している。「こどもの国のプレイグラウンドはしばしば完成したと記述される。しかし実際には何が元々建設されたのかを確かめることは困難である。建設場所は結局破壊されたからである。」（論者訳）Shaina D. Larrivee, (2011) "Playscapes: Isamu Noguchi's Design for Play," *Public Art Dialogue,* 1：01, 53–80, DOI：10.1080/21502552.2011.536711, Note 59.

2023年、大谷幸夫の建築設計事務所である大谷研究室(1967年「設計連合」から分離)の代表山本敬則氏より、同研究室が所蔵する「こどもの国児童館・A地区児童遊園」の石膏模型(1：300)と、関連する図面、スケッチ等150余点一式を横浜美術館に寄贈したい旨の意向が示され、2023年度受贈に向けて手続きが進行している(本稿執筆時：2023年12月現在)。これら一群の資料全体を小論では「大谷研究室旧蔵『こどもの国児童館・A地区児童遊園』資料群」と呼び、文中では適宜「大谷研究室資料群」と略記する。資料の主体は手描きのオリジナル図面(鉛筆、トレーシングペーパー)で、設計図、設計補助図、試案段階に位置づけられる図面、構想スケッチ、コンタ(等高線)図等、上記の問題解明につながる資料が多数含まれており、新たな史実が浮かび上がりつつある。論者はこれらの資料を調査する機会に恵まれ目下継続中であるが、小論(上)はその最初の報告として、大谷研究室資料群の概要を示した後、代表的資料を取り上げて他の史資料と照応させながら1)大谷幸夫によるイサム・ノグチ参加以前の児童館プラン、2)イサム・ノグチによる児童館・児童遊園構想と大谷幸夫との共同設計の展開、3)石膏模型と原案配置図の内容(ランドスケープ・デザイン、個別遊具施設、児童館)を記述し、ノグチ参加前から児童遊園原案完成までの経緯を可能な限り跡付けることを目標とする。原案からの設計変更と施工の経緯については、大谷研究室資料群の目録とあわせて次稿(下)で記述する。小論上下をもって作品としての「こどもの国児童館・A地区児童遊園」の実相を明らかにすると共に、イサム・ノグチのプレイグラウンド作品群における本作の意義を考察しようとするものである。なお、大谷研究室資料群の図面等の図版は本来スキャニングによるべきであるが、現段階では用意できないため、論者が限られた条件下で撮影したものを著作権者の了解の下に使用する。

小論中の図面内容の特定については次の原則に従った。図及び各施設の名称、図番は図の標題欄の表記に、標題欄がない場合は図中の書き込みに基づく。標題欄、書き込み共にない場合の名称は、関連する他の図面の表記を参考に論者が作成し、識別のため冒頭に＊を付した。

## 1. 大谷研究室旧蔵「こどもの国児童館・A地区児童遊園」資料群の概要

大谷研究室資料群は1)石膏模型1点(後述)と2)図面・スケッチ群157点からなる。2)は制作時期により、イサム・ノグチの実質的な設計参加(1965年9月)の前(A群)と以降(B群)の資料に分けることができる。また児童館関連図面は内容的に3案(内2案がA群)に大別されることが本調査で判明したため、それぞれ第1案、第2案、第3案とする。A、B両群を通して一部の図面には日付が記されている。図面・スケッチ群の作成は「こどもの国マスタープラン」を除き設計連合(当時)の大谷幸夫チーム、後の大谷研究室(一部は大谷幸夫本人)による。これらの資料群は大谷研究室に引き継がれ、2023年まで保管されていた。

A群は内容別に、以下の3グループに分類される。

a)環境開発センター(代表：浅田孝)作成の「こどもの国」計画の全体像を表すコンタ入りの配置図「マスタープラン」。青焼2件3点(2件とも南半分と北半分の2図から成るが、1件は南半分のみ現存)　計3点。

b)大谷幸夫が1964年にデザインした児童館第1案に関するもの　計27点。

内訳：(以下同)

- 図番と標題欄付き立面図断面図(青焼1点、こどもの国建設推進委員会への提出図面。昭和39年の年記と図番02をもつ)
- 配置図エスキース(構想段階の素描。手描き7点：内2点は同一紙面に3案を、他は1点1案を示す)
- 配置図(コンタ入り)・平面図(手描き6点、青焼1件3点：青焼は同一図を一件とする。以下同)
- 鳥瞰スケッチ(手描き2点、青焼2件3点)
- 敷地コンタ図・断面リスト(手描き1点、青焼1件2点)
- 敷地断面図(手描1点、青焼1点)

c)大谷幸夫が1965年にデザインした児童館第2案に関するもの　計7点。

- 配置図(手描き2点：共に1965年8月10日の日付入り)
- 東西立面図・屋根伏図(手描き1点：1965年8月10日の日付入り)
- 断面図・立面図(手描き1点)
- 詳細図(手描き1点)
- コンタ図(手描き1点、青焼1点)

B群は図面の用途及び内容に応じて次のように分類できる。

d)A地区児童遊園(児童館含む)敷地の実測図及びコンタ図。手描き計4点。

e)イサム・ノグチのランドスケープ・デザインを図面化した最初期の配置図2点及び敷地断面図1点、並びにノグチのデザインにより1965年に施工されたスケートリンク平面図1点。全て手描き、計4点。

f)図番を付され、図面リスト(図番000、300)と共にまとめられた、施工のための設計図(完成図面)：A地区児童遊園の標題をもつグループ(図番001-002、301-310)12点(001以外はイサム・ノグチの署名あり)と児童館(第3案)の標題をもつグループ(意匠設計図：図番001-007。但し001「特記仕様書」と002「配置図」は児童遊園と共用／構造設計図：図番101-107／設備設計図：図番201-207)19点。全て手描き、計33点(仕様書・図面リスト含む)。

ここでの「A地区児童遊園」、「児童館」の標題は、工事予算の別(事業区分)に基づくものと思われ、必ずしもデザイナーの担当区分とは一致しない。

いずれの図面も年記、日付をもたないが、1965年のノグチ滞在期間中から1966年5月頃にかけて作図されたと推測される。この他、図番002(配置図)に若干の変更を加えた配置図ジアゾタイプ(裏焼。図番なし、標題欄あり)が1点あり、これには1966年6月2日の日付があることから、本グループ図面の作成時期の下限と考えられる。

g)上記f)を補う設計補助図。R-の図番(R-1～13、R-15～21。但しR-14は欠番。R-21には番号重複1点、R-記号のみで番号のないもの1点、さらにR-11'、R-13'がある)が付されている。全て手描き、計24点。

h)図番はないが、標題欄と大谷幸夫の印をもつ設計補助図。内7点は部分竣工時の1966年8月15日の日付を持つ。施工期間中の図面と思われる。全て手描き、計9点。

i)図番、標題欄がなく、上記3グループ(f、g、h)の図面に含まれないイサム・ノグチのランドスケープ・デザインの要素、または児童館敷地内の遊具施設を表す図面類。上記f)の図面を補完する設計補助図4点、試案段階の図面4点とスケッチ1点。全て手描き、計9点。

j)図番、標題欄がなく、大谷幸夫の児童館第3案の建築にかかる図面17点とスケッチ7点、及び構造計算書(9頁)1点。全て手描き、計25点。

k)図番はないが、標題欄をもち(内1点にはイサム・ノグチの署名と大谷幸夫の印)、1966年8月の部分竣工以降に作図終了したと考えられる、施工予定対象の図面。全て手描き、計4点。

l)図番、標題欄がなく、目下表現対象が特定できていない施設並びに備品等の図面及びスケッチ。全て手描き、計7点。

A群とB群の総計157点。

## 2. イサム・ノグチの設計参加までの経緯

本題に入る前に、イサム・ノグチと大谷幸夫の共同が始まるまでの経緯を簡単に確認しておきたい。「こどもの国」の計画段階では、こどもの国建設推進委員会(以下「建設推進委員会」)の委員で建築家の浅田孝(環境開発センター所長)がマスタープラン(全体計画図)を作成したとされる[9]。『こどもの国50年史』によれば、浅田のマスタープラン設計者への起用は1961年10月19日に内定した。浅田は約1ヶ月後の建設推進委員会準備小委員会に叩き台を示し、一部修正の後、原案を同年11月24日の建設推進委員会で発表した。決定された日付は不明とある[10]。実施段階では個々の建築物や公園施設を専門家に依頼することになり、浅田が中心となって人選し、1963年11月6日の建設推進委員会総会と財団法人こどもの国建設協力会評議委員会で建築、造園、彫刻、動物などの各部門の専門家14人からなる「設計集団」が認められた[11]。建築部門では浅田孝、大高正人、菊竹清訓、黒川紀章、鈴木章、大谷幸夫が依嘱された。この段階でイサム・ノグチは「設計集団」に参加しておらず、『こどもの国50年史』では後に「特別参加した」と記されている[12]。ノグチの特別参加がどのように決まったのかを記す資料は見つけられていないが、大谷幸夫は「浅田(孝)さんがイサムさんを推薦された」と論者に語っている[13]。

ニューヨークのイサム・ノグチ・ミュージアム(以下「ノグチ・ミュージアム」)のアーカイヴ(The Isamu Noguchi Archive. 以下「ノグチ・アーカイヴ」)には、イサム・ノグチとこどもの国建設協力会[14](以下「建設協力会」)会長足立正との間で交わされた契約書(Contract)が残されている。全文1頁、6項目からなる簡潔な内容で、日付がなく、イサム・ノグチと、足立に代わり衣奈多喜男(建設協力会常務理事、朝日新聞社企画部長)が署名している。中でもノグチへの委嘱内容と大谷との関係についての項目が注目される。契約の第1項には、

9 1961年から1963年頃まで環境開発センターに勤務していた建築家西原清之は、「こどもの国」マスタープランを設計したのは浅田ではなく西原であったと述べている。豊川斎赫『丹下健三とKENZO TANGE』オーム社 2013年 pp. 230-231

10 『こどもの国50年史』pp.55-56

11 ibid.pp.253-254

12 ibid.p.261

13 論者による大谷幸夫との面談記録。2006年7月5日、大谷研究室にて。

14 財団法人こどもの国建設協力会は、それまで建設計画を進めてきた建設推進委員会が任意団体で寄付金の受け入れに制限があったため、これを円滑に進めることを主な目的として1962年に設立された。『こどもの国50年史』pp.217-219

建設協力会(A)はイサム・ノグチ(B)に「こどもの国A地区における児童遊園(Children's Playground)と児童館(Children's House)のための基本デザイン(basic design)を委嘱する」とあり、第6項にはイサム・ノグチの「基本デザインの内、細部については大谷幸夫によってデザインされる」と記されている(論者訳)。同じ署名入り契約書の対の一部がこどもの国協会に所蔵されていたが、これにも日付はない[15]。

イサム・ノグチとこどもの国側との通信中、確認できる最も早いものは衣奈多喜男発1964年12月23日付書簡で、「Children's Gardenのためにあなたが必要とされる資料を送ります。あなたが日本の子供たちのために作ることになったデザインを楽しみにしています」(論者訳)とある[16]。この書簡は契約書には触れていないが、衣奈らは1964年に恐らく日本でノグチと面会し、設計参加の同意を得ていたことが窺える。建設協力会では1964年末までにはイサム・ノグチへのA地区児童遊園のデザイン依頼が内定していたと言える。ノグチと建設協力会の契約書締結時期については、建設協力会の昭和40年度児童遊園整備事業の報告書に、1965年11月1日であったことが記されている[17]。

一方、大谷幸夫チーム(設計連合)との契約は、建設協力会長足立正(甲)と株式会社設計連合代表取締役谷寛之(乙)との間で、建設推進委員会委員浅田孝(丙)を立会人として1966年2月10日付で結ばれている。ノグチと大谷チームによる設計作業は1965年に始まっており、この契約締結もノグチとのそれと同じく後追いであった。第一条「甲は『こどもの国』児童遊園造成工事を実施しようとし、イサム・ノグチ氏の基本設計に基づく実施設計及び監理を乙に依嘱し乙はこれを受託する。」第二条「乙は委託業務の遂行にあたりイサム・ノグチ氏の指導及び承認を受ける。」とある[18]。「児童館」という言葉は出てこないが、ノグチとの契約の整合から「児童遊園造成工事」に含まれていたか、あるいは「児童館」設計に関する大谷幸夫との委託契約が別途存在した可能性が考えられる[19]。

これら二つの契約書を見る限り、イサム・ノグチが児童館を含むA地区児童遊園全体をデザインし、大谷幸夫とそのチーム(設計連合)はそれらの実施設計と監理を行うという役割を読み取ることができる。

以下に、A群、B群の中から具体的な図面を適宜取り上げながら、ノグチ参加以前と以後の展開を跡付ける。

---

15 ノグチ・アーカイヴ蔵、資料番号MS_PROJ_041_001及び財団法人こどもの国協会所蔵(論者による2006年調査時に同協会の好意により複写入手)。引用した項目の原文は下記の通り。"1. A entrust to B the basic design for the Children's Playground and the Children's House in 'a' zone for Children's Land, and B undertakes to provide the design." "6. The details within B's basic design will be designed by Yukio(sic!) Otani, and A agrees to pay Yukio Otani for his work."

16 ノグチ・アーカイヴ蔵、資料番号 MS_PROJ_041_002

17 財団法人こどもの国建設協力会「昭和40年度児童遊園整備事業の(仮)完了報告書」、『児童遊園 第二遊園』綴、文化庁国立近現代建築資料館蔵、資料番号17-4-7。同報告書には設計連合との契約締結日(1966年2月10日)も記されている。

18 財団法人こどもの国協会所蔵(2006年調査時)。

19 大谷幸夫は1964年4月の東京大学助教授就任を機に設計連合を退職していた。児童館設計に関する契約書は見つかっていないが、大谷幸夫はノグチの児童遊園設計の手伝いと共に、「建物の設計も委託された」と回想している。大谷幸夫「イサム・ノグチさんのこと」p.138

## 3.「こどもの国」マスタープラン(1961-1964)とイサム・ノグチ参加以前の大谷幸夫による「児童館」の第1案と第2案(1964-1965)

**A群a)環境開発センターによる《こどもの国計画マスタープラン》の青焼2件**

「こどもの国」マスタープランには複数のバリエーションが存在するが、大谷研究室資料群には環境開発センター作成の1962年2月14日付《こどもの国計画マスタープラン(中央児童厚生施設・子供の国計画)》(コンタ入り配置図、縮尺1:1000、1962年2月14日、青焼、紙、北面:82.4×147.5cm、南面:82.4×147.5cm、南北2面の図面からなる)と1964年5月25日付《こどもの国計画マスタープラン》(コンタ入り配置図、縮尺1:1000、1964年5月25日、青焼、紙、南半面:81.0×146.9cm、南北2面の内南面のみ残存)の2件が含まれている。このうち62年版の北面の北西部には、「児童遊園A」と表記された部分がある(fig.2)。どこまでの範囲を指しているのか判然としないが、弾薬庫時代に作られた南北二本のトンネルで結ばれた、丘に囲まれた緩やかな傾斜地3箇所を包括するものと考えられる。地形を観察すると、後にノグチと大谷が担当する敷地は北側トンネル東口から北に広がる傾斜地で、本図における「渡渉池」と記されている周辺である。

fig.2　環境開発センター《こどもの国計画マスタープラン》1962年2月14日(部分)大谷研究室旧蔵「こどもの国児童館・A地区児童遊園」資料群。図の上辺中央右寄に「渡渉池」。
Research Center for Environmental Development and Design 〈Master Plan of the Kodomo No Kuni〉 (Detail), Feb. 14, 1962. Otani Associates Kodomo No Kuni Collection

一方、ノグチ・アーカイヴにも二種類のマスタープラン図面が所蔵されており、先の衣奈書簡中で言及された資料の一部と思われる。ひとつは1961年11月17日、同12月2日、1962年3月15日の三つの日付を持つ《こどもの国マスタープラン(中央児童厚生施設・こどもの国計画)K-1005M》(縮尺1:3000。こどもの国建設推進委員会、環境開発センターの銘。青焼)である。その最初の日付から、このK-1005Mは建設準備委員会に示され、決定を見た最初期の原案図とみてよいであろう。同図には敷地にAからDまでの地区符号が付せられ(但し境界ははっきりしない)、図の右下に各地区の施設が列挙されている。A地区施設の中に「児童遊園A 200人×1カ所」の記載があり、上記2月14日付けマスタープラン北面上の「児童遊園A」と同位置に、施設名と共に「トンネル、固定遊具を中心とした施設 付休憩所」、その東側敷地には「渡渉池 水遊び」と記されている。大谷研究室資料群の1962年2月14日付のマスタープランは概ねこのK-1005Mの拡大版と言える。

いまひとつは大谷研究室資料群のものと同じ1964年5月25日付《こどもの国計画マスタープラン》(但し南北両面揃い)である。このノグチ・アーカイヴの図面では赤の手書きで図中の施設を丸で囲み、設計担当者名が記されている(fig.3)。南図面の東側、D地区とC地区には、"D.KIKUTAKE"、"D.OTAKA"の担当施設(菊竹清訓の「林間学校」と大高正人の「修学旅行会館」)があり、両者に挟まれるように"D.OTANI"と記された施設

がある(D.はDesignの意味であろう)。これは大谷幸夫が当初担当予定だった児童館(第1案)と思われる。一方A地区東側における後のノグチ、大谷の担当地区には担当者名の書き込みはないが、渡渉池を含む後のA地区児童遊園の敷地が赤線で囲まれ(先述のトンネル西口の地域は含まず)、件のトンネルの東西口には赤で双方向の矢印が記されている(fig.4)。これはノグチの担当地区を示したものであろう。

**A群b)大谷幸夫による児童館第1案関連図面群**

大谷幸夫の児童館第1案の存在は、文化庁国立近現代建築資料館所蔵の青焼図面3点(図番K-30014、01鳥瞰図、02立面図・断面図。03配置図・平面図。所蔵館では「児童館初期案」と表記)によって知られている[20]。その内、02立面図・断面図の青焼(但しK-30014の図番はない)が大谷研究室資料群に含まれる。図番と標題「02児童館立面図・断面図」の他、「昭和39年」の年記をもつ。加えて01鳥観図、03配置図・平面図に関連付けられる図面、スケッチ、エスキースが上記「概要」に示した通り26点確認できる。01鳥観図とよく似た図で、陰影のみ異なる手描きの鳥観図は2点あり、大谷の作と推測される(fig.5)。03配置図・平面図の前段階を示すコンタ入り配置図・平面図(手描き6点及び青焼1件)、敷地のコンタ図・断面リスト(手描き1点、青焼1件)と敷地断面図(手描き1点、青焼1点)は、1964年5月25日付マスタープランのD.OTANIと記された箇所の地形と一致しており、配置図の最終段階のものは同マスタープラン当該箇所の建物配置とほぼ等しい。大谷が配置図を構想する段階で作成したエスキースは7点11図ある。これら児童館第1案資料群は02立面図・断面図の年記及び関連マスタープランの日付から、1964年前半の作成と考えられる。この段階での児童館は、菊竹清訓の「林間学校」と隣接し、教室4、大教室(またはホール)1、図書室1、会議室2、野外集会場1を擁し、遊びよりも指導の場としての性格の強い施設であった。

**A群c)大谷幸夫による児童館第2案関連図面群**

本図面群は昭和40年(1965年)8月10日の日付と大谷幸夫のイニシアル(OS)の付された配置図2点(手描き、a及びbとし、aをfig.6に示す)と、東側及び北側立面図に屋根伏図を加えた1点(手描き、イニシアル“OS”と昭和40年8月10日の日付、fig.7)、無記名・無年記の断面図・立面図1点(手描き、fig.8)、建築部分の詳細図1点(手描き、fig.9)、敷地コンタ図(縮尺1:200、手描き1点、同1:300、青焼1点、fig.10)からなる。これまでこの図面群の存在は知られていない。

配置図aおよびbは細部の異なるバリエーションである。顕著な違いは南側のトンネル出入口の有無である。両図とも建物周囲の簡略なコンタ表現の一致から同じ敷地を描いているが、これとよく合致するコンタ図(fig.10)が残されている。このコンタ図は上記1962/64年のマスタープランの渡渉池を含む三角形状の敷地のコンタを拡大したものと思われる。従って第2案は第1案とは異なり、後にノグチと大谷が担当することになるA地区児童遊園の敷地を想定していたと考えられる。第2案の建物も、「教室」は1室になり、「図書室」に加えて大きな「休憩所(遊戯場)」が加わり、砂場と水のある「屋外遊戯場」も設けられ、教場的な第1案とは性質を異にしている。大谷研究室にはこの児童館第2案の模型写真も残されていた(fig.11)。粘土で下地を作り、丘

20　文化庁国立近現代建築資料館編『「こどもの国」のデザイン―自然・未来・メタボリズム』文化庁国立近現代建築資料館、2022年、p.14

には植物を配し、中央に児童館の建物が表現されている。児童館の南にはトンネル出入口が渦巻き状に表現され、建物北側には図面に表現されていない部分も作られている。後にノグチ案の《ジャングルジムA》の敷地となる場所とそこから児童館の東側に通じる小道が見えるが、第2案にノグチの児童遊園デザインと直接結びつく要素はない。

イサム・ノグチが児童館・A地区児童遊園設計のために来日する1965年8月13日以前に、ノグチと大谷との間で何らかの意見交換がなされたことを示す資料は見つかっていない。大谷は後の回想で、児童館のデザインについて「私は視界を閉ざさぬよう、谷あいに軽い大屋根を架け渡す案を検討したが、構造が大がかりになったり、構造システムの表現が強すぎたりして、納得いくものにならなかった」と記している[21]。開放的な簀状の屋根をもつ児童館第2案の図面5点と模型写真は、大谷のこの記述とよく合致している。第2案図面の日付、8月10日はノグチ来日を前に大谷が温めていた構想に一区切りつけたことを物語るように思われる。

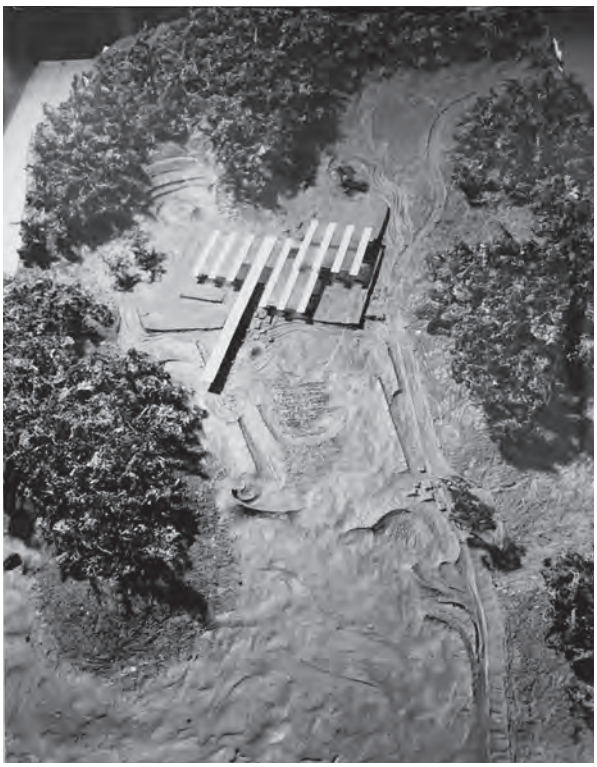


fig.11　大谷幸夫《＊児童館第2案模型》制作：大谷研究室（旧設計連合）（写真：大谷研究室）、1965年頃、大谷研究室旧蔵「こどもの国児童館・A地区児童遊園」資料群
Sachio Otani〈Model of Children's House (Second Design)〉model: Otani Associates (former Sekkei Rengo), photo: Otani Associates, ca.1965, Otani Associates Kodomo No Kuni Collection

## 4. イサム・ノグチ、大谷幸夫とそのチームによる設計活動の第1期：1965年8月-11月

先に見た1964年12月の書簡以降、衣奈多喜雄は建設協力会を代表してイサム・ノグチとの連絡を1965年8月まで担当していた。ノグチ・アーカイヴには1965年4月から1968年3月までにこどもの国建設関係者とイサム・ノグチとの間で交わされた書簡14通が所蔵されている。内1965年4月から8月までの3通は衣奈から来日前のノグチに宛てられたもので、続く1966年3月に衣奈から1通、同4月以降の書簡は浅田孝とノグチとの通信である。以下、適宜これらの書簡と他の史資料を参照してノグチ及びこどもの国側の動きを追いながら、大谷研究室資料群の図面及び石膏模型の制作過程を跡付けていきたい。

### 1）イサム・ノグチの1965年8月来日まで

イサム・ノグチにとって1965年前半はイスラエル・ミュージアムの《ビリー・ローズ彫刻庭園》のオープンをはじめ、建築家ルイス・カーンとの共同で進めていたニューヨークの《リヴァーサイド・パーク・プレイグラウンド》のプロジェクトの第5案を制作中で、多忙を極めていた。衣奈から「こどもの国」の資料を受け取っ

21　大谷「イサム・ノグチさんのこと」p.138

ていたものの、ノグチのデザイン案はすぐには示されなかった。

衣奈発ノグチ宛1965年4月22日付書簡で、衣奈は1965年5月5日にこどもの国が皇太子夫妻を迎えて開園式を行う予定であることを伝え、「しかし建設工事は終わっていませんので、あなたの訪日を心待ちにし、助けてくださることを望んでいます」(論者訳)とある[22]。

続く1965年8月7日付書簡で衣奈は、政府からの予算が確定したので、これにそって支出を確定せねばならないので、デザインをできうる限り速やかに完成させてほしいと危機感をにじませている。衣奈は返信を待つことなく、同年8月12日付書簡で、8月30日にこどもの国建設責任者たちによる理事会(建設協力会第13回理事会：論者)が開かれることになり、その場でデザインの進捗報告を求められる、と重ねて催促している[23]。

**2)イサム・ノグチの日本滞在期間：1965年8月13日-1965年11月27日**

衣奈の心配をよそに、イサム・ノグチは1965年8月13日には東京に現れ、同年11月27日まで日本に滞在した[24]。この間、ノグチは主に東京と京都を毎月行き来しながら滞在している。こどもの国設計作業に当たったとみられる東京滞在は記録上確かめられる限りで次の通り[25]。

1965年8月13日―8月28日、9月12日―9月18日、10月3日―10月10日、10月24日―10月31日、11月10日―11月14日。11月27日夜、羽田発出国。

上記の内、東京での最初の滞在中に、ノグチは衣奈ら建設協力会と面談した。それを示す記述が、8月31日付でノグチがフラー＆サダオInc.のショージ・サダオに宛てて京都から送った書簡に見られる。

> 「以前に話したと思いますが、朝日新聞は今も私に『こどもの国』のために何か仕事をしてほしいと主張しています。(中略)彼らが私に託そうとしている地区は、周囲を丘に囲まれた、とても大きく美しい場所で、少なくとも300×100mはあります。障害となっているのは予算で、すべてのための総額2000万円、加えてシェルター(児童館と思われる：論者)のためにほぼ同額の55000ドル(当時の邦貨換算で約1980万円：論者)です。この程度の予算では、少し土を動かすか、輪郭をつけて地形のレイアウトを作るくらいで、それ以上のことはできないでしょう。」[26](論者訳)

東京で衣奈らと面談したノグチは予算を知らされ、建設用地も訪れたと見られる。『こどもの国30年史』には、ノグチが「毎日のようにこどもの国の現地をおとずれ、構想を練った。園内をハダシで歩きまわっていたその姿を当時の職員が記憶している」と記されている[27]。また、この書簡からノグチは児童館と児童遊園が共に自分のデザイン対象であると認識していることがわかる。イサム・ノグチは『SD』誌1966年1月号で、

---

22　ノグチ・アーカイヴ蔵、資料番号　MS_PROJ_041_003

23　ノグチ・アーカイヴ蔵、資料番号　MS_PROJ_041_004(8月7日付、同12日付書簡)

24　離日の日は次の新聞記事による。「児童館など設計できる　こどもの国」朝日新聞東京版1965年11月27日12版(16)

25　ノグチ・アーカイヴ蔵の紀尾井町福田屋(旅館)領収書。資料番号 LBD_60S_093_006。この滞日中の他の期間は京都都ホテルの滞在が主で、他に岡山、高松での短期滞在記録がある。

26　ノグチ・アーカイヴ蔵　資料番号　MS_PROJ_226_051

27　『こどもの国三十年史』p.377

「わたくしがこの8月、日本に着いて半月もたたないうちに〈こどもの国〉の一部としての遊園地のために私(ママ)が考えたデザインが直ちに受け入れられ、実現の運びとなった」[28]

と記していることから、現地調査を経て8月中にスケッチ等何らかの形で案を示した可能性もあるが、相当する作品資料は確認されていない[29]。

### 3)イサム・ノグチによるバックミンスター・フラーのジオデシック・ドームと オクテット・トラス・ジャングルジムの導入案

上記のサダオ宛書簡の主旨は、リチャード・バックミンスター・フラー(1895-1983)[30]が発明したジオデシック・ドームを児童館のシェルターに、同じくオクテット・トラスの構造体とエレメントを二つのジャングルジムとして使いたいので材料の見積もりを欲しいというものである。

「あなたとバッキーにお願いしたいことは、シェルターのためのジオデシック・ドーム(複数:論者)にかかる費用を教えてほしいのです。30フィートのドームで、アルミニウム構造体のラスに半透明の色付きプラスチックのセミ・カバーのあるもの。これらをいくつか並べると好ましいシェルターになると思います。異なるサイズのドームを並べてもよいでしょう。プラスチックのカバーは後から追加してもよいです。必要なのは、アルミニウム・セクションの最も安い見積もりです。または、それらを日本で作る場合の方法を記した指示書です。

もうひとつお願いしたいのは、直径10〜12フィートのアルミニウム・ロッドによる球体で、それをジャングルジムのように用いたいのです。さらに、もっと平らな、より大きな直径のドームのセクションで、中心の地上高8フィート以内、周囲40〜50フィートのものを、別の種類のジャングルジムとしたいのです。あなたが近代美術館で展示したトラスがあればうってつけです。あれはどうなっていますか?(中略)

バッキーに伝えていただきたいことは、少ない予算ではありますが、これは私たちが永年夢見てきた、ジオデシック構造物と共にトータルなランドスケープを創り出すひとつのチャンスです。スケールは子供向けなので、大きい必要はありませんが、十分に複合的にしてサイズの効果をもたらすようにしたいのです。バッキーにくれぐれもよろしく。」(論者訳)

ノグチはこの手紙に先立つ8月28日付で、同じく京都から同様の依頼をフラー本人に宛てても書き送っている。

「私に分け与えられたエリアでやりたいことは、私なりのやり方で直径約30フィート(約9.1m:論者)の

28 『SD』No.13、p.61

29 建設協力会第13回理事会議事記録(1965年8月30日開催)には、ノグチの来日と現地調査について報告されているが、デザイン案についての言及は記されていない。財団法人こどもの国建設協力会「児童館」綴、文化庁国立近現代建築資料館蔵、資料番号17-2-5

30 ノグチとフラーは1929年に知り合い、生涯にわたる親交を結んだ。フラーのダイマクション・カーの車体デザイン・モデルをノグチが制作したことはよく知られている。ショージ・サダオは学生時代フラーの講義を受け、やがてフラーのパートナーとしてフラー・アンド・サダオInc.を設立した。サダオは後にイサム・ノグチ財団の理事長となった。

（ジオデシック・ドーム：原文欠損と思われ論者補）5基ほどによって景観を作ることです。（中略）例えばニューヨーク近代美術館にあった大きなアルミニウム・トラス＝オクテットは素晴らしい遊具を作り出すでしょう。（中略）直径12フィート（約3.65m：論者）くらいのアルミニウムの球体を美しいジャングルジムにすることを考えています。もしジョイントと必要な情報があれば日本で作ることができると思います。相応に密なロッドの複合体にしたいのです。ジオデシック・ドームを並べることで最良のシェルターとすることができます。（中略）大地のフォルムとジオデシックスの統合です。（以下略）」[31]（論者訳）

ノグチはサダオとフラーに、9月12日に東京に戻るのでそれまでにこのアイディアに可能性があるか至急返信してほしいと記している。現地を観察してスケール感を把握していたノグチは、大きさを具体的に指定している。サダオは9月7日付、フラーは9月8日付で返信し、共に積極的な意向を伝え、サダオは30フィートドーム、ジャングルジム用球体とトラスについて価格を含む必要な回答を、フラーはニューヨークで展示したトラスの現状と、それを踏まえた対応策として新たな選択肢を提案している。フラーはノグチの提案を大いに喜び、「あなたの児童遊園について、そしてジオデシック球体とトラスを大地と結婚させて子供の遊具にするという案について、私はこの上なく興奮しています」（論者訳）と書いている。しかしサダオとフラーの返書は残念なことに指定の期日には間に合わなかった[32]。

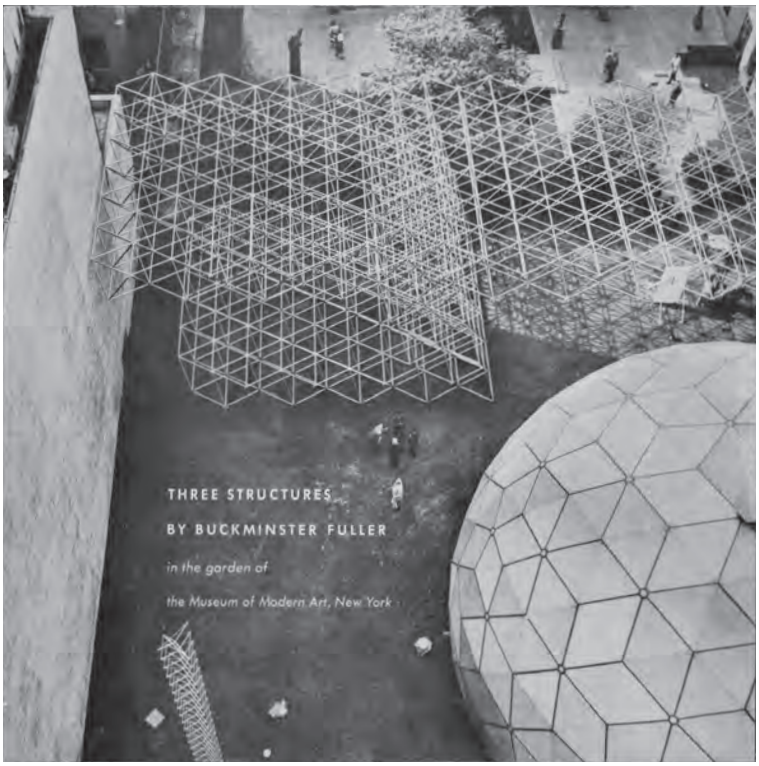



fig.12　ニューヨーク近代美術館《「バックミンスター・フラーの3つの構造」展チェックリスト》表紙 1959–60年。画面奥のフレーム状の構造体がオクテット・トラス。
Cover of the exhibition catalogue “Three Structures by Buckminster Fuller” by Arthur Drexler, 1960. The Museum of Modern Art, New York, ©2024 Digital image, The Museum of Modern Art, New York/Scala, Florence

ノグチのフラーとサダオ宛書簡文中の「近代美術館で展示したトラス」とは、ニューヨーク近代美術館の屋外展示場で1959年秋から1960年初頭まで開催された「バックミンスター・フラーによる3つの構造体」展の出品作《オクテット・トラス》（fig.12）である。これはフラーが提唱したシナジェティクス理論に基づく、正八面体（オクタヘドロン）と正四面体（テトラヘドロン）（いずれも合同の正三角形で構成される）からなるユニットを連結してできるトラス状の空間フレー

31　このフラー宛書簡は都ホテルの便箋に手書きされたもののファクシミリ（コピー）で、頁のマージンを中心に文章が少し欠落しているようである。ノグチ・アーカイヴ蔵、資料番号　MS_PROJ_226_052

32　ノグチがサダオとフラーに知らせた東京の宛先表記が間違っていたため、2通は発信者に返送され、さらにノグチの秘書ジョアン・サリヴァンに転送された。サリヴァンはこれらを65年11月17日に東京のノグチに転送した。サリヴァン発フラー、サダオ宛書簡1965年11月17日付。ノグチ・アーカイヴ蔵　資料番号　MS_PROJ_041_007／サダオ発ノグチ宛書簡1965年9月7日付。MS_PROJ_041_005／フラー発ノグチ宛書簡1965年9月8日付。MS_PROJ_91_006

ム（構造体）で、正三角形の辺となる同じ長さのロッドが両端のジョイントで相互に接合されることで荷重を構造全体で支える。あらゆる形の空間を充填でき、最小限の部材で最大限の強度を発揮する最軽量の構造体として、旧来の矩形を基本とする建築を刷新するものと期待された。ジオデシック・ドームもフラーの発明品で、球状ドームの面にそって正三角形を単位とする構造体を作ることで、空間内部の支柱を必要とせずに、最小限の部材で最大限の空間を覆い、最軽量でありながら竜巻にも耐える強度を実現する。ニューヨーク近代美術館の野外展覧会ではプラスチック部材による《ジオデシック・リジッド・レイドーム》も展示された[33]。ノグチが構想したのはアルミニウム・ロッドとジョイントによってジオデシック・ドームを、そしてアルミニウム・ロッドとオクテット・トラスによってジャングルジムを作ることであった。

ノグチが児童館を一貫して「シェルター（隠れ場所、雨露を凌ぐ場所）」と呼んでいることは、大谷の児童館第3案に引き継がれることになる。また、アルミニウム・ロッドのジャングルジムについてノグチは将来の実現を期待してその設置場所を1966年に施工させている。

**4）設計の実際**

イサム・ノグチの実質的な設計作業は、サダオ、フラー宛書簡を出した後、京都から東京に戻った1965年9月13日頃から始まったと考えられる。大谷研究室資料群には、イサム・ノグチのサインの入った設計図が複数あるが、いずれも大谷幸夫のチームで制作されたもので、ノグチ本人の手描き図面は含まれていない。ノグチとの共同設計がどのように行われたかについて、大谷幸夫は次のように記している。

> 「国立こどもの国の中の遊園地の一つを、イサムさんが設計することになり、実施のための図面や仕様書の作成など、私が手伝うこととなった。1965〜1966年あたりのことである。私は遊園地内に企画されていた休憩所や読書室などの建物の設計も委託されたが、あくまでも遊園地が主体であり、私はイサムさんの遊園地のイメージが固まるのを待った。」[34]

即ちノグチの児童遊園のデザインがまず先行して進められた。作業はかつて大谷が設立した設計連合のアトリエで行われた。本プロジェクトの設計者名には、大谷の他、田中正雄、藤田皓一が雑誌に記載されているが[35]、山本敬則氏及び藤田皓一氏によれば、主に図面を引いたのは藤田皓一氏であった。藤田氏によれば、東京芸術大学を卒業したばかりの同氏に、大谷から「あなたは美術系の人だから」とイサム・ノグチの担当が命じられたという。仕事が佳境に入ると、松永文夫をはじめ職場の「先輩」が引いた図面もあるとのことであった。イサム・ノグチは朝10時から夕方5時まで、昼休み以外は一切座ることなくひたすら油土で模型を制作し

33　フラーのジオデシック・ドームとトラスの構造については、ニューヨーク近代美術館の「3つの構造体」展プレス・リリースの他、下記の資料を参照した。《レイドーム》は極地に設置されるレーダー用ドームであった。
ジョイ・ボールドウィン（梶川泰司訳）『バックミンスター・フラーの世界』美術出版社、2002年（第二刷）／*Three Structures by Buckminster Fuller in the Garden of the Museum of Modern Art, New York.* MoMAExh_0649_MasterChecklist.及びPress release（二種類）。https://www.moma.org/calendar/exhibitions/3360（参照 2023年12月6日）

34　大谷「イサム・ノグチさんのこと」p.138

35　『新建築』42（9）、p.114

ていたという。藤田氏への製図の指示も、粘土模型を示しながら行われた[36]。

以上の証言から、イサム・ノグチの粘土模型がまず制作され、これを元に製図されていったと考えられる。

**5)模型と図面に見るイサム・ノグチのデザイン原案**

最初に大谷研究室資料群の石膏模型の概要を確認する。

《こどもの国児童館・A地区児童遊園石膏模型》(全体模型　fig.13)1点。

縮尺：1:300

原型：イサム・ノグチ、大谷幸夫

石膏模型制作：植野石膏模型製作所

寸法(石膏部分)：12.0×143.0×75.0cm

材質：石膏、プラスチック及び塗装された真鍮(児童館屋根部分)

木製台枠とアクリルカバー付き

制作年：1965年

記載事項：

銘板1、台座正面左：こどもの国／A地区児童遊園　イサム・ノグチ／児童館　大谷幸夫

銘板2、上記の右：S　1:300

児童館・A地区児童遊園の全体とスケートリンクを表す縮尺300分の1の石膏模型である。南側は矩形の「中央広場」の北端部から始まり、スケートリンクを経て、なだらかな丘陵に三方を囲まれた、有機的な曲線を描く児童遊園の敷地が一望できる。敷地の中央には児童館が位置する。ランドスケープと建築、遊具が総合的に表現されている。大谷研究室で保管されていたこの石膏模型は、『SD』誌1966年1月号に平山忠治撮影の写真で図版掲載されたことを初出とする。よって1965年末には完成していたと考えられ、児童館・A地区児童遊園施工前に作られたオリジナル模型であり、デザイン原案を表すものと考えられる。大谷幸夫は生前、「イサム・ノグチが粘土をこねて(原型を)作り、植野石膏模型製作所が手伝った」と証言している[37]。植野石膏模型製作所(以下「植野石膏模型」)の現社長植野彰規氏によれば、当時の記録はないが、制作過程は恐らくコンタ図(等高線図)に基づく合板下地を植野石膏模型で制作し、その上に作家が粘土で造形したものを原型として型取りし、石膏模型としたのではないかとのことである。また、自立する遊具の部分はグラウンド(ランドスケープ)部分とは別に制作され、接着されたと思われる。植野氏によれば、この石膏模型は長らく東京大学の大谷幸夫の研究室に保管されていたが、その間にカバーが損傷し、石膏面に埃が積もっていた。模型を大谷研究室に引き上げる際、補修作業が植野石膏模型で行われた[38]。2005年に大谷監修の下、本石膏模型のレプリカが2体、植野石膏模型で製作され、1体はニューヨークのノグチ・ミュージアム、1体は広島市立大学芸術資

36　藤田皓一氏と論者の面談による聞き取り。2023年11月21日、藤田氏のアトリエ(東京)にて。

37　論者による大谷幸夫との面談記録。2006年7月5日、大谷研究室にて。

38　論者による植野彰規氏との面談記録。2023年11月6日、植野石膏模型製作所にて。

料館に収蔵された[39]。

イサム・ノグチが「こどもの国」のために制作した模型は、この児童館・A地区児童遊園の全体模型の他、独立した個別遊具の模型が少なくとも4点あった。《スベリ台》(図面番号301、fig.14)、《ジャングルジムB》(同305、fig.15)、《ピラミッド》(同306、fig.16)、《原子部落》(同304、fig.17)の石膏模型が写真によって知られる[40]。全体模型上には児童館建築の他、これら4つの遊具(但し原始部落は台座のみ)に加え、ふたつの砂場、ブランコなどの遊具の他、スケートリンク、前庭と門を含むアプローチ部分、野外劇場、切り通しや岩山などのランドスケープと一体化した施設も表現されている。

小論ではこの全体模型を、図面に先行して制作された原型に基づくものとし、その写真が現場施工に先駆けて1966年1月にいち早く発表されたことを根拠として、原案と位置付ける。

ところで原案と一致する内容の手描きの全体配置図は、大谷研究室資料群中には残念ながら見出されなかった。代わりにその青焼が「設備設計図」(上記B群f、図番201, 202)の下地として用いられている。他に《003標準断面図・標準詳細図》(手描き fig.18)と《004断面リスト》(配置図に断面位置を表記したもの。fig.19)は原案と一致するが、004の児童館部分は柱位置のプロットにとどまる。B群fの意匠設計図中の《002配置図》(fig.20)は、遊具施設が既に原案から変更された段階を表している。

原案と一致する《002 配置図》(以下《旧002配置図》。fig.21)はノグチ・ミュージアムに青焼(図番002と標題欄付き)が所蔵されており、B群fの《002配置図》より前の段階、即ち変更前の配置図と考えられる。そこでまず全体模型と《旧002配置図》を見ながら原案の表現内容を記述し、その特徴を指摘したい。

fig.14

fig.14 イサム・ノグチ《こどもの国 A地区児童遊園スベリ台石膏模型》1965–66年、写真、撮影:村井修、ノグチ・アーカイヴ(ニューヨーク)蔵、©村井修
Isamu Noguchi〈Model for Kodomo No Kuni (Slide)〉1965, photograph, photographer: Osamu Murai, The Isamu Noguchi Archive ©The Isamu Noguchi Foundation and Garden Museum, New York/ARS-JASPAR, Photo: ©Osamu Murai

39 「イサム・ノグチ・大谷幸夫『こどもの国』(横浜)石膏模型レプリカ作成及び本学芸術資料館収蔵について」2005年7月3日付 広島市立大学文書。同大学芸術資料館提供のコピー。

40 これら4点の遊具模型の現在の所在は不明。写真はノグチ・アーカイヴ蔵、資料番号02010、02011、02008、02009(本文掲載順)で、いずれも村井修撮影。他に『建築』No.66、p88にこれら4点のアングルの異なる写真が掲載されている。

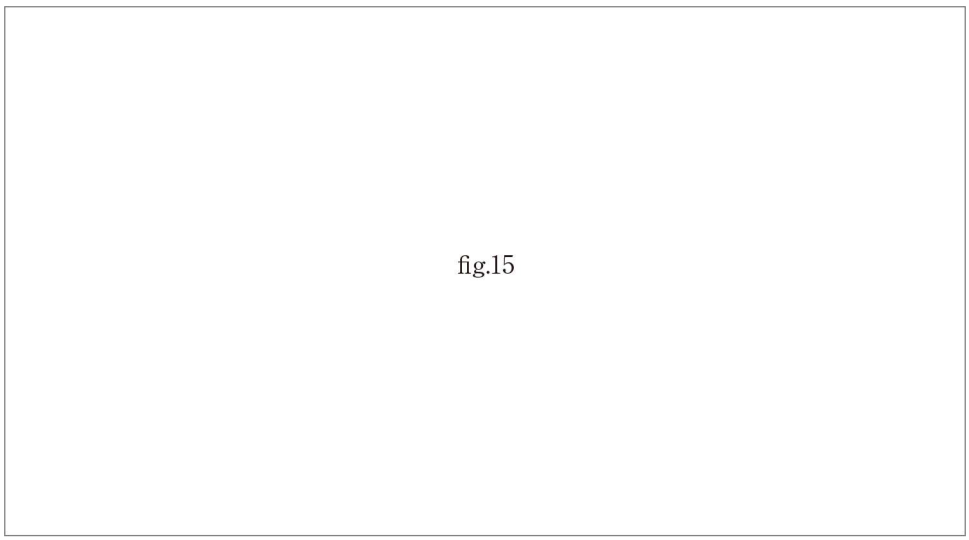



fig.15　イサム・ノグチ《こどもの国 A地区児童遊園ジャングルジムB 石膏模型》1965-66年、写真、撮影：村井修、ノグチ・アーカイヴ(ニューヨーク)蔵、©村井修
Isamu Noguchi〈Model for Kodomo No Kuni (Jungle Gym B)〉1965, photograph, photographer: Osamu Murai, The Isamu Noguchi Archive ©The Isamu Noguchi Foundation and Garden Museum, New York/ARS-JASPAR, Photo：©Osamu Murai

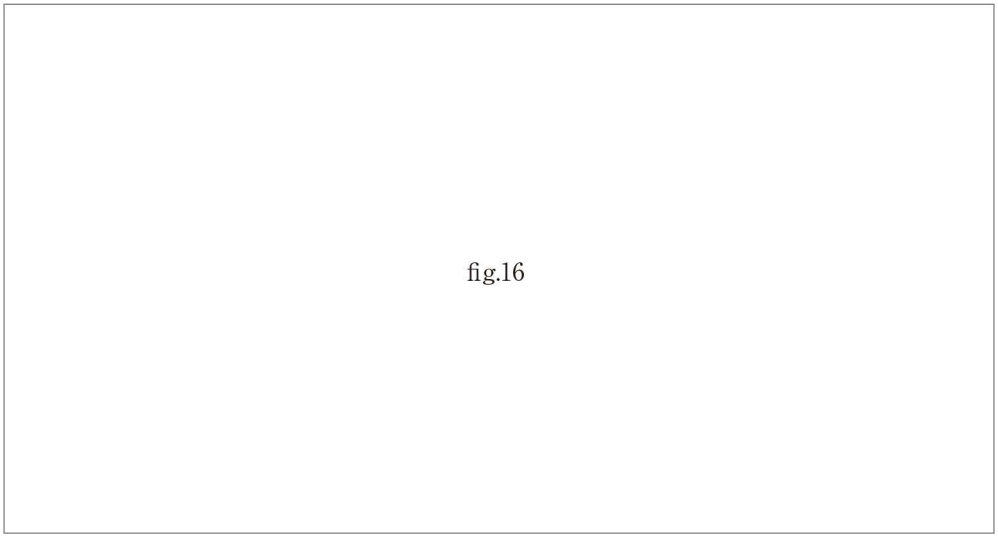



fig.16　イサム・ノグチ《こどもの国 A地区児童遊園ピラミッド石膏模型》1965-66年、写真、撮影：村井修、ノグチ・アーカイヴ(ニューヨーク)蔵、©村井修
Isamu Noguchi〈Model for Kodomo No Kuni (Pyramid)〉1965, photograph, photographer：Osamu Murai, The Isamu Noguchi Archive ©The Isamu Noguchi Foundation and Garden Museum, New York/ARS-JASPAR, Photo：©Osamu Murai

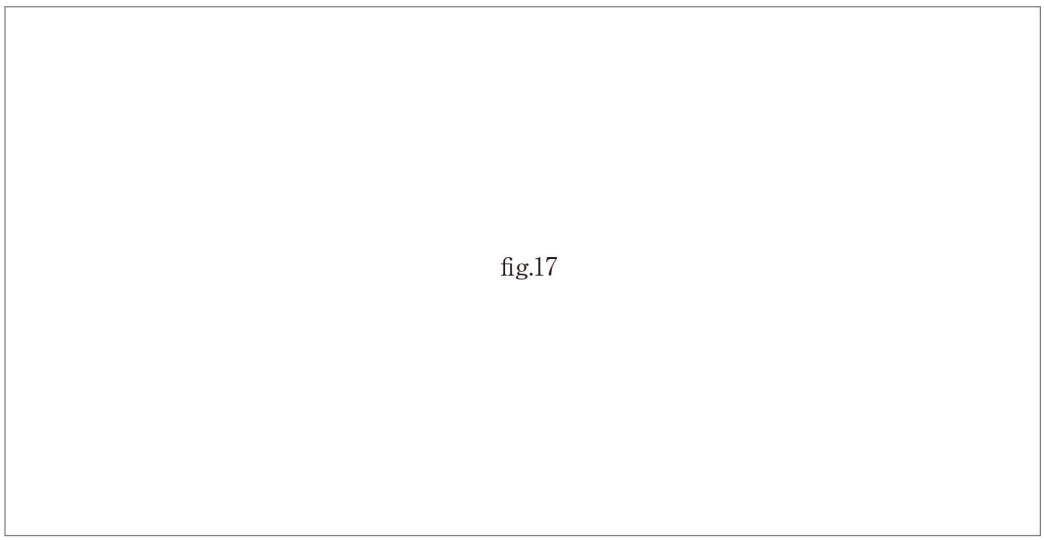



fig.17　イサム・ノグチ《こどもの国 A地区児童遊園原始部落石膏模型》1965-66年、写真、撮影：村井修、ノグチ・アーカイヴ（ニューヨーク）蔵、©村井修
Isamu Noguchi〈Model for Kodomo No Kuni (Primitive Village)〉1965, photograph, photographer: Osamu Murai, The Isamu Noguchi Archive ©The Isamu Noguchi Foundation and Garden Museum, New York/ARS-JASPAR, Photo：©Osamu Murai

a. ランドスケープ・デザイン：イサム・ノグチは敷地をどのようにデザインしたか

全体模型（fig.22に個別施設の位置を番号で示す）は75.0×143.0cmの矩形のスペースに、ほぼ南北を長手方向に設定して展開している。《旧002配置図》を見ると、南端から北端にかけて敷地全体を貫く「測量基線」が引かれている[41]。これに対して模型では、他区域との位置関係を示すため、一部に既存施設や通路が表現されている。南側（図右端）短辺には①中央広場の北端が見える。西側長辺には、弾薬庫時代のトンネルの西口⑥がある。同じ辺の北側にはこどもの国の周回路も見える。また東側長辺には丘を上がって隣接地区へとつながる小道2本がある。

児童館と児童遊園の敷地は三方を丘に囲まれ、北から南に下る緩やかな傾斜地で、北辺は丘と敷地部分が舌状（またはループ状）の輪郭を作りながら交錯し、敷地北部は4方向（⑪、⑬、⑱、⑰）に指をひろげたように展開している。敷地中央の児童館のあたりを掌に例えるなら、南側東に張り出した⑦野外劇場の敷地を親指、南の②スケートリンクを腕として、全体に右手を拡げたような輪郭を形成している。

しばしば「大地の彫刻家」とも評されるイサム・ノグチは、この児童遊園でどの程度の造成工事を考えたのだろうか。

浅田孝による「こどもの国」マスタープランの設計目標は、旧弾薬庫から引き継いだ豊かな「自然環境を最大限に利用し、かつ積極的に保存して、恵まれた自然のなかで子どもたちの健全なレクリエーションを啓発できるようにする。そして、特に首都圏の将来を考え、自然の保存に最大限の考慮を払う」ことであった[42]。自然環境と子供の主体性を重視することで、機械遊具が主体の商業遊園地とは異なる目標を打ち出していた。

41　測量基線は後述するその他の児童館・A地区児童遊園の配置図にも記されている。
42　『こどもの国50年史』p.56

大谷研究室資料群には、1965年9月7日付の手描きの図面《こどもの国遊園地実測図》(縮尺1：300、fig.23)がある。日付から、ノグチがデザインに着手する直前の敷地の状況を記録したものとみてよいだろう。中央西側(画面下側)にトンネル出入り口及び同中心線を描き、南はスケートリンクの位置あたりから、北側の放射状に広がる地区まで、丘と敷地の境界線をプロットした略図ではあるが、全体模型と比較して敷地輪郭はほぼ一致している。また大谷研究室資料群には詳細な敷地コンタ図3点(内2点をfig.24、fig.25に示す。共に年記なし)があり、児童遊園配置図の土台となったと思われるが、これらの敷地輪郭線も実測図とほぼ一致している。

これらの図面と全体模型の比較から、イサム・ノグチは与えられた敷地(傾斜地)の輪郭を尊重し、造成はごく限られた範囲にとどめたと思われる。具体的な造成対象は、fig.22中の番号で示すと以下の部分であったと考えられる。

②スケートリンク
③《亀ノ子砂場》：スケートリンク西の丘の樹木を伐採して設置。《亀ノ子砂場》北側の丘を放物線状に削る。
④アプローチ部分を掘り下げ、サンクンガーデン式の前庭と芝生の丘、及びトンネル出入口を経て児童館に至る擁壁で囲まれた通路と門を設置。
⑧児童館西南の角状の崖。実測図とコンタ図でみると、元々の地形がある程度角状になっていたようである。
⑨児童館西側の丘の切り通し
⑩舌状に張り出した丘の表面を削り、《岩山》とする。
⑪西北端に突き出た傾斜地にマウンドを作り、《スベリ台》とする。
⑮《ジャングルジムB》の敷地として北側の丘の突出部を一部削る。

この他《旧002配置図》を見ると、敷地輪郭線に沿って小川またはブロックを並べた境界線を設け、森林で覆われた丘と敷地の境界を明確にする計画であった。

大谷幸夫は、ノグチのデザインを見た印象を「さまざまなイメージを誘発され大変魅力的だった」として次のように記している。

> 「そこでは谷あいに沿って、子どもたちや遊具がもつれ合い踊るようにして走り廻っているように見える。舌状大地をよぎる切り通しの道は、大地が見事な放物線で造形されていることを私たちに訴えており、谷あいや丘にちりばめられた遊具やオブジェは、それぞれの言葉でおしゃべりをしているようで楽しい。そしてなによりも、自然という場でのデザインの基本ともいうべき幾つかの手法や手順が示されていた。その一つに、デザインとは自然が内包し潜在させている規律や調和的諸関係を抽出し、それらを純化し形象化して現わすこと。あるいは幾何学的・人為的造形を投入することで、自然が可能性として保持している小宇宙空間を呼び覚ますこと、といった考え方である。」[43]

イサム・ノグチによるミニマムな造成プランは、自然をできうる限り保存するというマスタープランの設

43　大谷「イサム・ノグチさんのこと」p.138

計目標に合致すると共に、サダオ宛書簡に記された予算を意識した結果でもあろう。しかしそれだけでなく、1933年に最初のプレイグラウンド・モデル《プレイマウンテン》を制作し、遊具を持ち込むことなく土地の造形のみで児童遊園を構想した経験をもつノグチにとって、A地区児童遊園の舌状の丘と傾斜地が入り組んだ地形は魅力的なものに思われたに違いない。

b. 遊具及びその他の施設

大谷研究室資料群には、児童遊園及び児童館敷地内に設置・設営されるべくイサム・ノグチによってデザインされた遊具と施設の手描き図面が揃っている。これらは全体模型に表わされた原案に属するものと、その後の計画変更を受けて新たに作図されたものとに分けられる。また、遊具以外に池、橋、小川、切り通し、アプローチ部分の前庭と擁壁といったランドスケープ・デザインに関わる図面、それらに付属する門や公衆便所、さらに屋外劇場などの施設の図面もある。以下、全体模型(原案。fig.22)に示した番号に沿って当該場所の図面を紹介する。なお遊具、施設の名称は原則として図面上に記された名称を用いる。

②スケートリンク

主な掲載図面(以下同):

《A地区児童遊園スケートリング平面図》(fig.26)

1965年、縮尺1:100、鉛筆、トレーシングペーパー、55.0×80.2cm

標題、右下、インク及び鉛筆:設計連合 A地区児童遊園 スケートリング

図面名称はスケートリンクであるが、夏季は水を張り、幼児の水遊びの場として「徒渉池」または「ジャブジャブ池」と呼ばれた。大谷研究室資料群には個別図面としては平面図のみが含まれる。寸法記載はないが面積1000㎡、周囲135mである[44]。

平面図ではメッシュ上に基線が引かれ、測点Y-3からY-5を囲むように舌状形の輪郭線が引かれている。基線は《旧002配置図》のものと一致する。舌状の輪郭は、全体模型でみると④サンクンガーデン「前庭」北のなだらかに隆起する芝生帯の輪郭にも現れ、児童遊園全体の丘と傾斜地の輪郭をも特徴づけている。ノグチは舌状形をランドスケープ・デザインのライトモチーフに位置づけていたといえよう。スケートリンクは児童館・児童遊園に先駆け1965年に着工し、1966年1月からオープンした。

建設協力会の計画上では、スケートリンクは児童館・A地区児童遊園とは別の施設であったが、早い段階からイサム・ノグチがデザインすることに内定していたようである[45]。

④亀ノ子砂場

《304 こどもの国A地区児童遊園 亀ノ子砂場詳細図》(fig.26:PL.4)

44 『こどもの国30年史』p.379

45 建設協力会第13回理事会(1965年8月30日)で矢島八洲夫副会長が、スケートリンクを建設し、夏は徒渉池とすることを提案。同会理事の浅田孝は賛意を示し、A地区を担当するイサム・ノグチ、大谷幸夫と相談して場所を決めたいと返答している。財団法人こどもの国建設協力会第13回理事会議事録(昭和40年8月30日開催)、文化庁国立近現代建築資料館蔵

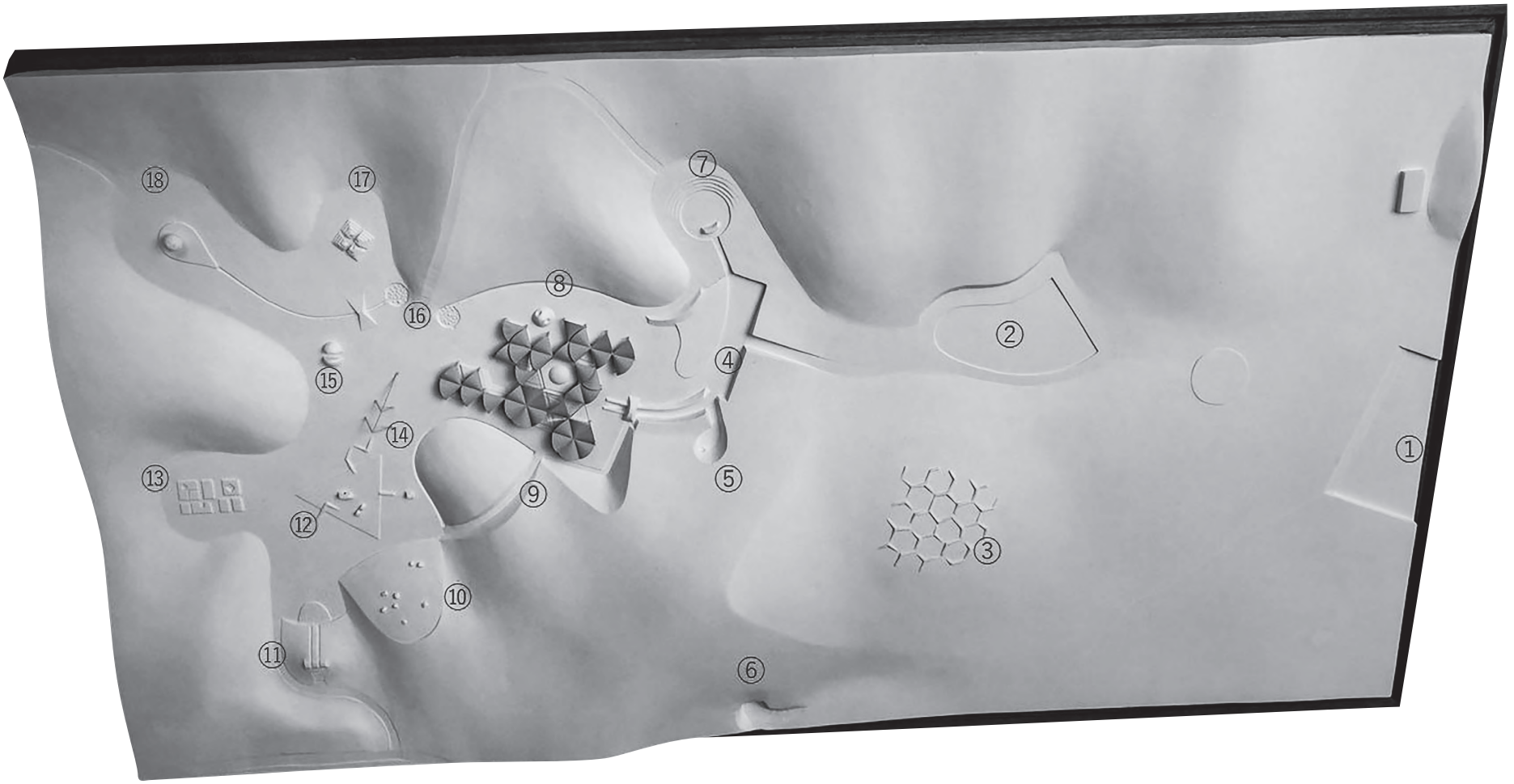



fig.22　イサム・ノグチ、大谷幸夫《こどもの国児童館・A地区児童遊園石膏模型》(fig.13に番号表示加工。旧002配置図fig.21に方向を合わせ、図左手が北側。)
Numbered Illustration of 〈Plaster Model of Playground and Children's House in Zone A of the Kodomo No Kuni〉 photo and number by the author (cf. fig.13)

1965-66年、縮尺1:300、1:100、1:20、鉛筆、トレーシングペーパー、55.1×80.0cm、署名、インク、左下:Isamu Noguchi

工事仕様書、右下。標題、図番、縮尺、右下。

スケートリンク北西部のなだらかな丘(現在は「110mローラー滑り台」がある)の頂上付近に、斜面に沿って一辺約5mの正六角形をユニットとする、コンクリート製上面モルタル塗りのパーティション群をハチの巣状に配置する。1ないし2か所の切れ目をもつ六角形ユニット8区画(304中の平面図A〜H)が集合する中心部と、それらの周囲を囲む、六角形の辺をいくつか欠いた(開かれた)ユニット12区画からなる。各区画の内側は砂場または芝生に指定されている。《旧002配置図》では、亀ノ子砂場の周囲とスケートリンクにかけての斜面は「牧草播種3500㎡」の指示があり、子供がこの斜面を登って砂場に至る設計であったことがわかる。ノグチは《リヴァーサイド・パーク・プレイグラウンド》の第1案(1961年)でも、半円形の輪郭をもつ平面上に六角形を含むやや不規則なパーティションを備えた砂場「砂の迷宮」(fig.27)をデザインしている。これに比べ、こどもの国《亀ノ子砂場》にみる大地の曲面に沿って三次元的に配された正六角形は幾何学的に洗練されており、フラーのジオデシック・ドームのフレームを彷彿させる。

この《304詳細図》は平面図1:100及び1:300、断面図1:300、詳細図1:20と仕様表から成り、イサム・ノグチのサイン、表題欄に設計連合のスタンプをもつ。全体模型以外の個別模型の存在は知られていない。本図面は大谷研究室資料群中のノグチのデザインした遊具・施設設計図をまとめた《300こどもの国A地区児童遊園 図面リスト》の一覧表に掲載されているが、横線が引かれ、「欠番」と表記されており、ある時点で施工対象から外されたことを意味する[46]。《亀ノ子砂場》は1966年上半期の施工対象(児童館などを含む)とはならず、1967年度の施工対象として残されたようである。しかしその後計画変更により実現せずに終わった[47]。

fig.27 イサム・ノグチ《リバーサイド・パーク・プレイグラウンド模型(砂の迷宮)》1961-1962年、プラスティシン、合板、鉛筆、2.9×68.6×36.5cm、ノグチ・ミュージアム蔵 inv.no. 516H
Isamu Noguchi〈Riverside Playground (Sand Maze Study)〉, 1961-1962, plasticine, plywood, pencil, 2.9×68.6×36.5cm, The Isamu Noguchi Foundation and Garden Museum, New York, inv.no. 516H ©The Isamu Noguchi Foundation and Garden Museum, New York/ARS-JASPAR

46 同リストでは、この他に301「スベリ台」、305「ジャングルジムB」、306「ピラミッド」、307「原始部落」、309「ブランコ」が同様に欠番と記されている。

47 財団法人こどもの国建設協力会から財団法人日本船舶振興会に宛てた計画変更申請書。昭和42年11月。こどもの国建設協力会「児童遊園 第二遊園」綴、文化庁国立近現代建築資料館蔵、資料番号17-4-7

④児童館・児童遊園へのアプローチ

《R-15　A地区児童遊園門配筋図》(fig.28)

1965-66年、縮尺1:30、鉛筆、色鉛筆(赤)、トレーシングペーパー、55.2×80.5cm

図番、標題、鉛筆、右下。

《R-8　＊児童館入り口通路擁壁立面図》(1966年2月16日／22日：fig.29)

1966年、縮尺1:100、鉛筆、トレーシングペーパー、54.4×79.5cm、図番、日付、鉛筆、右下

《007　こどもの国児童館　公衆便所詳細図》(fig.30)

1965-66年、縮尺1：50、鉛筆、インク、トレーシングペーパー、57.8×82.2cm

設計者名、スタンプ、左下：大谷幸夫

標題、図番、縮尺、スタンプ、右下。

《旧002配置図》によれば、スケートリンクから北に緩やかに上る丘に切り通しが設けられ、擁壁に囲まれた通路(幅5.1m、長さ31.2m)となる。先端はサンクンガーデン式の「前庭」(幅39.9m、奥行き10.8m)に至る。その正面は舌状の芝生帯の丘と三日月状の「築山」(砕石コンクリートはつり仕上げ)、東側は⑦野外劇場に至る階段、西側は⑤トンネル出入り口と擁壁で囲まれた通路を経てアーチ型の門に至り、階段を上って⑧児童館に通じる。門の手前西側擁壁には公衆便所の入り口2箇所が設けられ、男女各2基ずつ、地中に埋まったボトル型の空間がある(全体模型には表現されていない)。これらの内⑤⑥のトンネル出入り口は設計途上で閉鎖されることになり、それ以外の施設は1966年8月に竣工している。(写真fig.31)

fig.31　《こどもの国児童館・A地区児童遊園竣工写真：擁壁、通路、公衆便所、門》撮影：大谷研究室(旧設計連合)、1966年、大谷研究室蔵
〈Masonry Retaining Walls, Passageway, Public Toilet and Gate, Playground and Children's House in Zone A of the Kodomo No Kuni〉 photographed by Otani Associates (former Sekkei Rengo), 1966, Collection of the Otani Associates

⑦野外劇場

《303　こどもの国A地区児童遊園　野外劇場詳細図》(fig.32)

1965-66年、縮尺1:100、1:20、1:50、鉛筆、インク、トレーシングペーパー、55.1×80.2cm、署名、インク、左下：Isamu Noguchi

工事仕様書、右下。標題、図番、スタンプ、右下。

《R-17　子供の国　出入口廻り》(1966年5月10日、1966年6月13日、fig.33)

1966年、縮尺1:100、鉛筆、トレーシングペーパー、53.8×75.5cm、図番、標題、縮尺、日付、右下。

前庭東側の丘に囲まれた舌状の敷地に「野外劇場」が設けられる。児童遊園に野外劇場を設ける案は、《国連本部のためのプレイグラウンド》(fig.34)や《リヴァーサイド・パーク・プレイグラウンド》の「円形劇場(Amphitheater)」(fig.35)にも見られ[48]、古代ギリシアのそれを想起させるモチーフとしてノグチのプレイグランドの特徴のひとつと言える。「こどもの国」野外劇場は、直径19.2mの円形舞台に芝生を植え(施工時には敷石に変更)、舞台上西側に衝立(曲面で構成された台形、高さ2.35m、幅6m、RC打ち放し)を設ける。衝立の軸上背後に前庭から上がる階段、同軸上正面には円弧状の観客席(幅1m)が4列設けられている。野外劇場は1966年上半期に施行された(写真fig.36)。

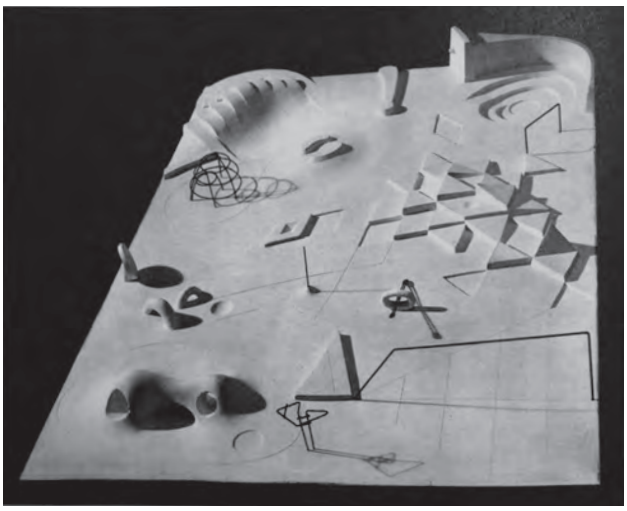


fig.34　イサム・ノグチ《国連本部のためのプレイグラウンド模型》1952年、ノグチ・ミュージアム蔵 inv. no. 405A
Isamu Noguchi〈United Nations Playground (model)〉1952, Plaster, The Isamu Noguchi Foundation and Garden Museum, New York, inv.no.405A ©The Isamu Noguchi Foundation and Garden Museum, New York/ARS-JASPAR

fig.35　イサム・ノグチ《リヴァーサイド・パーク・プレイグラウンドの円形劇場模型》1961-1962年、プラスティシン、合板、14.3×71.1×69.2cm、ノグチ・ミュージアム蔵 inv.no. 516A
Isamu Noguchi〈Riverside Playground, Amphitheater Study〉1961-1962, plasticine, plywood, 14.1×71.1×69.2cm, The Isamu Noguchi Foundation and Garden Museum, New York, inv.no. 516A ©The Isamu Noguchi Foundation and Garden Museum, New York/ARS-JASPAR

fig.36　《野外劇場 竣工写真》1966年、ノグチ・アーカイヴ(ニューヨーク)蔵
〈Construction for Playground for Kodomo No Kuni, Open-air Theater〉1966, The Isamu Noguchi Archive, New York, id.no. 12035 ©The Isamu Noguchi Foundation and Garden Museum, New York/ARS-JASPAR

48　リヴァーサイド・パーク・プレイグラウンドでは、第1案図面の他、個別模型として《Amphitheater Study》(1961-62年、プラスティシン、合板)がノグチ美術館(NY)に所蔵されている。inv.no.516A

⑧「児童館」敷地内の遊具施設

《R-19　児童館丸山詳細図》(1966年6月7日：fig.37)

1966年、縮尺1:50、鉛筆、トレーシングペーパー、55.4×79.9cm、図番、標題、縮尺、日付、鉛筆、右下。

《R-　丸山詳細図(参考図)》(1966年5月21日：fig.38)

1966年、縮尺:1:50、鉛筆、トレーシングペーパー、55.0×84.2cm、図番、標題、縮尺、日付、鉛筆、右下。

《R-5　＊六角池詳細図》(fig.39)

1965-1966年、縮尺1:50、1:10、鉛筆、トレーシングペーパー、54.8×79.7cm、図番、鉛筆、右下。

《六角池(池3)参考図》(1966年5月21日：fig.40)

1966年、縮尺1:50、鉛筆、トレーシングペーパー、55.7×83.6cm、標題、縮尺、日付、鉛筆、右下。

竣工写真(fig.41、fig.42)

「児童館」の建築については後述する。全体模型では児童館の灰色の屋根に囲まれた中心に六角形台座をもつ円形マウンド「丸山」、その東側に穴のあいた小さなマウンド、北側には六角形の「池3」がある。穴あきマウンドは《国連本部のためのプレイグラウンド》や《リヴァーサイド・パーク・プレイグラウンド》にも見られるノグチの基本的遊具のひとつだが、大谷研究室資料群にはこの小さなマウンドの詳細図は存在しない。唯一、《005児童館平面詳細図》の当該位置に「プレイスカルプチャー 別途原寸決定」と添え書きされた穴あきマウンドが描かれている。同じ図面の「丸山」は全体模型と同じく六角形台座上の穴のない円形マウンドで、トンネルを持たない。しかしその後のイサム・ノグチからの希望でデザイン変更され、《R-19丸山詳細図》に見るように上下に交差するトンネル2本が設けられ、台座も円

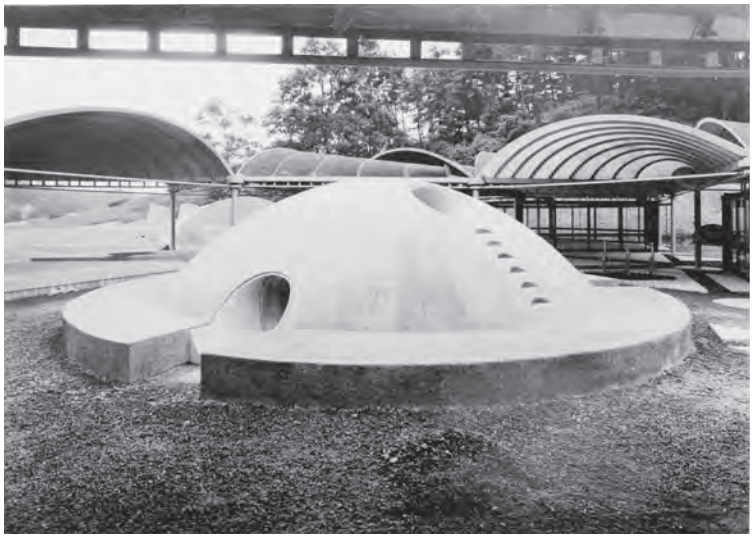


fig.41　《丸山 竣工写真》撮影：大谷研究室(旧設計連合)、1966年、大谷研究室蔵
〈"Maruyama," Children's House in Zone A of the Kodomo No Kuni〉 photographed by Otani Associates (former Sekkei Rengo), 1966, Collection of Otani Associates

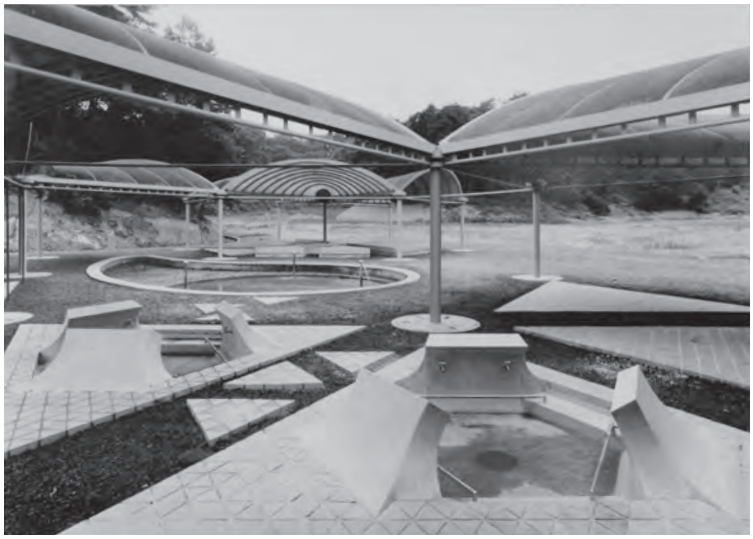


fig.42　《児童館池(池3)竣工写真》撮影：大谷研究室(旧設計連合)、1966年、大谷研究室蔵。左手奥に勾玉形の池。
〈Pond 3, Children's House in Zone A of the Kodomo No Kuni〉 photographed by Otani Associates (former Sekkei Rengo), 1966, Collection of Otani Assiciates

形となった[49]。これをもって小マウンドは不要になり、その後の児童館平面図や配置図に登場しなくなったと解釈できる。

《旧002配置図》中の「池3」は、児童館の柱位置に合わせて正六角形の輪郭であったが、その後イサム・ノグチの希望により《六角池(参考図)》のように「勾玉形」に設計変更され、先端部が屋根の下に入る形になり、1966年度上半期に施工された。

児童館床プラットフォームの正三角形のデザインは、後述するように大谷幸夫の児童館屋根デザインに起因するが、児童館スペース内の「池3」やプラットフォームのデザイン変更には「丸山」と同様にイサム・ノグチの意向が反映されている[50]。「丸山」については藤田皓一氏がノグチのデザインであると証言している[51]。児童館敷地内にはこの他《R-6　足洗場詳細図・水飲場詳細図》があるが、これについては次稿で述べる。

⑨児童館西側擁壁及び切り通し

《003　こどもの国A地区児童遊園・児童館標準断面図：標準詳細図》(fig.18)

1965-66年、縮尺1:300、1:100、鉛筆、インク、トレーシングペーパー、78.4×108.1cm、

設計者名、スタンプ：左下「大谷幸夫」

標題、図番、縮尺、スタンプ、右下。

《＊児童館西側擁壁平面図・地形立面図・断面図》(fig.43)

1965-66年、縮尺表記なし、鉛筆、トレーシングペーパー、54.7×109.3cm

《R-21　小橋詳細図》(1966年6月7日、fig.44)

1966年、縮尺1:20、鉛筆、トレーシングペーパー、57.5×77.7cm、図番、標題、縮尺、日付、鉛筆、右下。

《＊児童館西側切り通し平面図・地形断面図》(fig.45)

1965年、縮尺表記なし、鉛筆、トレーシングペーパー、78.8×108.3cm

児童館敷地の西南の丘はやや角状にえぐれていたが、敷地との境界に側溝を設けて輪郭を明確にし、背後の崖を《003標準断面図・標準詳細図》下端の詳細図に見るように石積として放物線状の輪郭を与える予定であった。児童館竣工後の写真(fig.46)を見ると、崖の面が切り落とされ、何らかの土留め処置を施されているようにも見えるが、石積みは行われていない。側溝は施行されているが、PCブロック等による縁取りは写真から確認できない。

この切り落とし崖の北隣には側溝を跨いで丘を西へ貫く切り通しの入り口となる「小橋」が設けられた(R-21)。幅1.5m、長さ3.04mのコンクリート打ち放しの橋で、路面は児童館側から切り通しに向かう昇り勾配で、左右の勾欄(側板)もそれに合わせて手前から奥にかけて高くなっている。小橋は西隣のコンクリート

49　イサム・ノグチから浅田孝及び田中正雄宛書簡。1966年4月29日。ノグチ・アーカイヴ蔵 資料番号MS_PROJ_041_014及び_015。このノグチ提案は児童館スペース内のその他の細部変更案と共に同年6月1日の浅田、大谷、田中及び建設協力会事務局との話し合いで検討の上了承され、6月7日付浅田発ノグチ宛書簡で「あなたの指示通り」6月末までに竣工させる旨が伝えられた。ノグチ・アーカイヴ蔵 資料番号MS_PROJ_041_017／富永、大谷、田中、浅田、氏家：1966年6月1日付児童遊園決定事項(打合せメモ)、財団法人こどもの国協会の好意により2006年に複写

50　ibid.

51　藤田氏との論者の面談(註36参照)

擁壁と共に1966年度上半期に施工され、現存しているが通行はできない(2023年11月現在。コンクリート擁壁は一部が残っている)。

「切り通し」は児童館敷地西縁に沿う舌状の丘を東西に貫き⑩「岩山」に通じている。路面は出入り口部分が低く中央が高い弓形で、左右の丘の切断面が大地の輪郭を表している。この崖にも石積が予定されていた。竣工写真は児童館側(入口)と通路頂上付近、及び岩山側(出口)から撮られており、児童館側には小橋の先に板を貼った階段が7段ほど確認できる(fig.47)[52]。切り通しの石積は施工されていない。切り通し自体は現存する可能性があるが、今日の現場は樹木に覆われて確認できない。

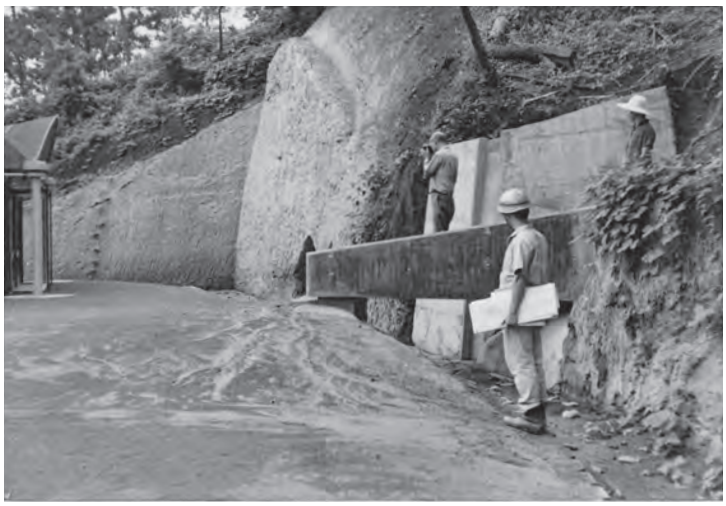


fig.46 《児童館西の小橋からカメラを構えるイサム・ノグチ》1966年、ノグチ・アーカイヴ(ニューヨーク)蔵 inv.no.12060
〈Isamu Noguchi on the ponticulus by the Children's House〉 1966, The Isamu Noguchi Archive, inv.no. 12060
©The Isamu Noguchi Foundation and Garden Museum, New York/ARS-JASPAR

fig.47 《児童館と切り通し入口 竣工写真》撮影:大谷研究室(旧設計連合)、1966年、大谷研究室蔵
〈Children's House and Entrance of the Pathway〉 photographed by Otani Associates (former Sekkei Rengo), Collection of the Otani Associates

⑩岩山

《＊岩山(芝山)平面図・立面図・断面図》(fig.48)

1965-66年、縮尺表記なし、鉛筆、トレーシングペーパー、78.6×108.2cm

《旧002配置図》他の書き込みを参照すると、切り通しの北側に張り出していた舌状丘を削り、放物線状の輪郭をもつ緩やかな斜面とし、てん圧して適宜岩を配する。放物線輪郭に沿って擁壁(砕石コンクリートはつり仕上げ)を設け、下端は小川(幅50cm、玉砂利洗い出し)で仕切られる。「岩山」はその後幾度かの変更を受け「芝山」と改称されたが、施工されずに終わった。後述するように予定地の造成も行われた形跡がない。

52 切り通しの出口側の写真は公刊されていなかったが、文化庁国立近現代建築資料館所蔵の「昭和40年度A地区児童遊園完成写真 昭和41年7月撮影」(財団法人こどもの国建設協力会)で確認できた。

⑪スベリ台

《301　スベリ台詳細図》(fig.49)

1965-66年、縮尺1:50、1:300、鉛筆、インク、トレーシングペーパー、54.9×80.1cm、

署名、インク、左下：Isamu Noguchi

標題、図番、縮尺、スタンプ、右下。

工事仕様表、鉛筆、スタンプ、右下。

全体模型では、西側長辺の北にこどもの国周回路が見え、そこから分岐して児童遊園の敷地に入る通路が表現されている。その通路途中に、丘の上のスベリ台に上がる階段が設けられている。《301詳細図》中の配置図では、このアプローチがより複雑で、「岩山」の西を通る通路から分岐した階段を登ると一旦小さな広場に出、正面の石積擁壁(幅11m)の右手の小径を登って左手にスベリ台の背面階段、右手はスベリ台下の児童遊園敷地に至る[53]。スベリ台はいわば児童遊園の北西側の入り口に計画された。

スベリ台敷地は比較的急な丘に囲まれた舌状傾斜地を土盛りして芝生のマウンドを作り、頂上に幅約7mの台形状の台座(RC打ち放し)を設け、背面に階段、正面にスライド二基(スライド面ステンレス板)を備える。スライドの高低差は約4.6m、水平方向長さ10.6mである。スライド降り口は舌状の輪郭をもつ砂場(奥行き7m)となる。マウンドと砂場はRCで縁取りされる。

複線式スベリ台をもつマウンドは、ノグチの《リヴァーサイド・パーク・プレイグラウンド》でも計画された。その第一案には《スライド・マウンテン》の個別模型があり、そこではマウンドは乳房のように二つ並べられ、それぞれに階段とスライドが設けられている[54]。

こどもの国の複線式スベリ台は施工されず、敷地造成も行われなかった。代わりに単線式スベリ台が旧岩山の敷地に1966年に計画されるが実施されなかった。

⑫三角砂場

《308　三角砂場詳細図》(fig.50)

1965-66年、縮尺1:100、1:50、1:20、1:10、鉛筆、インク、トレーシングペーパー、54.7×80.0cm

署名、インク、左下：Isamu Noguchi

標題、図番、縮尺、スタンプ、右下。

工事仕様表、鉛筆、スタンプ、右下。

一辺の長さ30mの巨大な正三角形プランの砂場(面積約390㎡)である。西側頂点を⑩「岩山」に向け、三角形中線と岩山中心線を揃えて配置される。三角形の各辺には高さ50〜70cmの幾何学的な形の「擁壁」(M1〜M3)が交差し、M3の先にはモノリス状の彫刻M4、砂場の中にトンネルをもつ台形彫刻M5、同じく台形の頂部をU字形に掻き取った彫刻M6を配する。

53　大谷研究室資料群にはこのスベリ台配置図の元になったコンタ図(手描き)もある。

54　《Slide Mountain Study》(1961-1962年)、プラスティシン、合板、ノグチ・ミュージアム蔵　Inv.no.5

《旧002配置図》を見ると、「三角砂場」の北側頂点の中線は⑬「原始部落」の台座敷地中心線と一致している。また、南辺から突出する擁壁M1の先端部中線は⑭「ブランコ」の中心線と一致し、その先には⑯二つの池に挟まれた丘を登る階段(「峯の散歩道」に繋がる)も同軸上にある。擁壁M2の先端部は⑪「スベリ台」の方角を指している。このように「三角砂場」は児童遊園レイアウトの要になっている。

正三角形は児童館の屋根や床にも現れ、舌状形と共にこの児童遊園を特徴付けるもうひとつのライトモチーフとなっている。また、正三角形はフラーのジオデシック構造やオクテット・トラスの基本エレメントでもある。

「三角砂場」は原案のみで、その後「＊半円砂場」(《002配置図》fig.20参照)を経て「＊花形砂場」へと変更され、1966年度下半期に施工された(fig.51)。

fig.51　《花形砂場と児童館：竣工写真》ノグチ・アーカイヴ(ニューヨーク)蔵
〈Sandpit and Children's House〉 photographer unknown. 1966, The Isamu Noguchi Archive, New York ©The Isamu Noguchi Foundation and Garden Museum, New York/ARS-JASPAR

⑬原始部落

《307　原始部落詳細図》(fig.52)

1965-66年、縮尺1：50、鉛筆、インク、トレーシングペーパー、55.0×80.0cm

署名、インク：左下「Isamu Noguchi」

標題、図番、縮尺、スタンプ、右下。

工事仕様表、鉛筆、スタンプ、右下。

《＊原始部落台座平面図・立面図》

1965-66年、縮尺表記なし、鉛筆、トレーシングペーパー、55.2×80.3cm

「原始部落」は全体模型では台座のみが表現されているが、《307詳細図》と個別模型の写真(fig.17)によれば、屋根型の彫刻が載せられる予定であった。丘に囲まれた舌状傾斜地に19.5×10mの区画を設け、RCによる矩形の台座(床)13基を置く。区画の中心線は三角砂場の北側頂点の中線と一致する。床の隙間を掛け渡すように3つの屋根型「竹製彫刻」No.1～3が載る。妻部が内側に傾斜した穹窿で、側面にも低い出入り口があり、内部で通路が交差する。屋根の形状はそれぞれプロポーションや棟部の輪郭が異なる。《307詳細図》中の仕様には「竹製彫刻／主構造：真竹 竹を網代状にあんでシュロナワでとめる。アンカー シンチュウ」とある。タイトルに相応しい野趣が感じられるが、シンプルな屋根の形状は家形埴輪に触発されたものかもしれない[55]。「原

55　ノグチは広島平和記念公園慰霊施設のデザインで「家形埴輪」をヒントとしたと語っている。

始部落」は施工されなかった。

⑭ブランコ

《309　ブランコ詳細図》(fig.53)

1965–66年、縮尺表記なし、鉛筆、インク、トレーシングペーパー、54.8×80.0cm

署名、インク、左下：Isamu Noguchi

標題、図番、スタンプ、右下。

工事仕様表、鉛筆、スタンプ、右下。

《310　ブランコ》(fig.54)

1965–66年、縮尺1：50、鉛筆、インク、トレーシングペーパー、55.0×80.2cm

署名、インク、左下：Isamu Noguchi

標題、図番、縮尺、スタンプ、右下。

三角錐(四面体)状のフレームの長大な斜辺を利用して、吊り位置の高さが異なるブランコ6人分を備える。フレームの高さ約9m、横幅約17m、奥行き約8mである。矩形フレームによる一般的なブランコとは異なり、ここではひとつひとつの振幅が違い、子供は年齢・体格に応じて選ぶことができる。

イサム・ノグチは三角錐フレームによる三連ブランコを1940年にハワイのアラ・モアナ・パークのために初めてデザインした(fig.55)[56]。「こどもの国」用はより大きく六連となり、フレームの形状も一部変化している。また、ノグチのプレイグラウンド中、実施されたもう一つの作例であるアトランタのピードモント・パークの《プレイスケイプス》(1975–76年)には二次元的な三角形フレームを二つ並べた五連ブランコがある。

「こどもの国」の六連ブランコは計画変更の過程で一時2基を設置する案もあったが、施工されずに終わった。

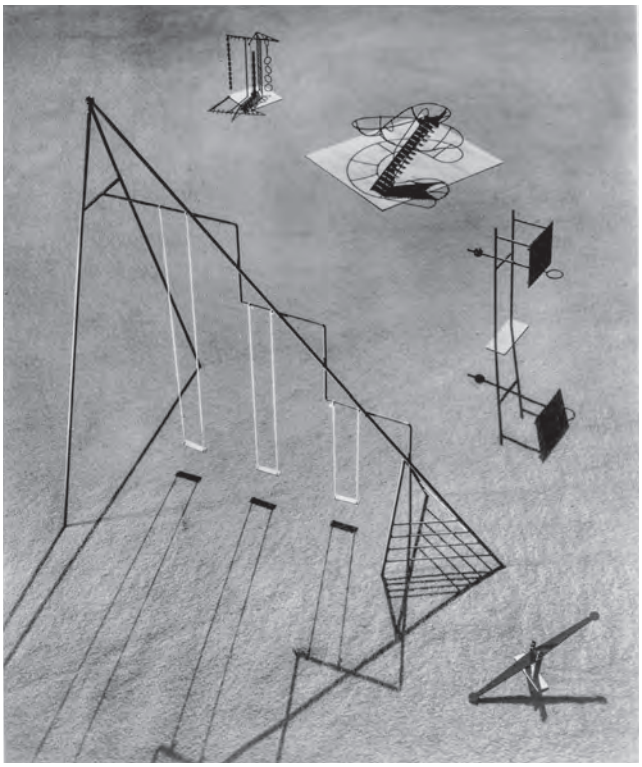


fig.55　イサム・ノグチ《アラ・モアナ・パークのための遊具模型》1940年、撮影：Fay Sturtevant Lincoln、ノグチ・アーカイヴ(ニューヨーク)蔵
Isamu Noguchi〈Playground equipment for Ala Moana Park, Hawai〉1940, photographer：Fay Sturtevant Lincoln, “Sculpture by Isamu Noguchi, 1932(J110P111)”, Fays Lincoln photograph collection(O1628). Eberly Family Special Collections Library, Penn State University Libraries/ The Isamu Noguchi Archive (New York), Used with permission from the Eberly Family Special Collections Library, Penn State University Libraries. ©The Isamu Noguchi Foundation and Garden Museum, New York/ ARS-JASPAR

56　アラ・モアナ・パークのための児童遊園は、ノグチにとって初めて独立した固定遊具をデザインする機会となった。

⑮ジャングルジムB

《305　ジャングルジムB詳細図》(fig.56)

1965-66年、縮尺1:50、鉛筆、インク、トレーシングペーパー、55.0×80.2cm

署名、インク、左下：Isamu Noguchi

標題、図番、縮尺、スタンプ、右下。

工事仕様表、鉛筆、スタンプ、右下。

個別模型写真(fig.15)

長円形の砂場の上に、擬似半球体を縦に二分した形体同士を少し離して、切断面を向き合わせて置き、間にステンレス棒を水平方向に多数渡してジャングルジムとしたもの。高さ3m、幅6m、奥行き4.68m。形体の芯は土盛りで、鉄筋コンクリートを被せ、表面は人造石研出し仕上げである。東西の側面には鉄筋タラップが設けられ、子供はこれを登って上からジャングルジムに入ることもできる。

向かい合う垂直面(板)の間に水平の棒を複数わたすジャングルジムは、後年のノグチの作例(アトランタの《プレイスケイプス》、札幌のモエレ沼公園)にある。「ジャングルジムB」はその嚆矢と言えよう。「ジャングルジムB」は1966年下半期まで施工対象に含まれていたが、計画変更により施工されなかった。(経緯は次稿)

⑯池、跳び越え橋、小川

⑱ジャングルジムA 敷地

《302　池・橋・砂場・その他詳細図》(fig.57)

1965-66年、縮尺1:100、1:50、1:20、鉛筆、インク、トレーシングペーパー、54.8×80.0cm

署名、インク、左下：Isamu Noguchi

標題、図番、縮尺、スタンプ、右下。

工事仕様表、鉛筆、スタンプ、右下。

《R-18　ジャングルジム廻り詳細(追加)》(1966年5月10日、5月17日：fig.58)

1966年、縮尺1:100、1:20

標題、図番、日付、鉛筆、右下。

児童遊園敷地の東側には「小川」(幅0.6〜1m、深さ約0.2m)が設計された。北東端の⑱ジャングルジムAの敷地南端を起点とし、傾斜に沿って⑯「池1」(直径6.4m)に注ぎ、「峯の散歩道」に至る階段の地下に設置されたパイプを介して東側の「池2」(同)と繋がる。小川は「池2」からさらに南へ丘の縁に沿って④アプローチの「築山」南端の「雨水舛」に至る。「池1」の北には小川を両岸から挟み込むように配置された二つの台形からなる「跳越橋」がかかり、⑰「ピラミッド」への通路となる。コンクリート製の橋の中央には幅30cmの間隔があき、子供は両岸から傾斜(水平長5m、高さ1.1m)を駆け上がって小川を飛び越える。橋の幅は両端部5.8m、先端部1.6mである。⑱「ジャングルジムA」敷地は水滴型プランの砂場とし、コンクリートで縁取る。中心にはオクテット・

トラスに用いられたアルミロッドによるジャングルジムを設置するためのアンカーが置かれる。ここから池1に向かう小川には角を落とした長さ360mmのPCブロックの列で縁取られる。

その後の設計変更により、「池1」と「池2」は統合されてひとつの池となり、「跳越橋」は「丸橋」に変更、「小川」のルートも少し変更された。それらの内、1966年度上半期に「小川」、「池」、「ジャングルジムA」敷地は施工され、竣工写真が残っている(fig.59, fig.60)。ノグチがいかに強く「ジャングルジムA」の設置を望んでいたかが伺えるが、遊具自体は実現しなかった。2023年現在、その敷地の輪郭が確認できる他、小川のPCブロックもある程度現存している。

fig.59 《池：竣工写真》1966年、ノグチ・アーカイヴ(ニューヨーク)蔵 inv.no.12038
〈Pond〉 photographer unknown, 1966, The Isamu Noguchi Archive (New York), inv.no. 12038 ©The Isamu Noguchi Foundation and Garden Museum, New York/ARS-JASPAR

fig.60 《ジャングルジムA 敷地：竣工写真》1966年、ノグチ・アーカイヴ(ニューヨーク)蔵 inv.no.12045
〈Place for Jungle Gyme A〉 photographer unknown, 1966, The Isamu Noguchi Museum (New York) inv.no. 12045 ©The Isamu Noguchi Foundation and Garden Museum, New York/ARS-JASPAR

⑰ピラミッド

《306　ピラミッド詳細図》(fig.61)
1965-66年、縮尺1:50、鉛筆、インク、トレーシングペーパー、54.7×79.8cm
署名、インク、左下：Isamu Noguchi
標題、図番、縮尺、スタンプ、右下。
工事仕様表、鉛筆、スタンプ、右下。

個別模型写真(fig.14)

幅0.6mの十字形通路を、4体の彫刻A～Dが取り囲んでいる。4体は高さ(2.85m)こそ等しいが、平面サイズは微妙に異なり、表面の階段形状のピッチと長さや、アルコーブの大きさと配置も個体ごとに一定範囲で変化する。この「ピラミッド」はどの面から見てもシンメトリーにはならない。遊具としての面白さもさることながら、彫刻作品としても意欲的な造形である。

ノグチにとってピラミッドは1933年の《鋤のモニュメント》と《プレイマウンテン》以来、記念作品やプレイグラウンドの重要なモチーフで、《リヴァーサイド・パーク・プレイグラウンド》の模型やイエール大学バイネッケ稀覯本図書館のサンクンガーデンにも現れるが、「こどもの国」の4分割ピラミッドはユニークな存在と言える。残念ながらこの「ピラミッド」は施工されなかった。

**6)ノグチ滞在第1期の配置図及び児童館建築の展開**

a. 原案に先行する二つの配地図と断面図(B群e)

上に見た全体模型及び原案配置図《旧002配置図》は、1965年11月末のノグチ離日までの間に完成したプランを表している。大谷研究室資料群には児童遊園の配置図が複数含まれるが、内容的に原案配置図に先行すると考えられるものが2点特定できる。それらをここでは制作順に「N1配置図」、「N2配置図」と呼ぶ。また原案を改訂した配置図は次稿で扱う。以下にN1、N2両配置図をみていく。この他N2配置図の罫線による断面図「N2断面図」がある。

《＊N1配置図》(1965年：fig.62)

1965年、縮尺表記なし、鉛筆、色鉛筆、インク、トレーシングペーパー、78.6×109.3cm

12本の縦罫(A〜L)、9本の横罫(0〜8)からなるメッシュ上に、スケートリンクを含む児童遊園全体が納められている。デザインが鉛筆、コンタ(等高線)が朱の色鉛筆で描き込まれている。

大谷研究室資料群の児童遊園配置図には(測量)基線が引かれているが、本図では横罫4と6の間を斜めに走っており、他の配置図に比して敷地は紙面に対してやや斜めに配置されている。

内容的特徴は以下の通り(項目番号は全体模型の表示による)。

②スケートリンクは舌状形ではなく台形の変形で、④前庭北の舌状形を踏襲していない。

③「亀ノ子砂場」がない。

④児童館前の門は丸アーチではなく、矩形面で構成される。

⑧児童館建築が描かれていない。

⑪スベリ台と⑬原始部落の形状が原案とは異なり、両者を結ぶL字状の通路が設けられている。

⑫三角砂場の輪郭を2度描き込んだ跡があるが消しゴムで消されている。

⑭ブランコがない。

⑮ジャングルジムBの位置が⑰ピラミッドに隣接する。

⑯池1、池2がない。

⑱ジャングルジムAにはトラス構造が描かれている。

以上の点と、N2配置図以降はスケートリンクが舌状形となることから、N1配置図は大谷研究室資料群中最も早い時期に作図されたノグチのデザインによる児童遊園の配置図であると判断される。

《＊N2配置図》(1965年：fig.63)

1965年、縮尺表記なし、鉛筆、インク、トレーシングペーパー、78.7×107.7cm

15本の縦罫(Y-9〜Y0〜Y5)、10本の横罫(X-6〜X0〜X3)からなるメッシュにスケートリンクと児童遊園全体を納める。基線はX0に一致し、図の角度が修正された。N1同様に児童館の建物は描かれていないが、②スケートリンクの形と位置は原案と等しく、③亀ノ子砂場が原案とほぼ等しい位置に描かれ、⑫三角砂場も岩山との関係で原案と同じ位置に置かれている。しかし⑬原始部落との関係は未整理で、砂場上の彫刻や擁壁

も原案とは異なる。⑪スベリ台の砂場から小川が伸び、三角砂場の東側の辺に沿って⑨切り通しの山の外周側溝に繋がっている。⑭ブランコの位置も原案とは異なる。⑮ジャングルジムBの位置は原案と等しい。

これらの結果から、N2配置図はN1配置図の後、原案配置図の前の時期に作図されたと考えられる。

b. 児童館デザインの新たな方針

元々「林間学校」の隣に予定されていた児童館をA地区児童遊園敷地内に設置し、デザインをイサム・ノグチと大谷幸夫が担当するという案は、契約書締結に関わらずノグチが実質的に設計参加する前に決まっていた。1965年8月30日に開かれた建設協力会第13回理事会の席上、新たな建設対象であるA地区児童遊園のデザインを依頼しているイサム・ノグチが来園したこと、大谷幸夫に依頼していた児童館の設計案が近日中にまとまること等の事務局説明を補足して、浅田孝は次のように述べている。

「相当広大な部分が未着手となっている。全体として運動場が足らないので、金子九郎氏の了解を得て、児童館をA地区に予定し、児童遊園と結びつけ、水、砂場、広場の要素を加味して、児童館は雨天シェルターを兼ねるものとし幼児、低学年用の施設としたい。建築としては簡素なものとなる。」[57]

ノグチが当初より児童館を含むデザインを提案しようとし、大谷もノグチの全体構想を優先したことの背景には、建設協力会側のこうした意向があったと考えられる。大谷は1965年末頃に次のように述べている。

「児童館と名づけられてはいるが、実際にはこの建物の趣旨はあくまでイサム・ノグチの造園の延長上にあるシェルターのある屋外のスペースというほどのもので、いわば日陰となり、雨宿りなどのための〈あづまや〉と考えれば良い。」[58]

c. イサム・ノグチによるジオデシック・ドーム案と大谷幸夫の反応

先述のように、イサム・ノグチは当初バックミンスター・フラーが発明したジオデシック・ドームを複数並べてシェルター（児童館）として用いる案をもっていた。大谷幸夫はこの提案について1996年に次のように回想している。

「イサムさんは建物のイメージとして初めて（ママ）フラーのドームを提案された。しかし建物のスケールなどを考えると、ドームではせっかくの谷あいの視界が閉ざされてしまい、また遊園地の空間の流動的なリズムと呼応する建物として、球ではあまりにも自己完結的であるように思った。」[59]

57　財団法人こどもの国建設協力会第13回理事会議事録 1965年8月30日開催。「児童館 日本自転車振興会」綴、文化庁国立近現代建築資料館蔵、資料番号17-2-5。浅田発言中の金子九郎は日本児童遊園協会理事で、こどもの国の設計集団「造園部門」に唯一人参加した。マスタープランでの「児童遊園A」の立案に関わったと思われる。事務局説明中の大谷の児童館設計案とは小論で見た「児童館第2案」を指すものと推測される。金子の肩書きについて：『こどもの国50年史』P.254

58　大谷幸夫『SD』No.13（1966年1月）、p.63

59　大谷幸夫「イサム・ノグチさんのこと」p.136

これは「遊園地の…流動的なリズム」という言葉から、既にプレイグラウンドのデザインが明確になった段階での所見と思われる。しかし大谷は直ちに反対したのではなかった。ノグチの原案設計が一旦完成し、施工を控えた1966年1月号のSD誌上での大谷は次のように記している。

「はじめは、イサム・ノグチの案にある三角形のモチーフを平面にして、それに立体トラスを結びつける案を検討したが成功しなかった。」[60]

大谷の言う「イサム・ノグチの案」とはジオデシック・ドームを指し、「三角形のモチーフを平面にして」とは、ドームの外殻構造の単位である正三角形を引用して床面の「モチーフ」にしたということであろう。この時大谷が試みた立体トラスの模型写真が、『建築』1966年2月号に「大谷幸夫 児童館第一案」として掲載されている。(fig.64)[61] ロッドの両端を接合して四面体をつくり、それを組み合わせたようにみえるが、オクテット・トラスとは異なる構造のようである。ジオデシック・ドームは見送られたが、大谷はノグチの意を汲んで、まず三角形の床とトラス式の屋根からなる児童館を試みたのである。

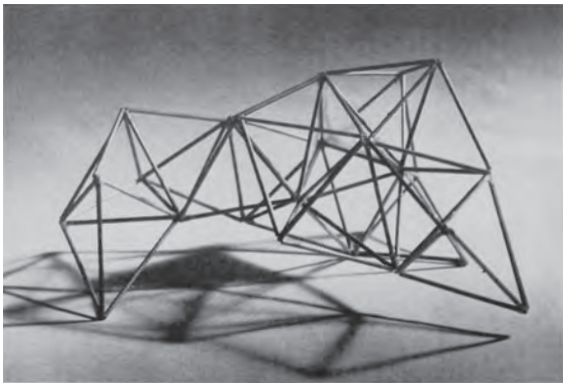


fig.64 大谷幸夫による児童館屋根フレーム案模型写真。写真：T.Oyama、『建築』1966年2月号より
Sachio Otani, Model for Truss Structure for the Roof of Children's House. Photographed by T. Oyama. From the February issue of "Kenchiku," 1966.

d. 大谷幸夫による児童館デザイン(児童館第3案)の生成過程

d-1)《＊大谷幸夫による児童館屋根配置図スケッチ》(fig.65)

1965年、縮尺表記なし、鉛筆、色鉛筆、トレーシングペーパー(大判トレーシングペーパーに貼り付け)、73.7×121.8cm

書き込み、色鉛筆、台紙左上：建築8月号(以下略)

立体トラスを断念した大谷幸夫は、「そこで、イサム・ノグチのデザインにある三角形の平面を残し、その上に円錐シェルを覆うことになった」[62]。新たなシェルの着想源となった体験を大谷は次のように回想している。

「たしか風の冷たい日だったと思うが、家の近くの夜道で、数枚の枯葉がたわむれ合って舞っているように路面を流れていくのが見えた。それは谷あいを子供たちがもつれ合って走り廻る姿と重なって、ようやく今提示されている建物のイメージを結ぶことができた。不思議なことにそこでの屋根ユニットは、

60 イサム・ノグチ、大谷幸夫「作品2—こどもの国・児童館と遊園地」『SD』No.13(1966年1月)p.63

61 イサム・ノグチ、大谷幸夫「こどもの国 遊園・児童館」『建築』No.66(1966年2月)p.88

62 大谷『SD』13. P.63

フラー・ドームのユニットと大変類似している。イサムさんも直ちにこの案にOKを出してくださった。」[63]

大谷研究室資料群のこの配置図スケッチに見る児童館屋根の、銀杏の葉のような形が螺旋状に連なる動きのある配置は、大谷の言葉をよく裏付けている。興味深いことにスケッチ中のスケートリンクは「N1配置図」のそれであり、一方「三角砂場」は「N2配置図」に近く、制作時期は両配置図の中間に位置付けられるだろう。この案が出たのは、枯葉の回想から、ノグチ離日も迫った1965年10月〜11月頃と推測される。本スケッチは『建築』1966年8月号に写真掲載されている。

d-2)児童館屋根デザインの具体化

《101　こどもの国児童館屋根伏図》(fig.66)

1965-1966年、縮尺1：100、鉛筆、インク、トレーシングペーパー、55.2×81.0cm

設計者名、スタンプ、左下：大谷幸夫

標題、図番、縮尺、スタンプ、右下。

《R-13　＊児童館屋根伏図スケッチ》(1966年4月11日：fig.67)

1966年、縮尺表記なし、鉛筆、トレーシングペーパー、57.5×84.3cm

図番、日付、右下。

大谷の最初のスケッチに見る児童館屋根の動きのある配置はしかし、「これだけ単位数が多い場合には構造的に柱が多くなりすぎて複雑化するだけなので、やはり柱数の少ない規則性が必要になった」[64]。こうした考えから《101屋根伏図》と《R-13屋根伏付図スケッチ》のように整理された。101は梁伏図で、一辺6.72mの正三角形ユニットそれぞれに屋根材料の記号がある。主体は鋼板で、所々にFRP(ポリドームパネル)を用い、屋根架構しない区画(オープン)もある。全体模型でも材料の違い(FRP部分は透明プラスチック)やオープン部分が再現されている。1966年4月11日付のR-13は屋根曲面の方向を示している。101から屋根の配置に若干の変更が行われており、竣工後の写真に近い。

d-3)児童館床の正三角形群と《リヴァーサイド・パーク・プレイグラウンド》の模型

大谷幸夫の三角形をモチーフにした児童館床は、図面上では《旧002配置図》が最初であり、全体模型でも屋根部品を取り外すとプラットフォーム状に敷地から立ち上がった各ユニットの床を確認することができる。

大谷はフラーのジオデシック・ドームを念頭に三角形モチーフを発想したと思われるが、その一方で、イサム・ノグチは三角形ユニットをレリーフ状に重層させた遊具「ステップ・ピラミッド」を《国連本部のためのプレイグラウンド》(fig.34)モデルや、《リヴァーサイド・パーク・プレイグラウンド》のいくつかの模型に残している。大谷幸夫の下でノグチによるこどもの国間連の図面を担当していた藤田皓一氏は、イサム・

63　大谷「イサム・ノグチさんのこと」p.138

64　大谷『SD』13. p.63

ノグチが《リヴァーサイド・パーク・プレイグラウンド》モデルの写真を設計連合のアトリエで見せてくれたと語っている[65]。児童館床の正三角形のプラットフォームは、ノグチにとっても意に適っていたに違いない。

イサム・ノグチは1965年11月27日夜、こどもの国のためのデザインを完成させて帰米した。同日付朝日新聞にノグチは次のようなコメントを寄せている。

「30年来のわたしの設計の体験をすべて生かした。遊び場には自然を残し、自然を生かさなければならない。遊んでいて心のたかぶりをおぼえるようなそんな私の夢が、こどもの国のネライともぴったり合ってでき上がった。」

同記事は続けて、「芝生の丘の間に長く伸びるスベリ台、ドームをくぐり抜けるジャングルジム、馬のクラ型の置物の中や上を飛びまわれる“原始時代の町”などが点在している。約一千平方メートルの児童館は遊園の真中にあり、三角形の屋根を部屋の大きさに応じて組み合わせ、互いに対角に置いた“抽象画”のような場所」と上に見た原案に沿った設計内容を記述している[66]。

イサム・ノグチの帰米後、東京では児童館建物の設計が急ピッチで進められた。A地区児童遊園の会計年度は昭和40年度で、一刻も早い着工が求められたのである。

イサム・ノグチが再び来日したのは児童遊園の工事が始まっていた1966年4月であった。「こどもの国ニュース」7号は、工事現場に立つノグチの次のような言葉を伝えている。

「こどもたちは、いちばん新しいもの、たとえば宇宙衛星やロケットなどが好きですが、このような新しい時代のものと、大昔の原始時代のような感じのものとを組み合わせて、この児童遊園を月世界のようなめずらしい、ちがった世界にしたいのです。そのためには、建築に見えないような建物、遊び道具に見えないような遊び道具でないといけません。」[67]

児童遊園原案に見た埴輪を彷彿させる「原始部落」や古代ギリシア風「野外劇場」などの「大昔」の表象と、フラーのジオデシック・システムとの共存は、ノグチのこうした考えを反映している。《ジャングルジムA》だけでなく、児童館を構成する正三角形、同じく正三角形の砂場、なだらかな丘陵面を覆うように配されたハニカム状の正六角形の縁取りをもつ《亀ノ子砂場》、半球面ドームを二分した《ジャングルジムB》などは、いずれも「新しい時代」を表象し、フラーのシナジェティクスにインスピレーションを受けたものと言えるだろう。これらの遊具は「大地のフォルムとジオデシックス（測地学）の統合」（ノグチ）を具体化するものだった。

例えば《ジャングルジムB》における二分された半球体間の幅2mの空間にステンレス棒18本を渡す作りは、

65　藤田氏との面談。また、『SD』No.13, p.61にも「リヴァーサイド・ドライブの遊園地の計画の模型写真」が掲載されている。
66　「児童館など設計できる　こどもの国」朝日新聞（東京版）1965年11月27日（16）
67　児童遊園 こどもの夢を、大きく、広く、そだてたい―イサム・ノグチさんの設計―」『こどもの国ニュース』No.7（1966年5月）p.2

フラーのテンセグリティの概念、元素間や惑星間に働く張力と圧縮力の関係を図解しているようにも見える。球体の表面のタラップを上って狭間に入り、ランダムな間隔で張られたステンレス棒の間を潜り抜けて遊ぶ子供たち。狭間はまさしく動的な空間であり、シナジェティックな空間が体験されるのである。

再来日したノグチは原案実現の夢を語った。しかしその後は児童遊園の設計変更が繰り返され、原案の意欲的な内容は大幅に抑制されていく。（以下、次稿／下）

（横浜美術館主任学芸員）

**【謝辞】**

小論執筆に当たり、次の方々並びに機関に多大なご協力とお力添えをいただきました。心よりお礼申し上げます。

故大谷幸夫氏、山本敬則氏、藤田皓一氏、植野彰規氏、松崎晃氏、室田恵実氏、大谷研究室、社会福祉法人こどもの国協会、文化庁国立近現代建築資料館、植野石膏模型製作所、広島市立大学芸術資料館

**図版データの表記について**

大谷研究室資料群の「こどもの国児童館・A地区児童遊園」の図面類は「設計連合」時代の作図であるが、著作権者との話し合い基づき「作図：大谷研究室（旧設計連合）」とした。

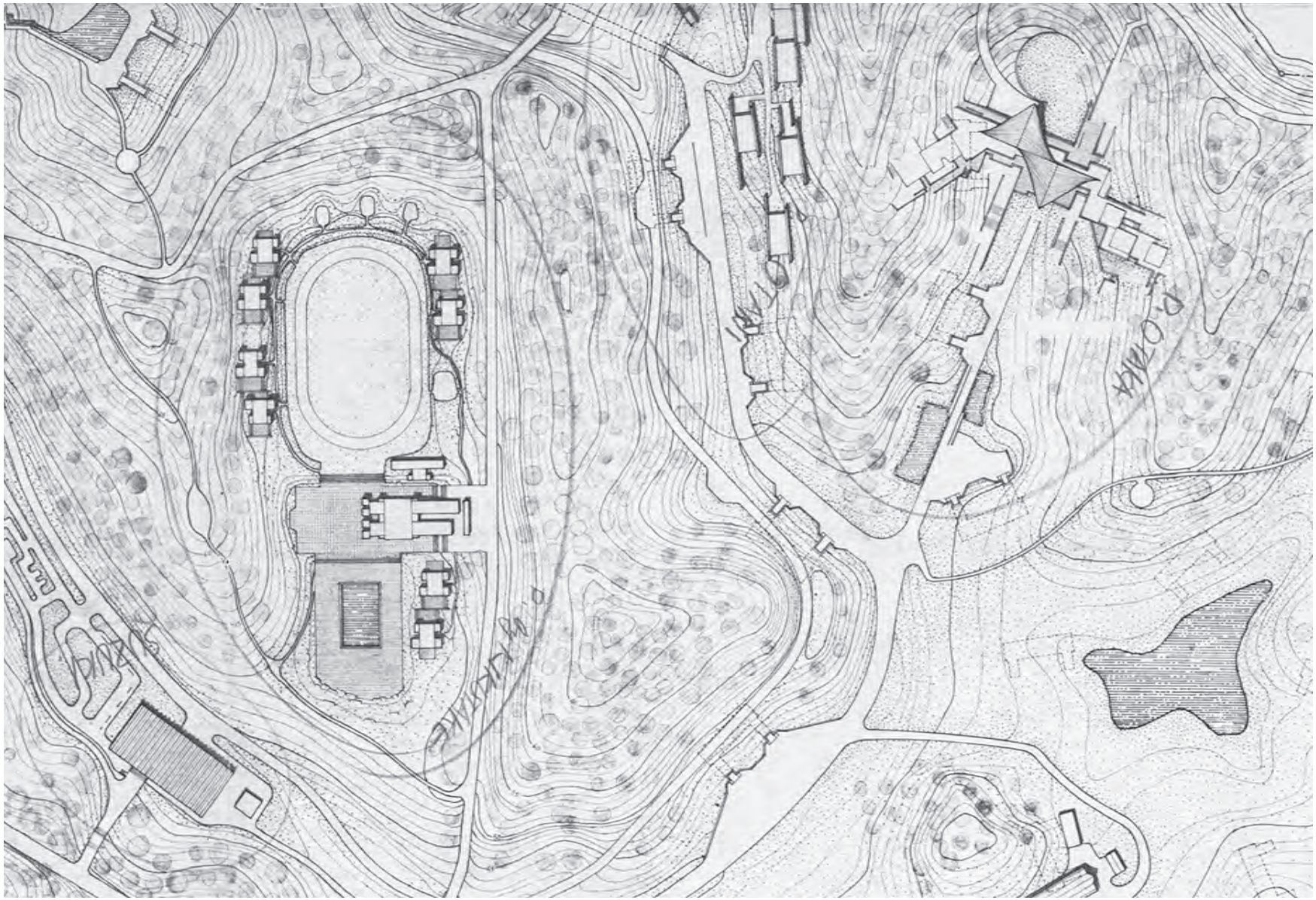


fig.3　環境開発センター《こどもの国計画マスタープラン》1964年5月25日（部分）、ノグチ・アーカイヴ（ニューヨーク）蔵
Research Center for Environmental Development and Design〈Master Plan of the Kodomo No Kuni〉(Detail), May 25, 1964, The Isamu Noguchi Archive ©The Isamu Noguchi Foundation and Garden Museum, New York/ARS-JASPAR

fig.4　《こどもの国計画マスタープラン》(1964年5月25日)におけるイサム・ノグチ担当地区のマーキング。ノグチ・アーカイヴ(ニューヨーク)蔵
Red marking of Noguchi's playground site on〈Master Plan of the Kodomo No Kuni〉of May 25, 1964, The Isamu Noguchi Archive ©The Isamu Noguchi Foundation and Garden Museum, New York/ARS-JASPAR

fig.5　大谷幸夫《＊こどもの国児童館第1案鳥瞰スケッチ》1964年、鉛筆、インク、トレーシングペーパー、58.5×42.1cm、大谷研究室旧蔵「こどもの国児童館・A地区児童遊園」資料群
Sachio Otani〈Bird's-eye View Sketch. Children's House（First Design）for the Kodomo No Kuni〉1964, pencil, ink on tracing paper, 58.5×42.1cm, Otani Associates Kodomo No Kuni Collection

fig.6　大谷幸夫《＊こどもの国児童館第2案配置図 a》作図：大谷研究室(旧設計連合)、1965年8月10日、鉛筆、色鉛筆、トレーシングペーパー、55.2×80.0cm、大谷研究室旧蔵「こどもの国児童館・A地区児童遊園」資料群
Sachio Otani 〈Site Plan (a). Children's House (Second Design) for the Kodomo No Kuni〉, Drawn by Otani Associates (former Sekkei Rengo), Aug. 10, 1965. pencil, brown pencil on tracing paper, 55.2×80.0cm, Otani Associates Kodomo No Kuni Collection.

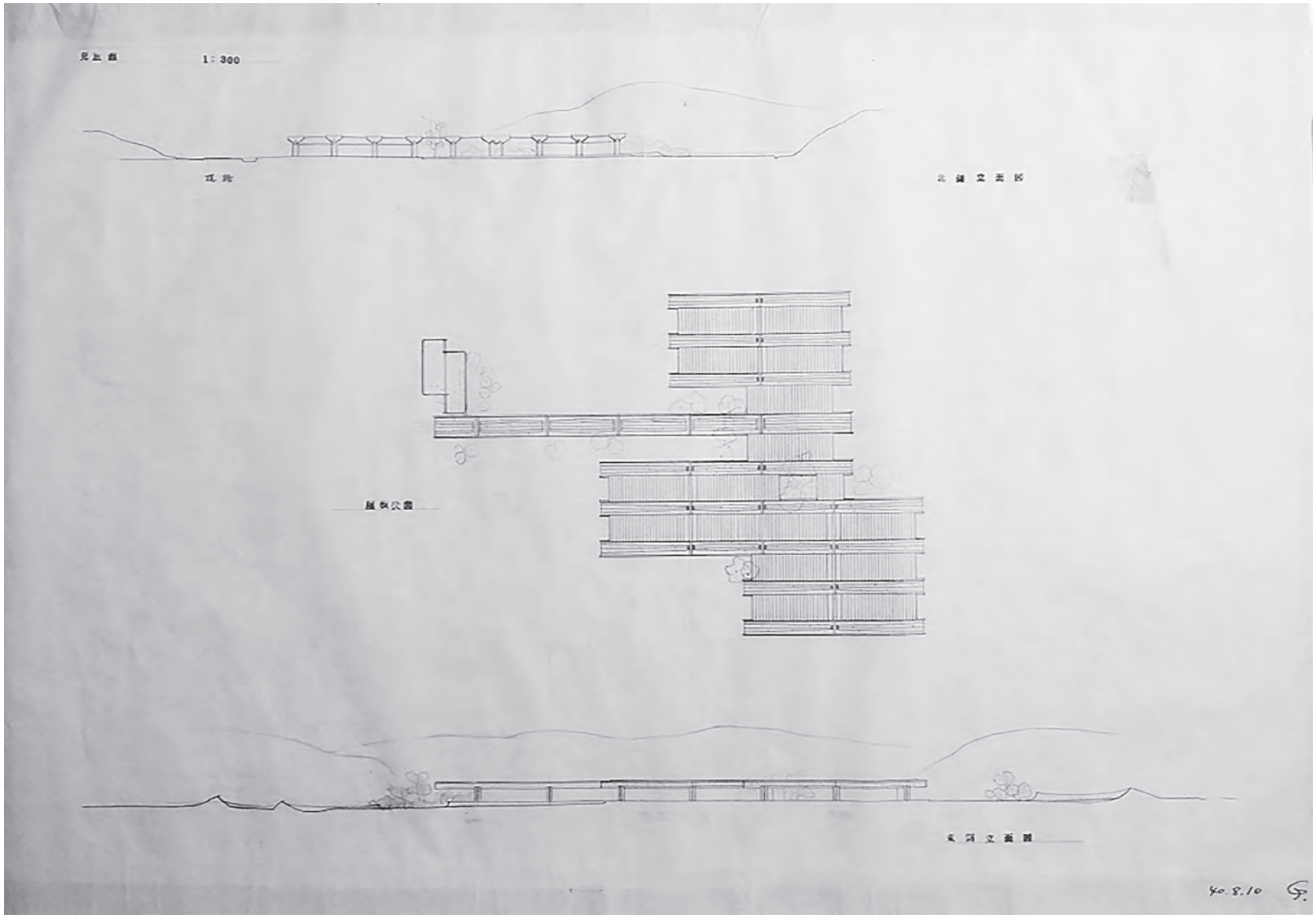



fig.7 大谷幸夫《＊こどもの国児童館第2案立面図・屋根伏図》作図：大谷研究室（旧設計連合）、1965年8月10日、鉛筆、トレーシングペーパー、55.5×79.6cm、大谷研究室旧蔵「こどもの国児童館A地区児童遊園」資料群
Sachio Otani 〈Elevations, Roof Plan of Children's House (Second Design) for the Kodomo No Kuni〉 Drawn by Otani Associates (former Sekkei Rengo), Aug. 10, 1965, pencil on tracing paper, 55.5×79.6cm, Otani Associates Kodomo No Kuni Collection

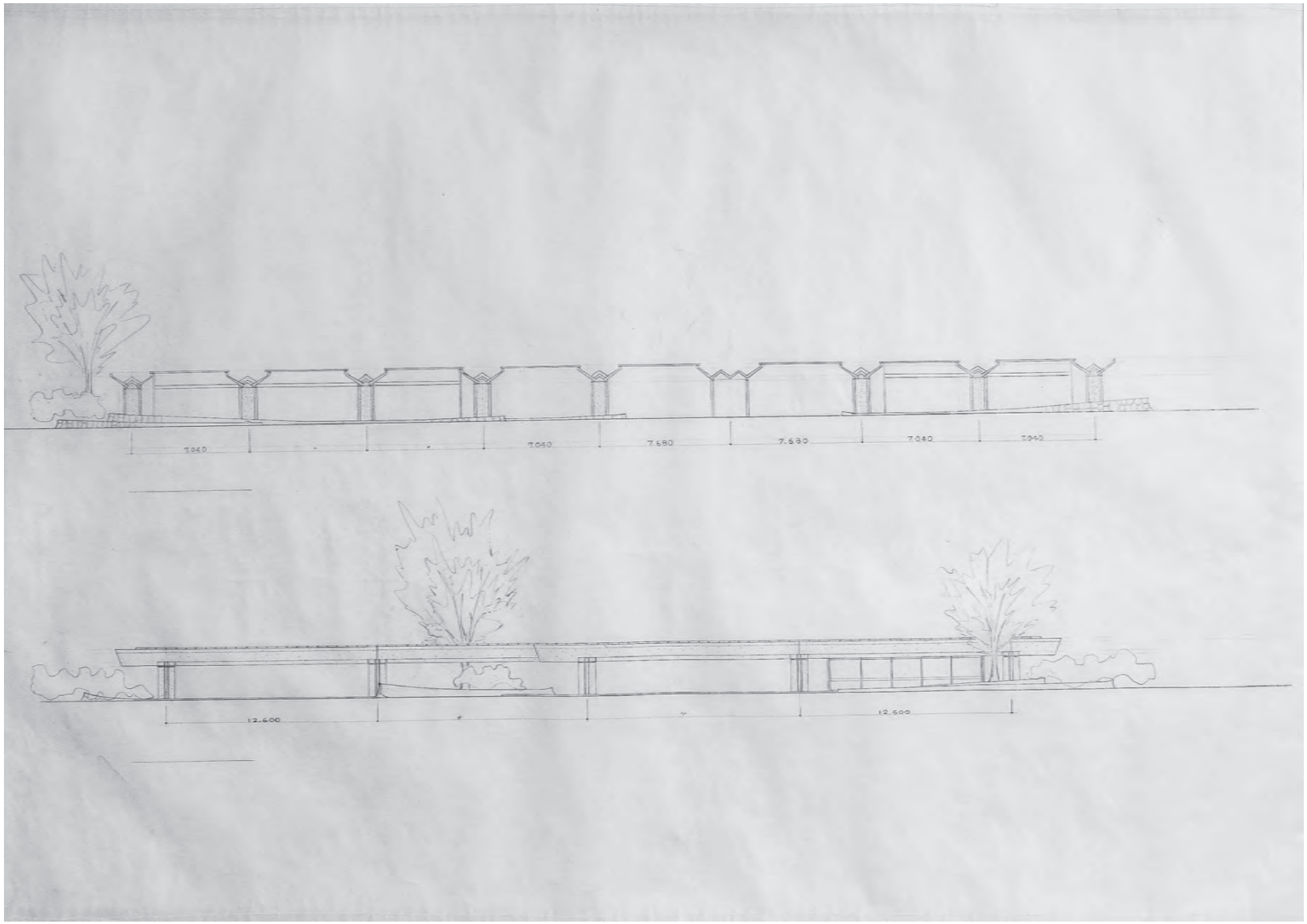



fig.8　大谷幸夫《＊こどもの国児童館第2案断面図・立面図》作図：大谷研究室（旧設計連合）、1965年、鉛筆、トレーシングペーパー、54.8×80.1cm、大谷研究室旧蔵「こどもの国児童館・A地区児童遊園」資料群
Sachio Otani〈Elevation and Section of Children's House (Second Design) for the Kodomo No Kuni〉Drawn by Otani Associates (former Sekkei Rengo), 1965, pencil on paper, 54.8×80.1cm, Otani Associates Kodomo No Kuni Collection

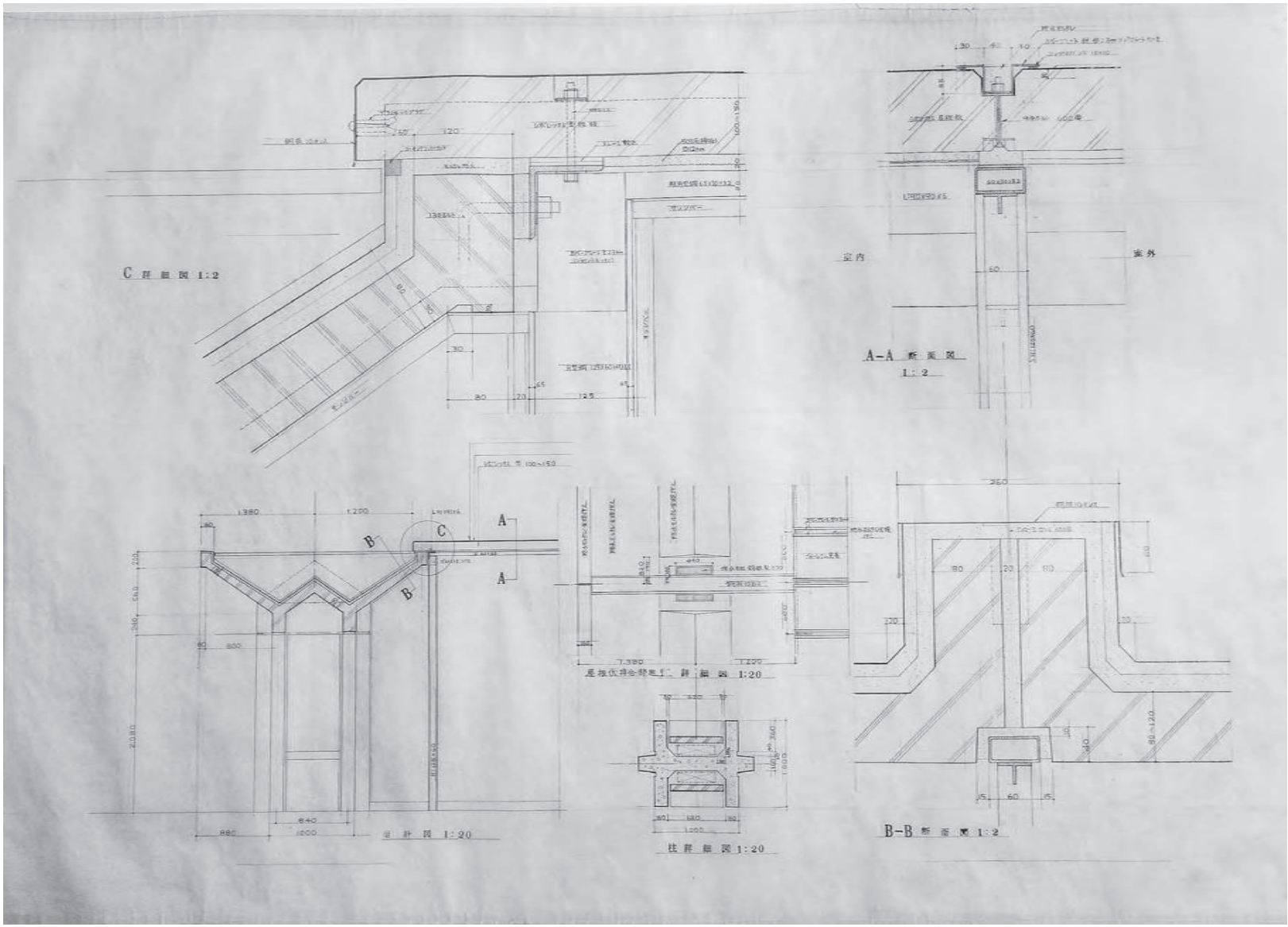



fig.9　大谷幸夫《＊こどもの国児童館第2案屋根・柱詳細図》作図：大谷研究室（旧設計連合）、1965年、鉛筆、トレーシングペーパー、54.8×80.2cm、大谷研究室旧蔵「こどもの国児童館・A地区児童遊園」資料群
Sachio Otani 〈Detail Drawings of Roof and Pillar. Children's House (Second Design) for the Kodomo No Kuni〉 Drawn by Otani Associates (former Sekkei Rengo), 1965, pencil on tracing paper, 54.8×80.2cm, Otani Associates Kodomo No Kuni Collection

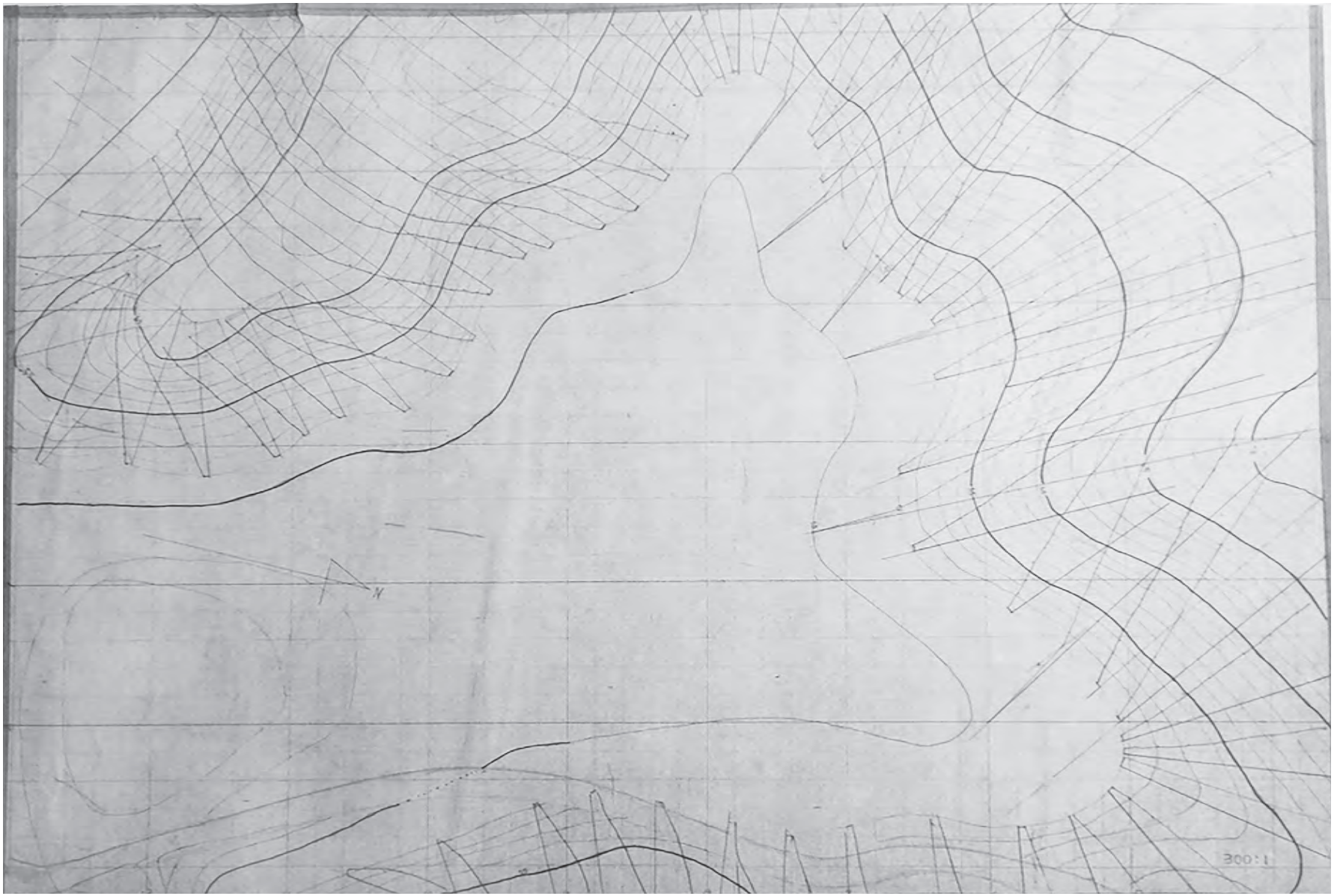



fig.10　《＊児童館第2案敷地コンタ》作図：大谷研究室（旧設計連合）、1965年頃、青焼、60.3×83.7cm、大谷研究室旧蔵「こどもの国児童館・A地区児童遊園」資料群
〈Contoured Drawing of the Site for Children's House (Second Design)〉, Drawn by Otani Associates (former Sekkei Rengo), ca.1965, blueprint, 60.3×83.7cm, Otani Associates Kodomo No Kuni Collection

fig.13　イサム・ノグチ、大谷幸夫《こどもの国児童館・A地区児童遊園石膏模型》原型：イサム・ノグチ、大谷幸夫、製作：植野石膏模型製作所、1965年、石膏、真鍮、プラスティック、木製台座とアクリルカヴァー付き。12.0×143.0×75.0cm（石膏部分）、大谷研究室旧蔵「こどもの国児童館・A地区児童遊園」資料群、撮影：論者
Isamu Noguchi, Sachio Otani 〈Plaster Model of the Playground and Children's House in Zone A of the Kodomo No Kuni〉, Master Model：Isamu Noguchi and Sachio Otani, Casting and Manufacturing: Ueno Sekko Mokei Seisakusho, 1965, plaster, brass and plastic, woodpedestal, acrylic cover. 12.0×143.0×75.0cm, Otani Associates Kodomo No Kuni Collection, photographer：Naoaki Nakamura

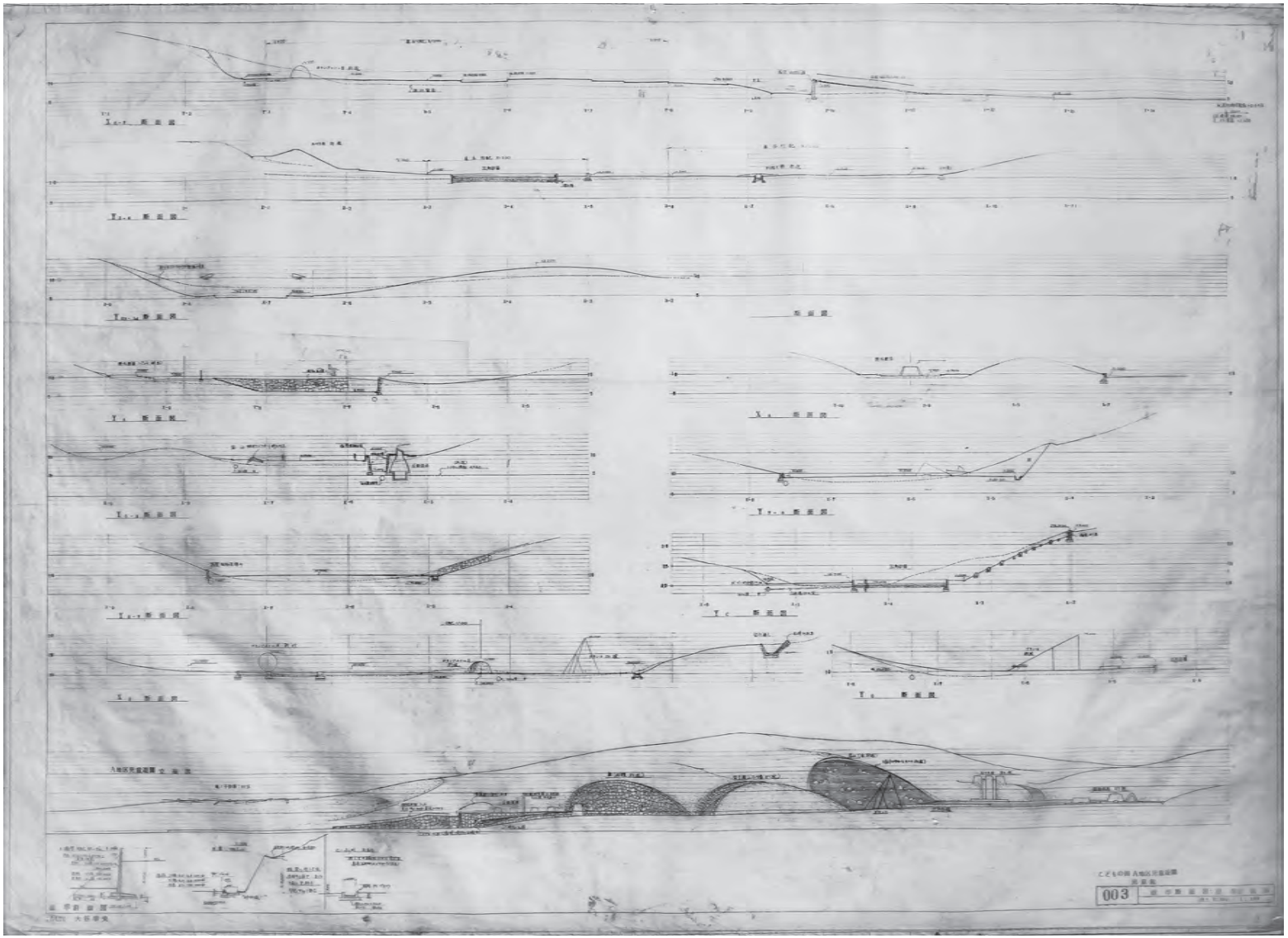



fig.18　イサム・ノグチ、大谷幸夫《こどもの国児童館・A地区児童遊園 003 標準断面図・標準詳細図》作図：大谷研究室（旧設計連合）、1965-66年、鉛筆、インク、トレーシングペーパー、78.4×108.1cm、大谷研究室旧蔵「こどもの国児童館・A地区児童遊園」資料群
Isamu Noguchi, Sachio Otani 〈003 Typical Cross Sections and Standard Detail Drawings of Playground and Children's House in Zone A of the Kodomo No Kuni〉 Drawn by Otani Associates (former Sekkei Rengo), 1965-66, pencil, ink on tracing paper, 78.4×108.1cm, Otani Associates Kodomo No Kuni Collection

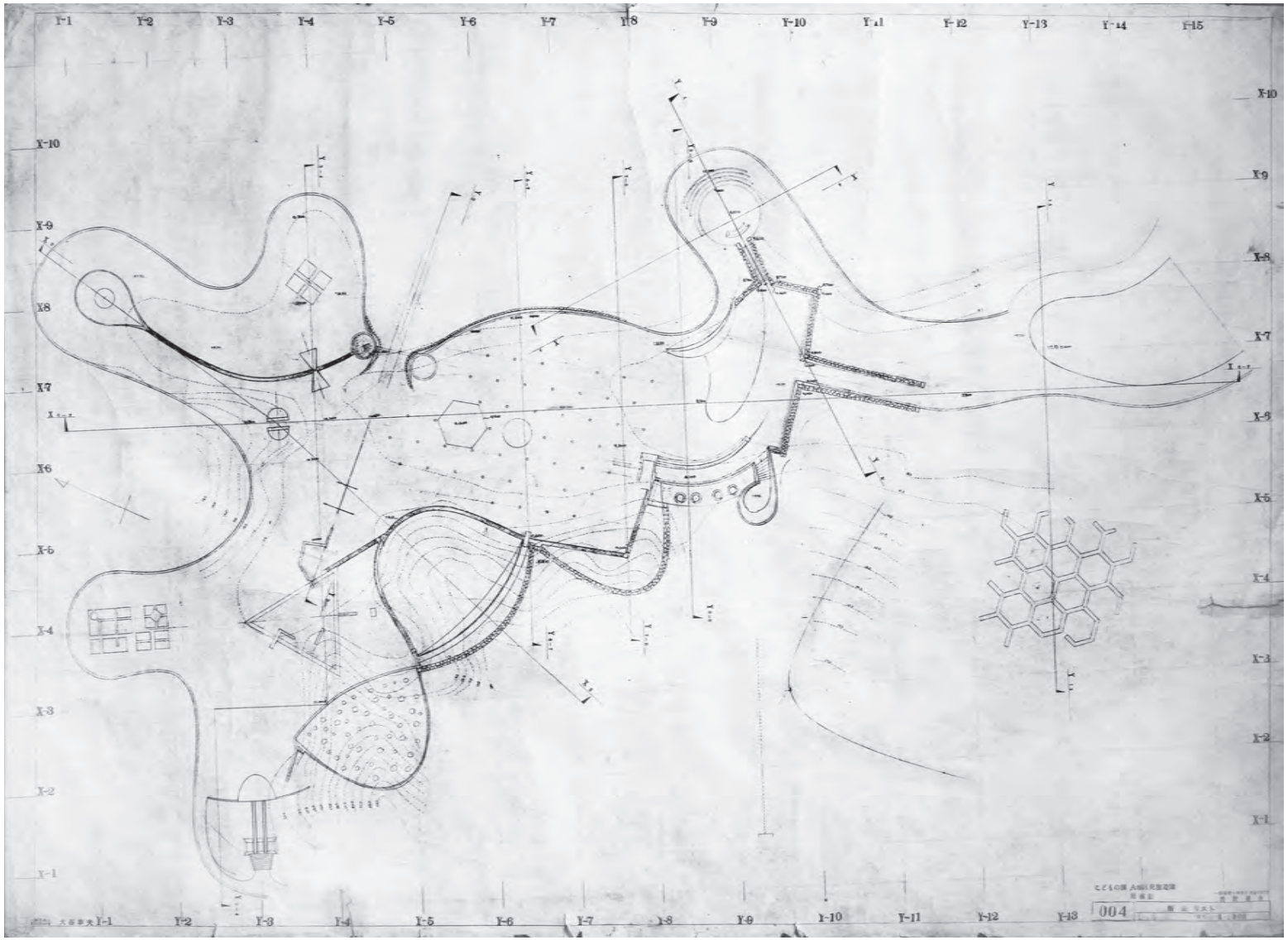



fig.19　イサム・ノグチ、大谷幸夫《こどもの国児童館・A地区児童遊園 004 断面リスト》作図：大谷研究室（旧設計連合）、1965–66年、鉛筆、インク、青焼、78.5×108.0cm、大谷研究室旧蔵「こどもの国児童館・A地区児童遊園」資料群
Isamu Noguchi, Sachio Otani 〈004 List Plan of Elevations, Playground and Children's House in Zone A of the Kodmo No Kuni〉 Drawn by Otani Associates (former Sekkei Rengo), 1965–66, pencil, ink on blueprint. 78.5×108.0cm, Otani Associates Kodomo No Kuni Collection

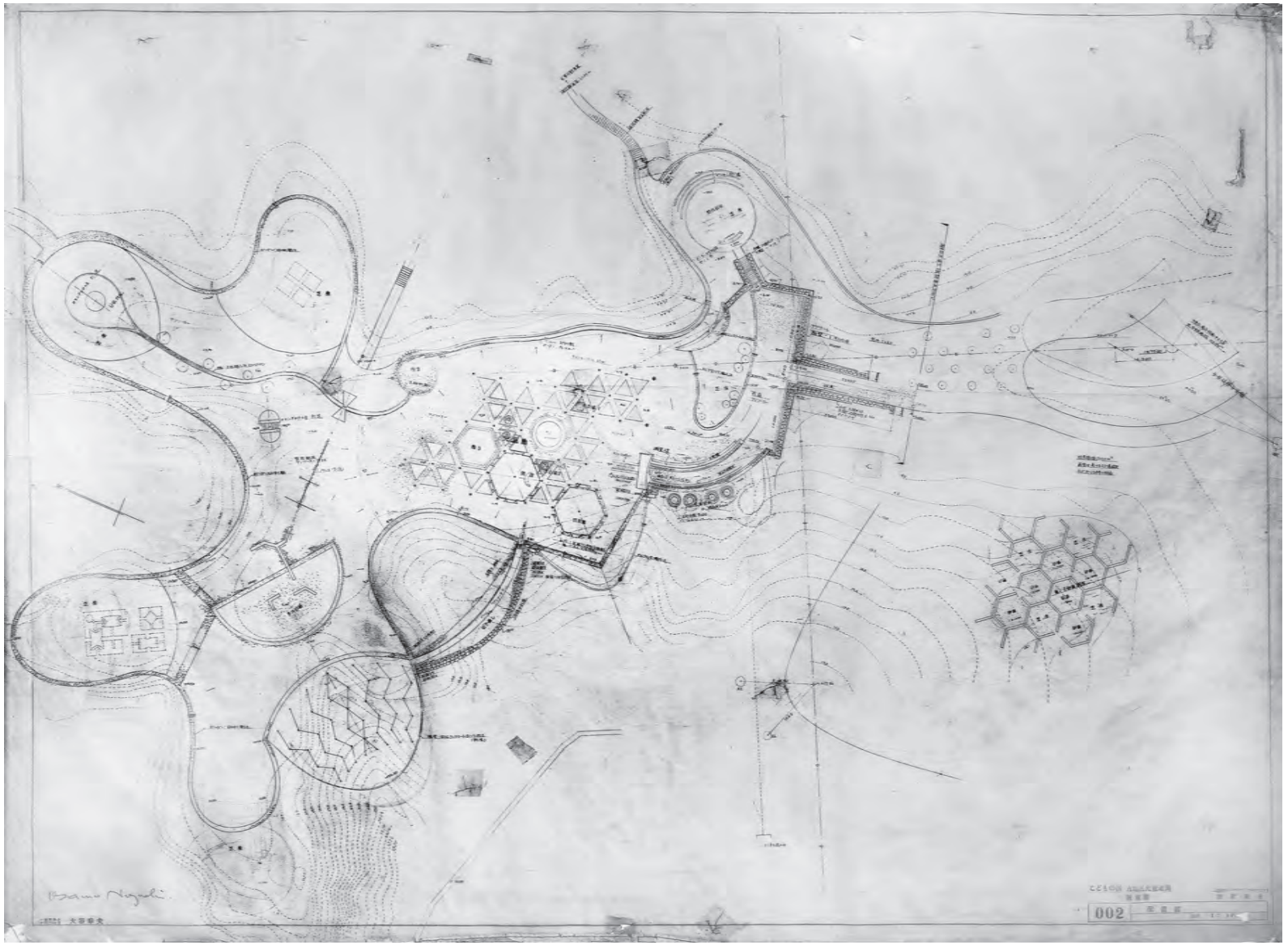



fig.20　イサム・ノグチ、大谷幸夫《こどもの国児童館・A地区児童遊園 002 配置図》作図：大谷研究室（旧設計連合）、1966年、鉛筆、インク、トレーシングペーパー、78.5×108.0cm、大谷研究室旧蔵「こどもの国児童館・A地区児童遊園」資料群
Isamu Noguchi, Sachio Otani〈002 Site Plan of Playground and Chilfren's House in Zone A of the Kodomo No Kuni〉Drawn by Otani Associates (former Sekkei Rengo), 1966, pencil, ink on tracing paper, 78.5×108.0cm, Otani Associates Kodomo No Kuni Collection

fig.21　イサム・ノグチ、大谷幸夫《こどもの国児童館・A地区児童遊園 旧002 配置図》作図：大谷研究室（旧設計連合）、1965年、青焼、ノグチ・アーカイヴ蔵 inv.no. CR585.21a
Isamu Noguchi, Sachio Otani 〈002 Site Plan (Original Version) of Playground and Children's House in Zone A of the Kodomo No Kuni〉, Drawn by Otani Associates (former Sekkei Rengo), 1965, blueprint, The Isamu Noguchi Archive, inv.no. CR585.21a ©The Isamu Noguchi Foundation and Garden Museum, New York/ARS-JASPAR

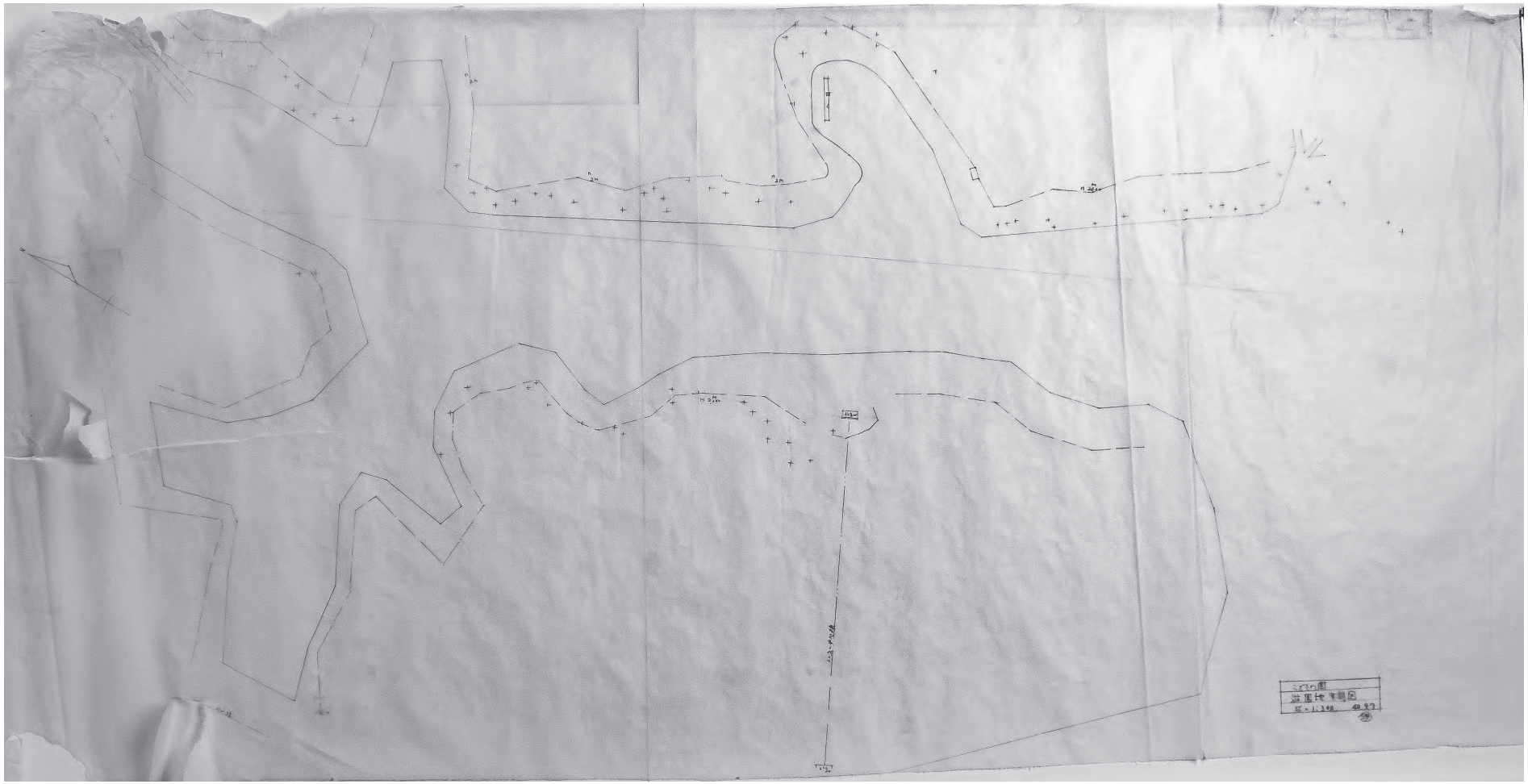


fig.23　《こどもの国遊園地実測図》1965年9月7日、作図：大谷研究室（旧設計連合）、鉛筆、トレーシングペーパー、59.6×133.0cm、大谷研究室旧蔵「こどもの国児童館・A地区児童遊園」資料群
〈Surveyed Drawing of the Site for Playground in Zone A of the Kodomo No Kuni〉, Drawn by Otani Associates (former Sekkei Rengo), Sep.7, 1965, pencil, tracing paper, 59.6×133.0cm, Otani Associates Kodomo No Kuni Collection

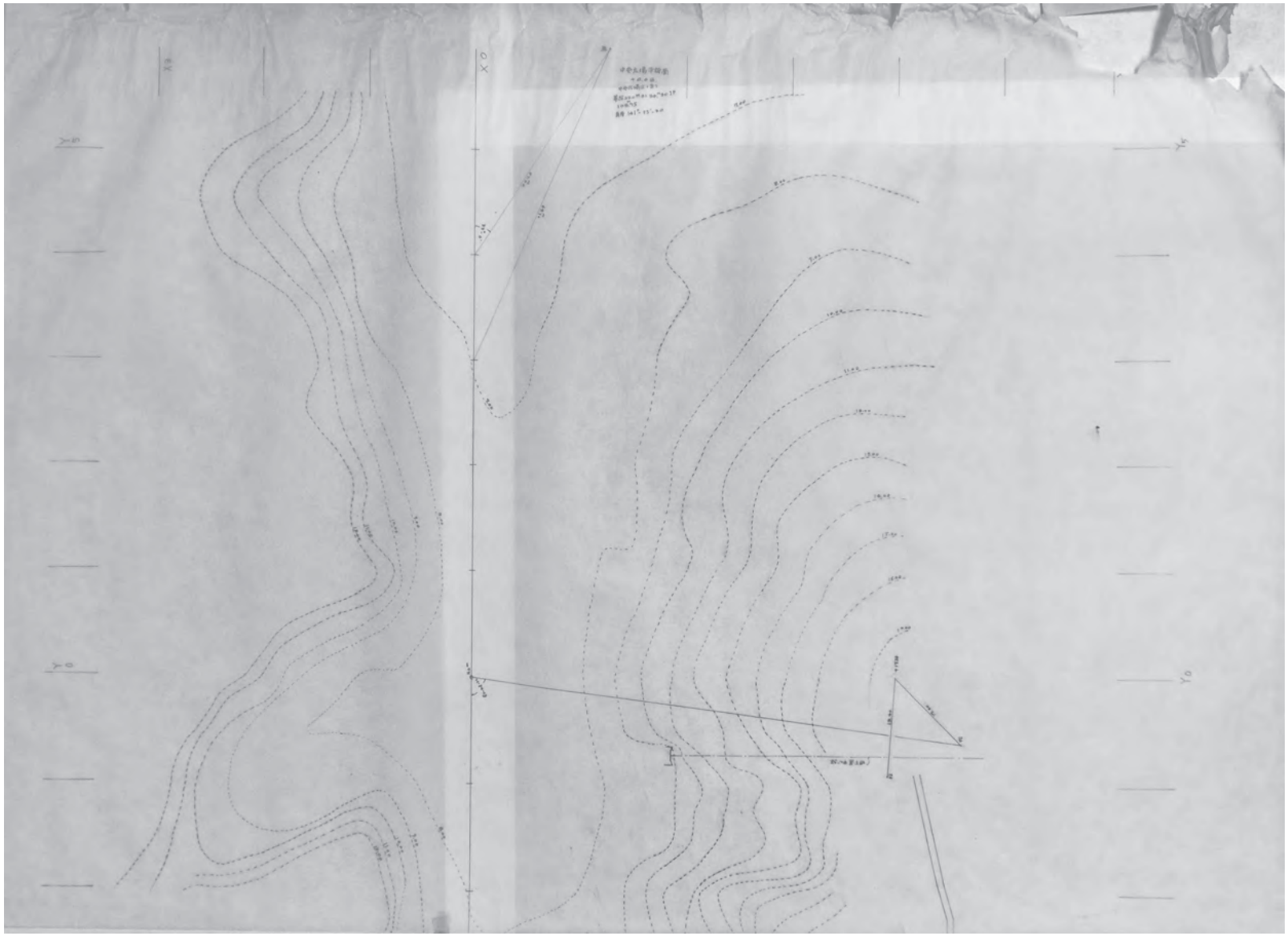


fig.24　《＊こどもの国 A地区児童遊園敷地南部コンタ図》作図：大谷研究室（旧設計連合）、1965年、鉛筆、トレーシングペーパー、54.6×88.7cm、大谷研究室旧蔵「こどもの国児童館・A地区児童遊園」資料群（上辺が南。スケートリンク敷地からアプローチ部分を示す）
〈Contoured Plan of South Part of the Site of Playground in Zone A of the Kodomo No Kuni〉 Drawn by Otani Associates (former Sekkei Rengo), pencil, tracing paper, 54.6×88.7cm, Otani Associates Kodomo No Kuni Collection

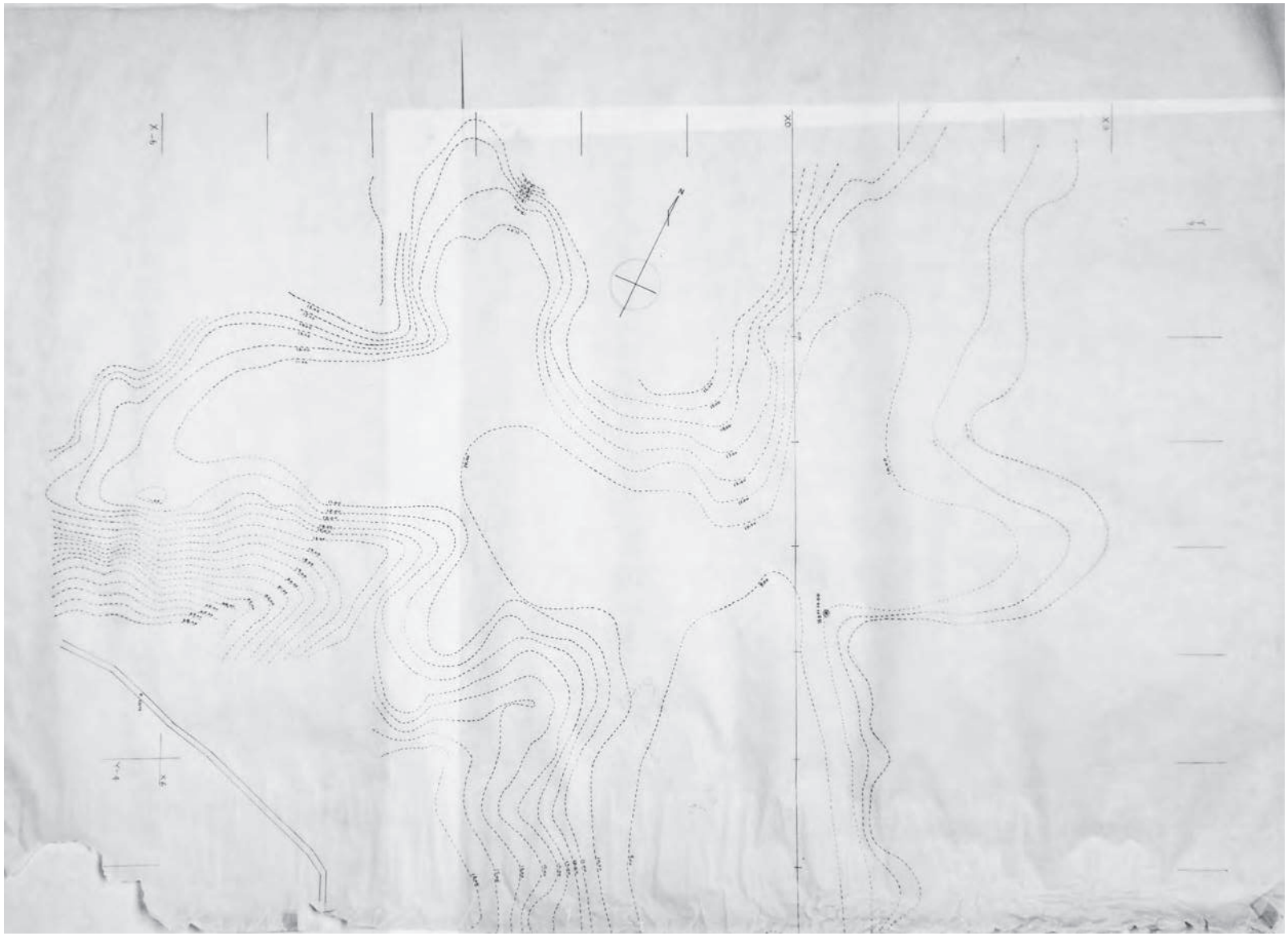


fig.25　《＊こどもの国 A地区児童遊園敷地北部コンタ図》作図：大谷研究室（旧設計連合）、1965年、鉛筆、トレーシングペーパー、84.5×58.4cm、大谷研究室旧蔵「こどもの国児童館・A地区児童遊園」資料群（上辺が北側。児童館敷地から児童遊園敷地を表わす。）
〈Contoured Plan of North Part of the Site of Playground in Zone A of the Kodomo No Kuni〉 Drawn by Otani Associates (former Sekkei Rengo), pencil, tracing paper, 84.5×58.4cm, Otani Associates Kodomo No Kuni Collection

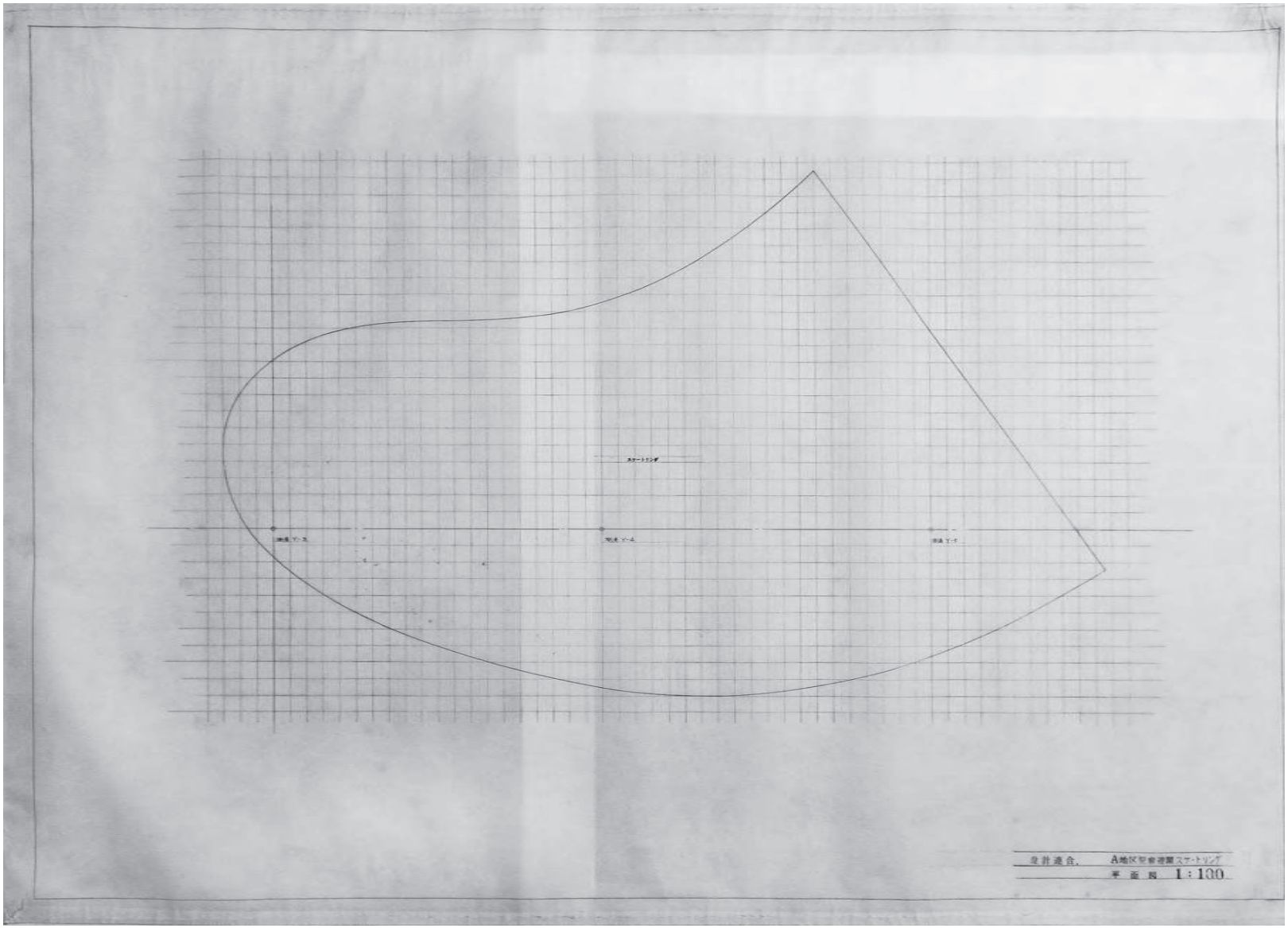



fig.26　イサム・ノグチ《こどもの国 A地区児童遊園スケートリンク平面図》作図：大谷研究室（旧設計連合）、1965年、鉛筆、トレーシングペーパー、55.0×80.2cm、大谷研究室旧蔵「こどもの国児童館・A地区児童遊園」資料群
Isamu Noguchi 〈Plan of Skate Rink, Playground in Zone A of the Kodomo No Kuni〉 Drawn by Otani Associates (former Sekkei Rengo), 1965, pencil, tracing paper, 55.0×80.2cm, Otani Associates Kodomo No Kuni Collection

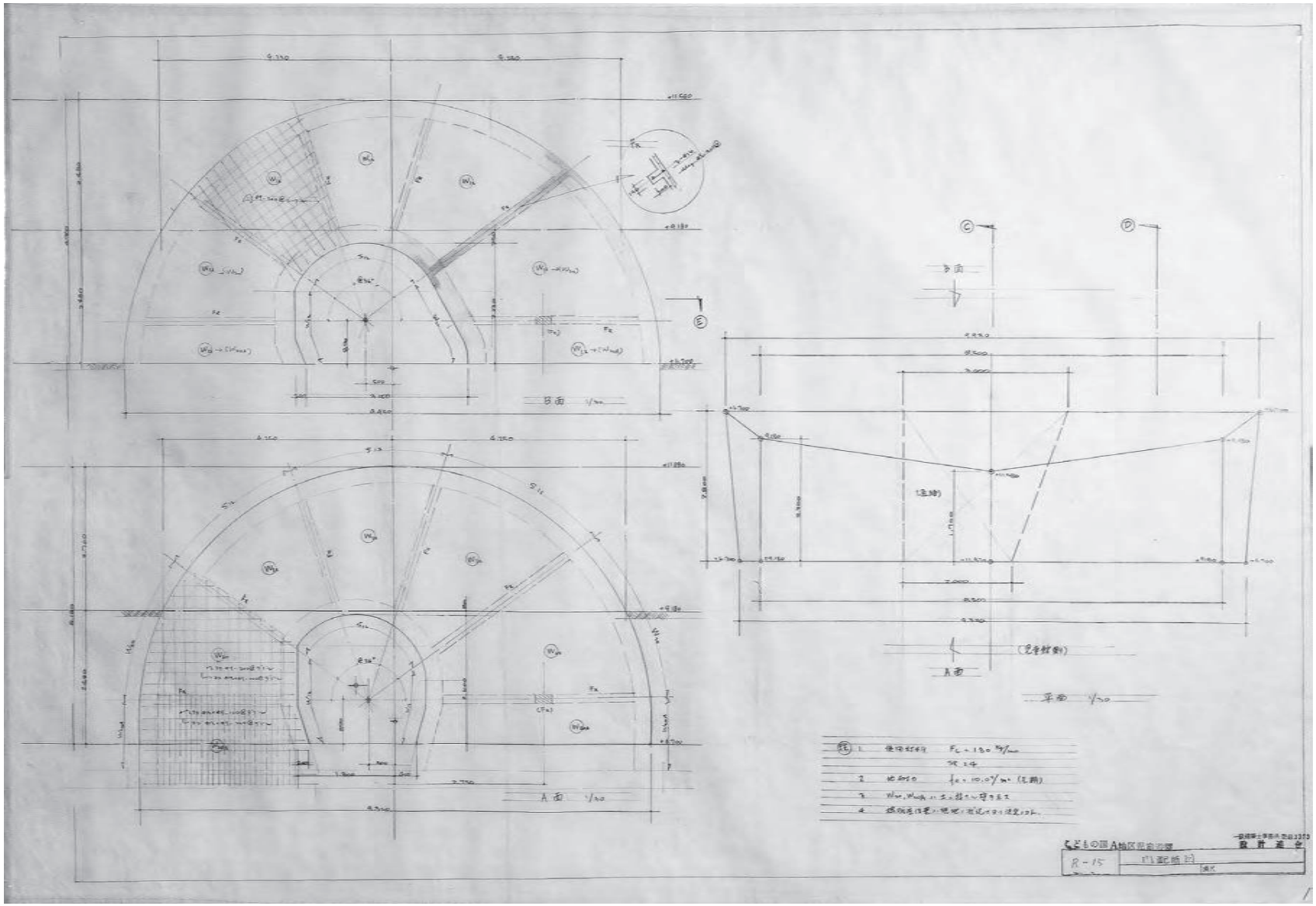


fig.28　イサム・ノグチ《こどもの国 A地区児童遊園 R-15 門配筋図》作図：大谷研究室（旧設計連合）、1965-66年、鉛筆、色鉛筆、トレーシングペーパー、55.2×80.5cm、大谷研究室旧蔵「こどもの国児童館・A地区児童遊園」資料群
Isamu Noguchi 〈R-15 Detail Drawing for Bar Arrangement of "Gate." Playground in Zone A of the Kodomo No Kuni〉 Drawn by Otani Associates (former Sekkei Rengo), 1965-66, pencil, red-pencil, tracing paper, 55.2×80.5cm, Otani Associates Kodomo No Kuni Collection

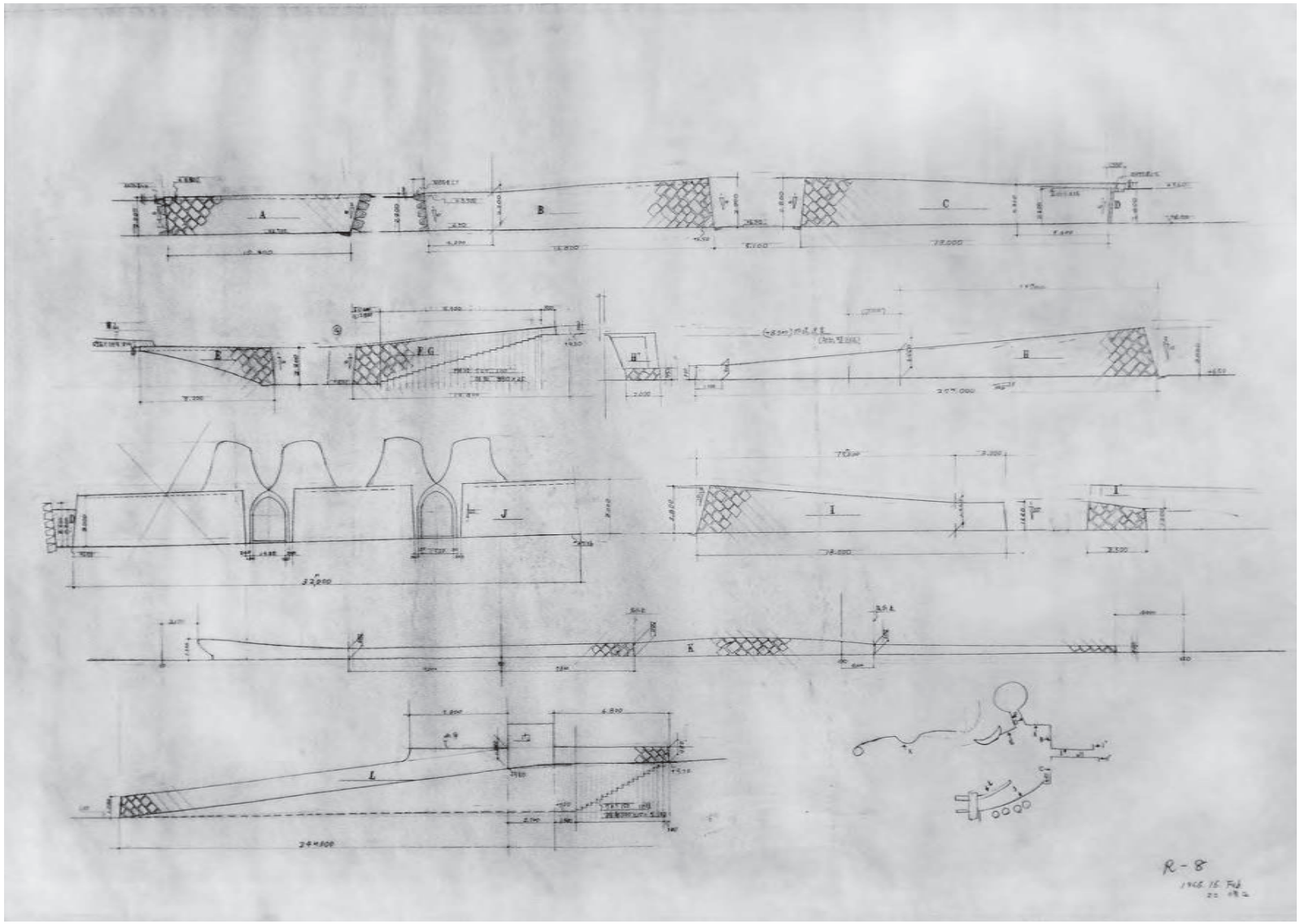



fig.29　イサム・ノグチ《こどもの国 A地区児童遊園 R-8 児童遊園入り口通路擁壁立面図》作図：大谷研究室（旧設計連合）、1966年2月16日／22日、鉛筆、トレーシングペーパー、54.5×79.5cm、大谷研究室旧蔵「こどもの国児童館・A地区児童遊園」資料群
Isamu Noguchi〈R-8 Elevations of Masonry Retaining Walls. Forecourt and Passageway of Playground in Zone A of the Kodomo No Kuni〉Drawn by Otani Associates (former Sekkei Rengo), Feb.16/22, 1966, pencil, tracing paper, 54.5×79.5cm, Otani Associates Kodomo No Kuni Collection

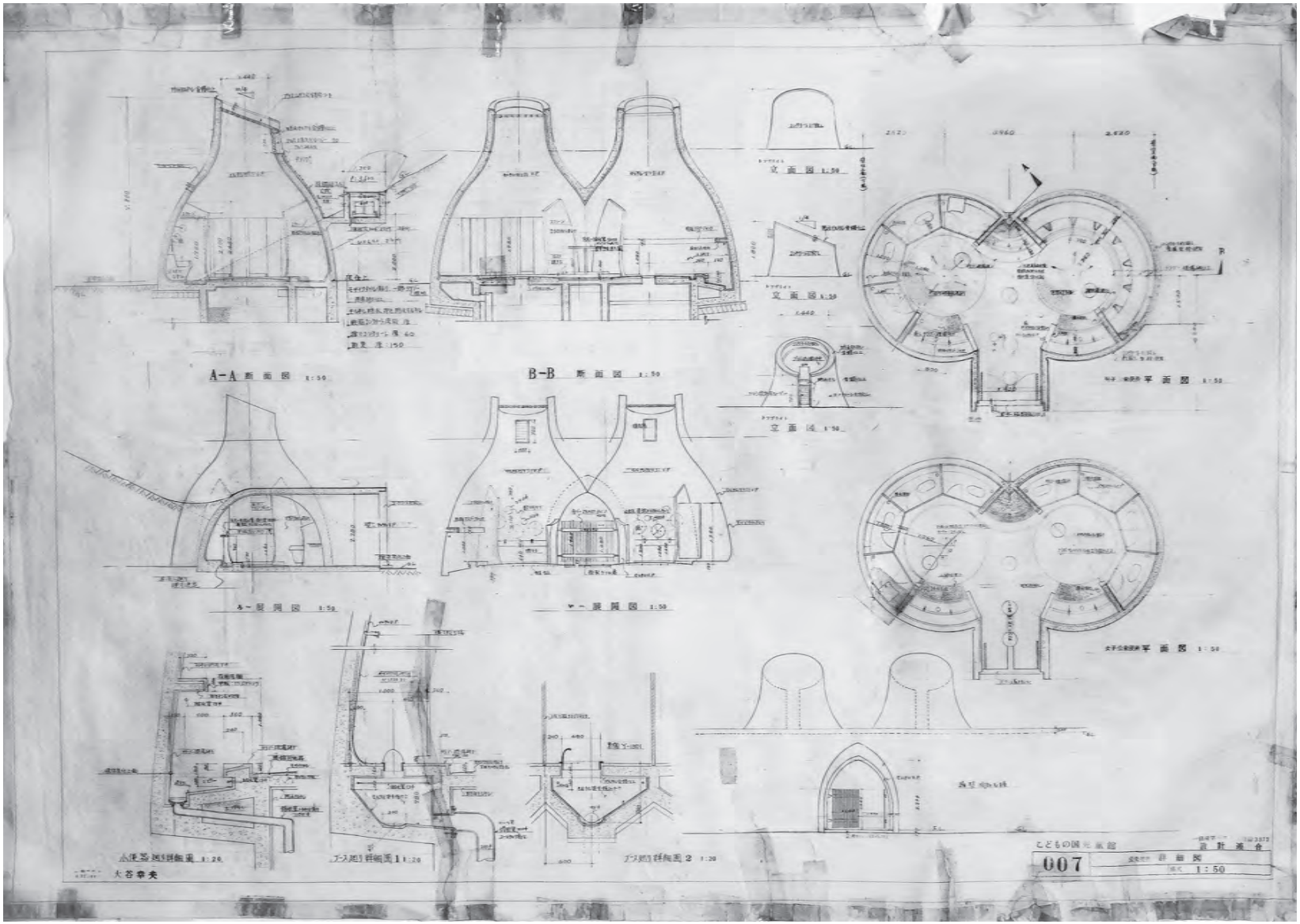



fig.30　イサム・ノグチ、大谷幸夫《こどもの国児童館 007 公衆便所詳細図》作図：大谷研究室（旧設計連合）、1966年、鉛筆、インク、トレーシングペーパー、57.8×82.2cm、大谷研究室旧蔵「こどもの国児童館・A地区児童遊園」資料群
Isamu Noguchi, Otani Sachio 〈007 Detail Drawings of Public Toilet, Childrens House of the Kodomo No Kuni〉 Drawn by Otani Associates (former Sekkei Rengo), 1966, pencil, ink, tracing paper, 57.8×82.2cm, Otani Associates Kodomo No Kuni Collection

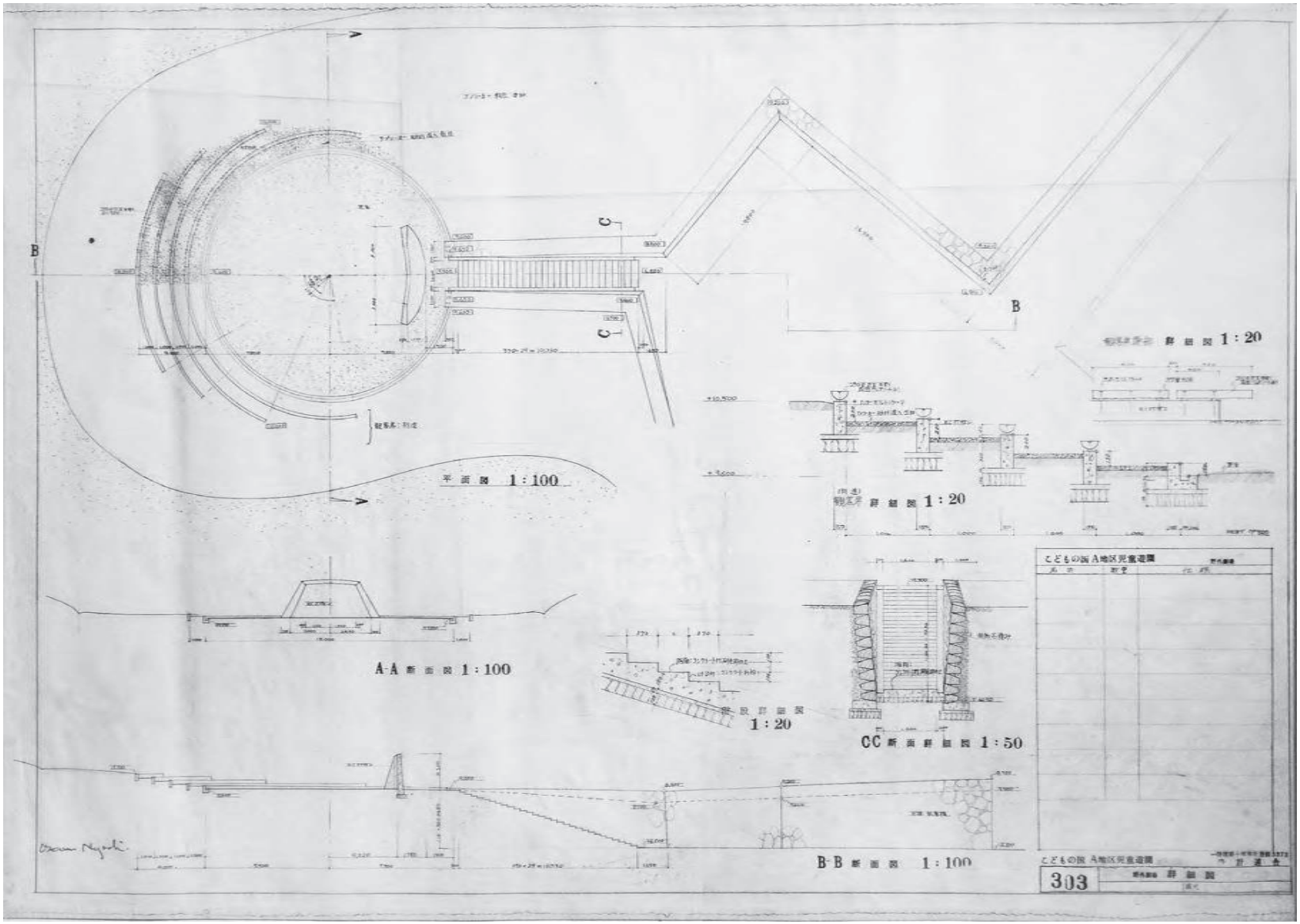



fig.32　イサム・ノグチ《こどもの国 A地区児童遊園 303 野外劇場詳細図》作図：大谷研究室(旧設計連合)、1965-66年、鉛筆、トレーシングペーパー、55.1×80.2cm、大谷研究室旧蔵「こどもの国児童館・A地区児童遊園」資料群
Isamu Noguchi〈303 Detail Drawings of "Open-air Theater." Playground in Zone A of the Kodomo No Kuni〉Drawn by Otani Associates (former Sekkei Rengo), 1965-66, pencil, tracing paper, 55.1×80.2cm, Otani Associates Kodomo No Kuni Collection

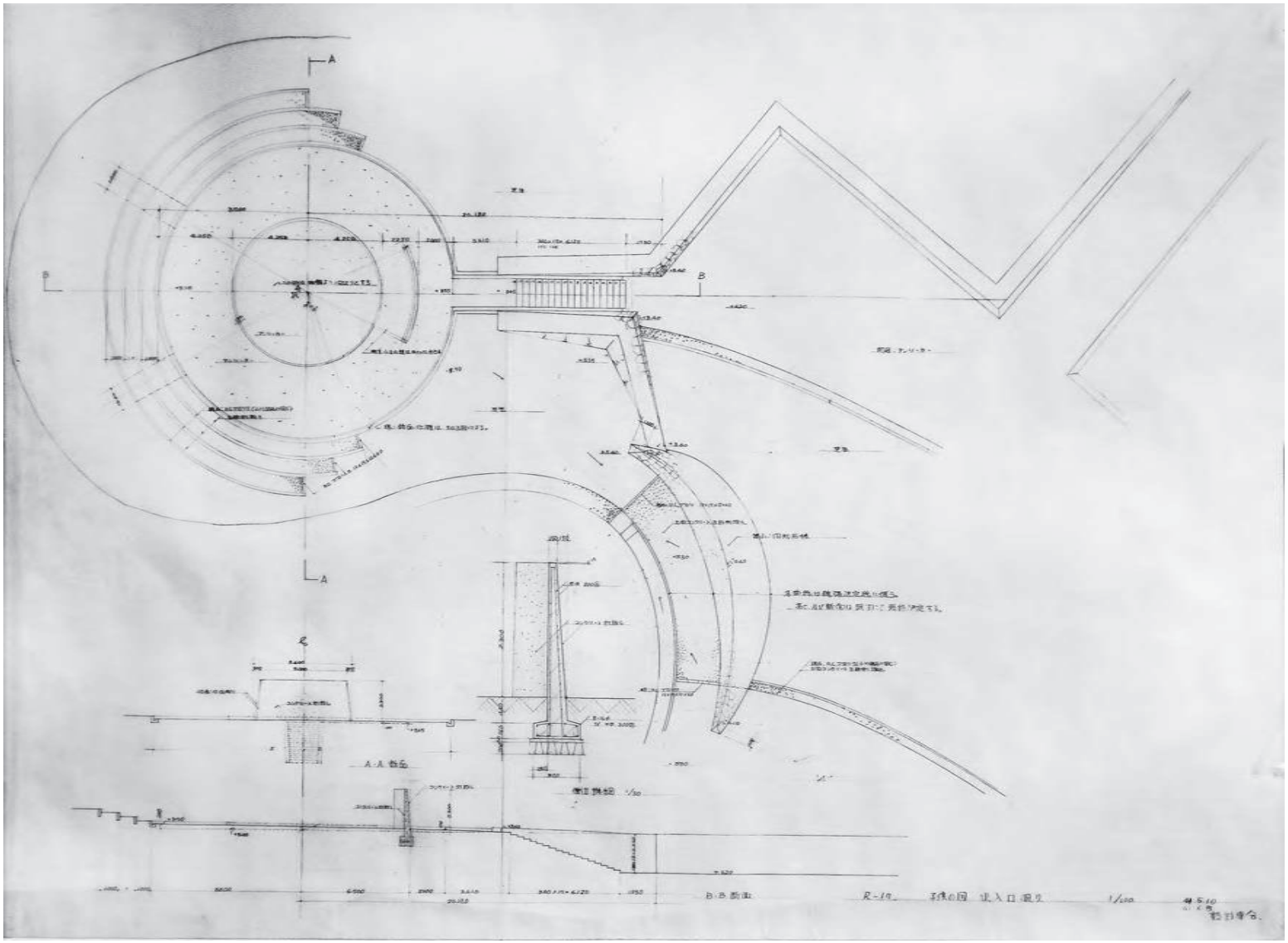


fig.33　イサム・ノグチ《R-17 子供の国出入り口周り》作図：大谷研究室（旧設計連合）、1966年5月10日、6月8日、鉛筆、トレーシングペーパー、53.8×75.5cm、大谷研究室旧蔵「こどもの国児童館・A地区児童遊園」資料群
Isamu Noguchi 〈R-17 Detail Drawings of Forecourt and Open-air Theater. Playground and Children's House in Zone A of the Kodomo No Kuni〉 Drawn by Otani Associates (former Sekkei Rengo), May 10, June 8, 1966, pencil, tracing paper, 53.8×75.5cm, Otani Associates Kodomo No Kuini Collection

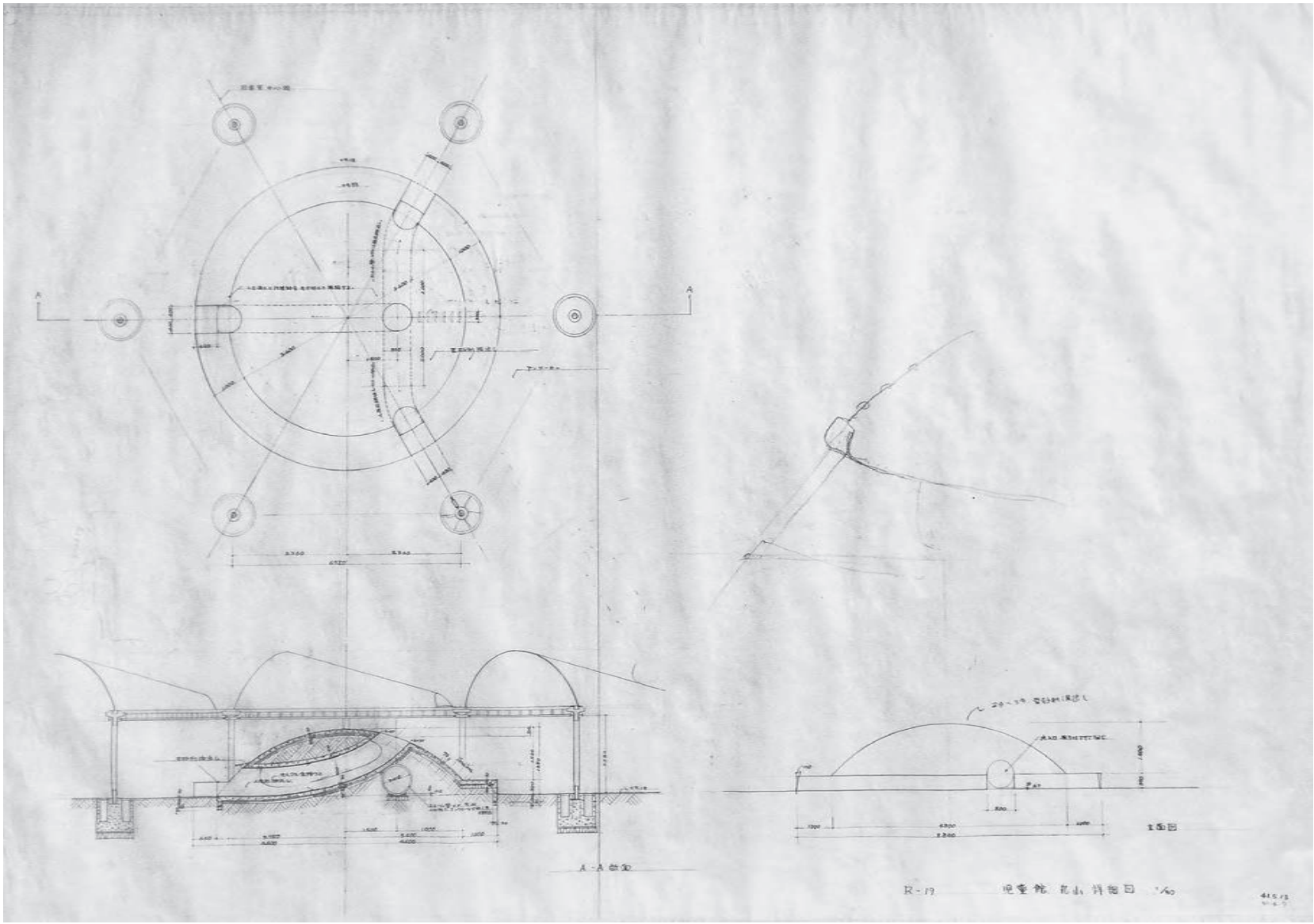


fig.37　イサム・ノグチ《R-19 児童館丸山詳細図》作図：大谷研究室（旧設計連合）、1966年5月13日／6月7日、鉛筆、トレーシングペーパー、55.4×79.9cm、大谷研究室旧蔵「こどもの国児童館・A地区児童遊園」資料群
Isamu Noguchi 〈Detail Drawings of “Maruyama.” Children’s House in Zone A of the Kodomo No Kuni〉 Drawn by Otani Associates (former Sekkei Rengo), May 13/June 7, 1966, pencil, tracing paper, 55.4×79.9cm, Otani Associates Kodomo No Kuni Collection

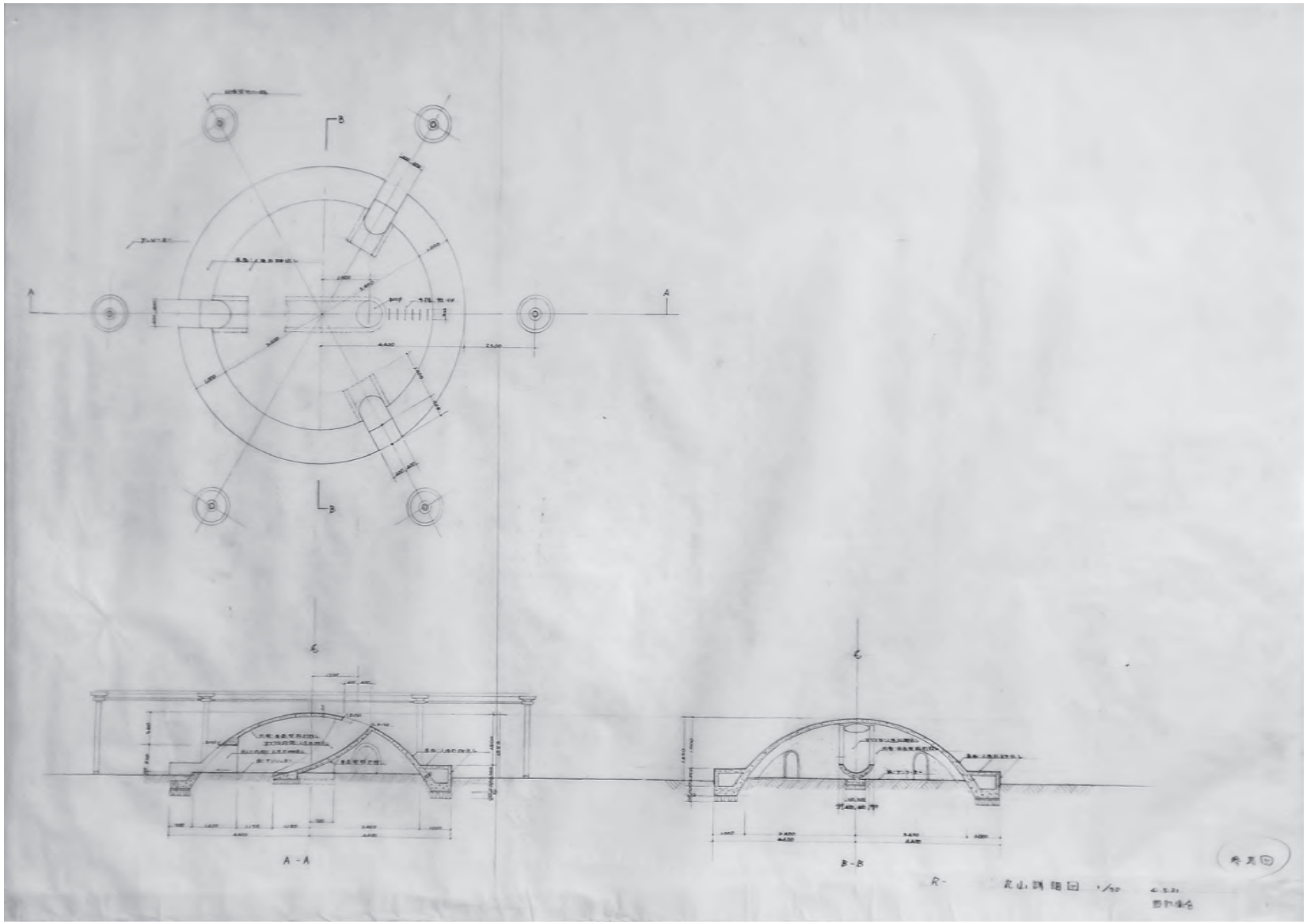


fig.38　イサム・ノグチ《R- 丸山詳細図（参考図）》作図：大谷研究室（旧設計連合）、1966年5月21日、鉛筆、トレーシングペーパー、55.0×84.2cm、大谷研究室旧蔵「こどもの国児童館・A地区児童遊園」資料群
Isamu Noguchi〈R- Detail Drawings of “Maruyama.” Children’s House in Zone A of the Kodomo No Kuni〉Drawn by Otani Associates (former Sekke Rengo), May 21, 1966, 55.0×84.2cm, Otani Associates Kodomo No Kuni Collection

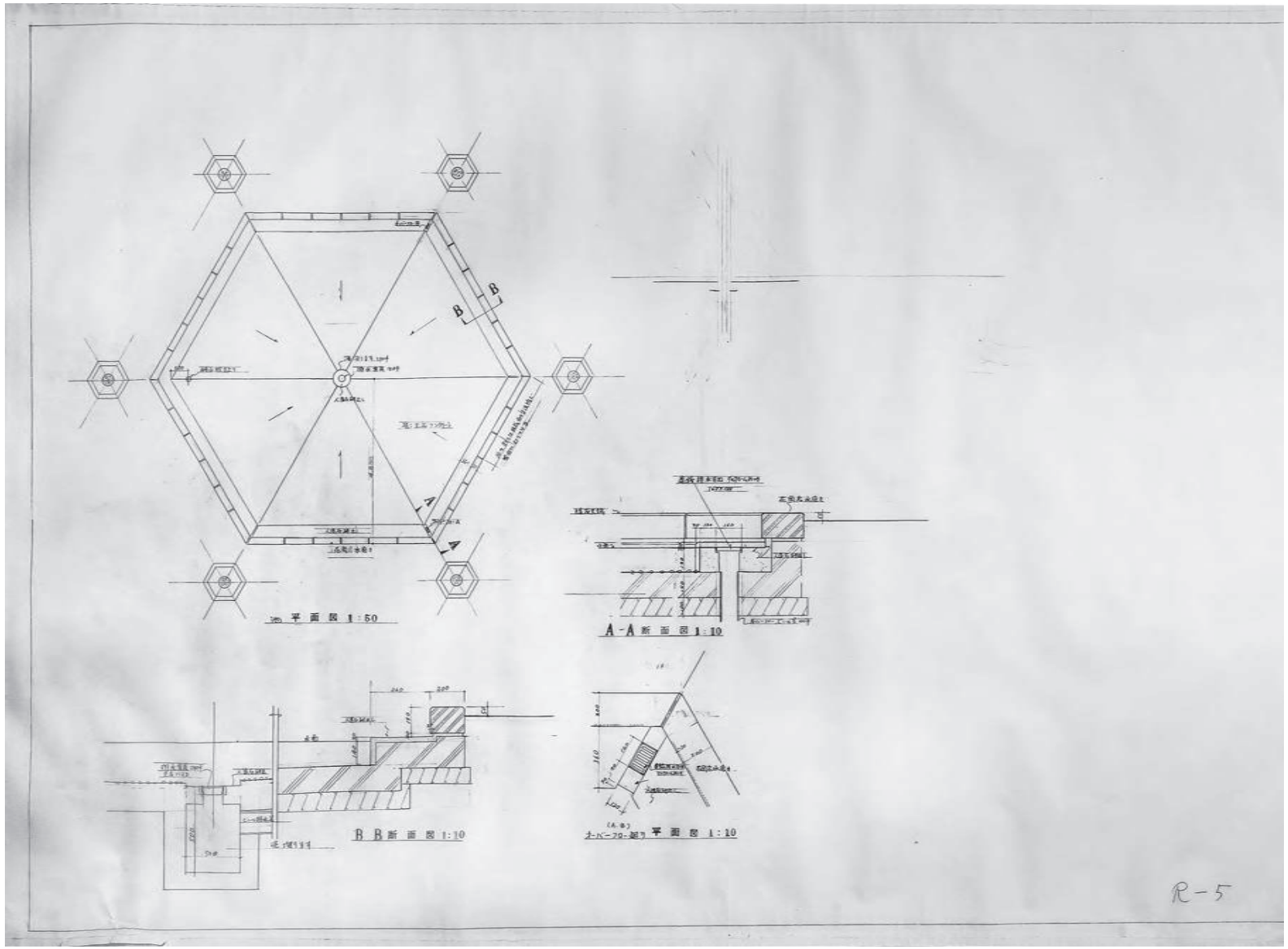



fig.39 大谷幸夫《＊こどもの国児童館 R-5 六角池詳細図(池3)》作図：大谷研究室(旧設計連合)、1966年、鉛筆、トレーシングペーパー、54.8×79.7cm、大谷研究室旧蔵「こどもの国児童館・A地区児童遊園」資料群
Sachio Otani〈R-5 Plan and Sections of Hexagon Pond (Pond 3), Children's House in Zone A of the Kodomo No Kuni〉Drawn by Otani Associates (former Sekkei Rengo), 1966, pencil, tracing paper, 54.8×79.9cm, Otani Associates Kodomo No Kuni Collection

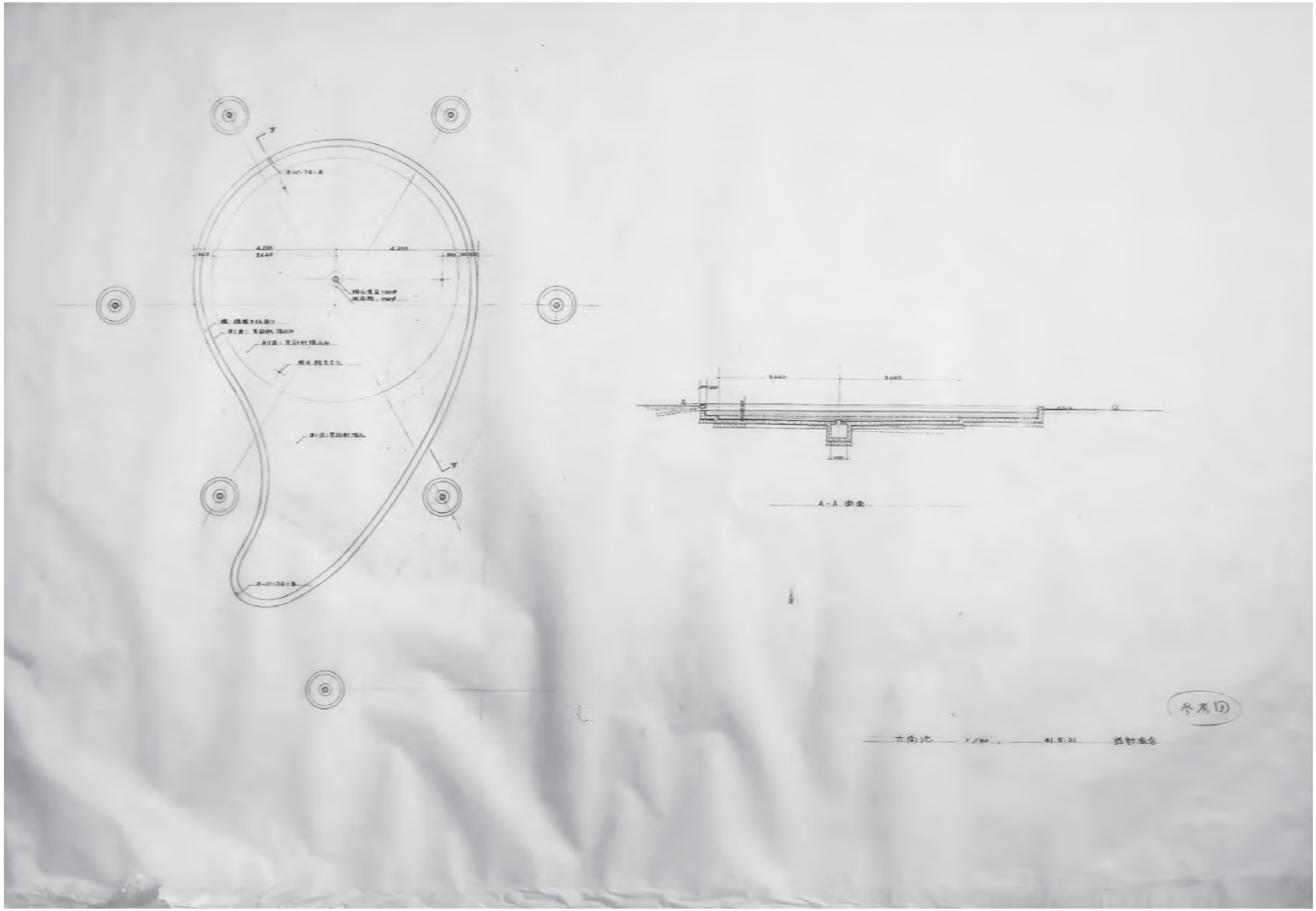


fig.40　イサム・ノグチ、大谷幸夫《R-5 六角池（池3）参考図》作図：大谷研究室（旧設計連合）、1966年5月21日、鉛筆、トレーシングペーパー、55.7×83.6cm、大谷研究室旧蔵「こどもの国児童館・A地区児童遊園」資料群
Isamu Noguchi, Sachio Otani〈Detail Drawings of “Hexagon Pond”(Pond 3)〉Drawn by Otani Associates (former Sekkei Rengo), May 21, 1966, pencil, tracing paper, 55.7×83.6cm, Otani Associates Kodomo No Kuni Collection

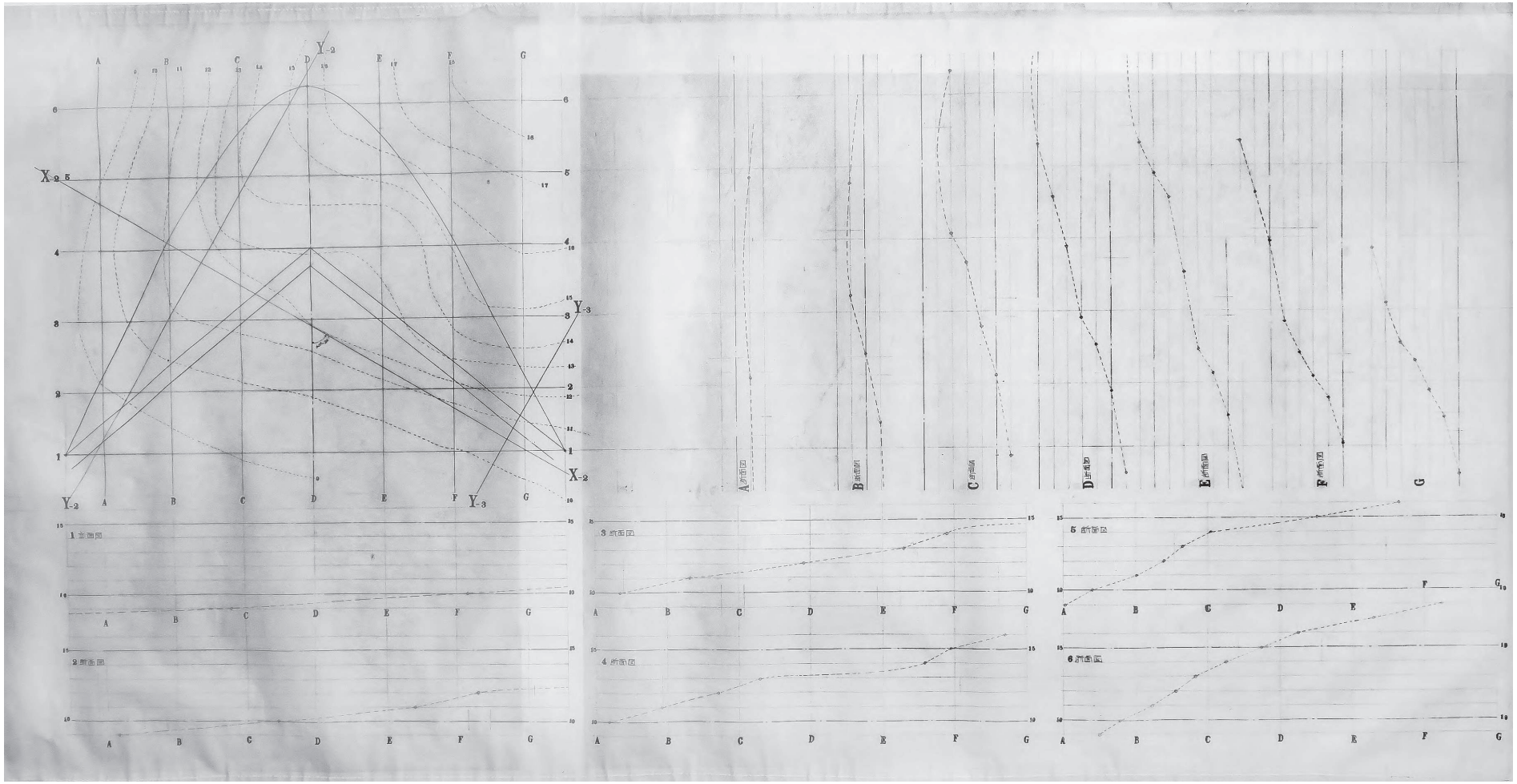



fig.43 イサム・ノグチ、大谷幸夫《＊こどもの国児童館西側擁壁平面図・地形立面図・断面図》作図：大谷研究室（旧設計連合）、1965–1966年、鉛筆、トレーシングペーパー、54.7×109.3cm、大谷研究室旧蔵「こどもの国児童館・A地区児童遊園」資料群
Isamu Noguchi, Sachio Otani 〈Contoured Plan, Elevations and Sections of the Site for Retaining Wall by Children's House in Zone A of the Kodomo No Kuni〉 Drawn by Otani Associates (former Sekkei Rengo), 1965–1966, pencil, tracing paper, 54.7×109.3cm, Otani Associates Kodomo No Kuni Collection

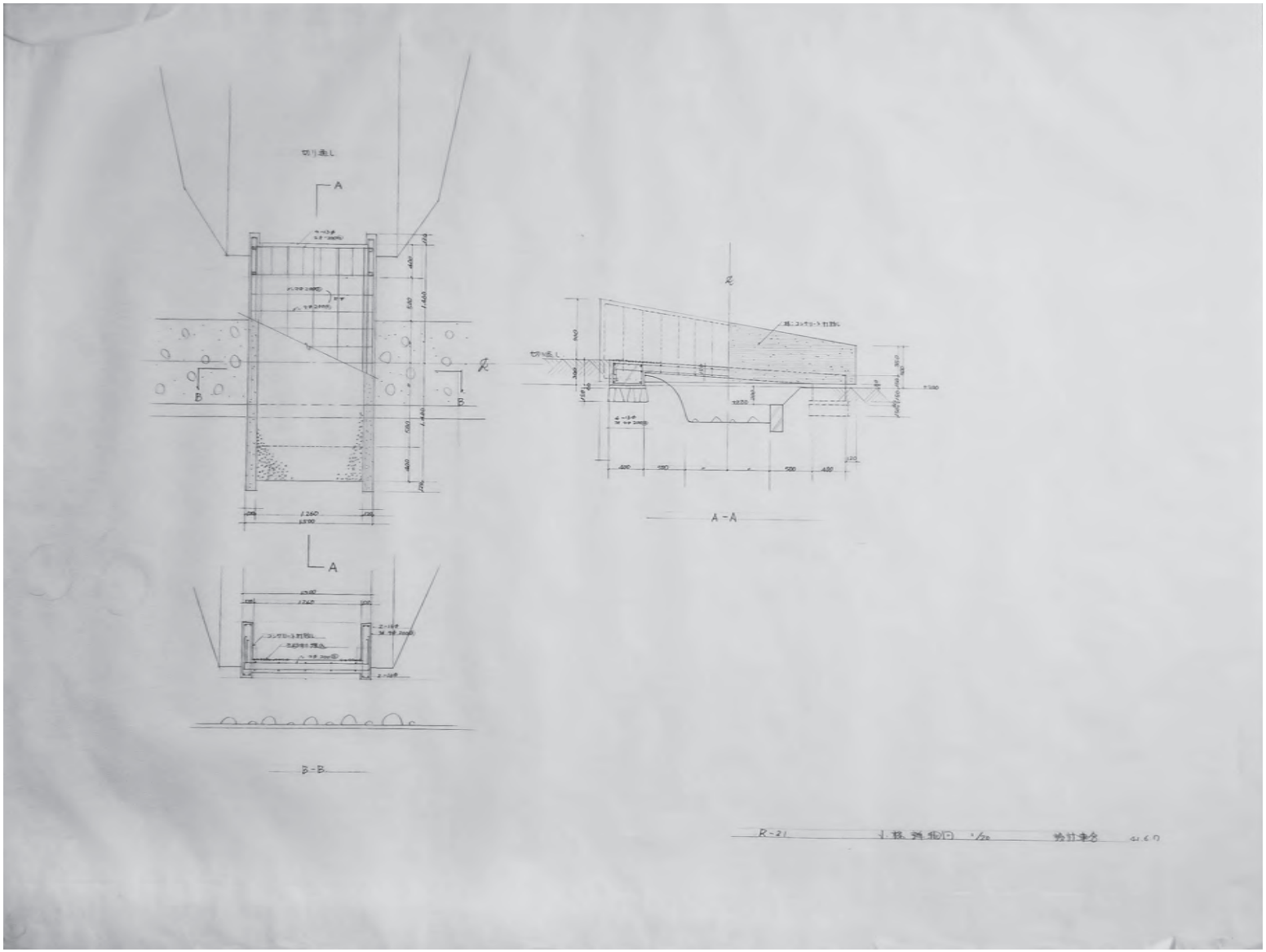



fig.44　イサム・ノグチ《R-21 小橋詳細図》作図：大谷研究室（旧設計連合）、1966年6月7日、鉛筆、トレーシングペーパー、57.5×77.7cm、大谷研究室旧蔵「こどもの国児童館・A地区児童遊園」資料群
Isamu Noguchi〈R-21 Detail Drawings of Ponticulus by Children's House in Zone A of the Kodomo No Kuni〉Drawn by Otani Associates (former Sekkei Rengo), pencil, tracing paper, 57.5×77.7cm, Otani Associates Kodomo No Kuni Collection

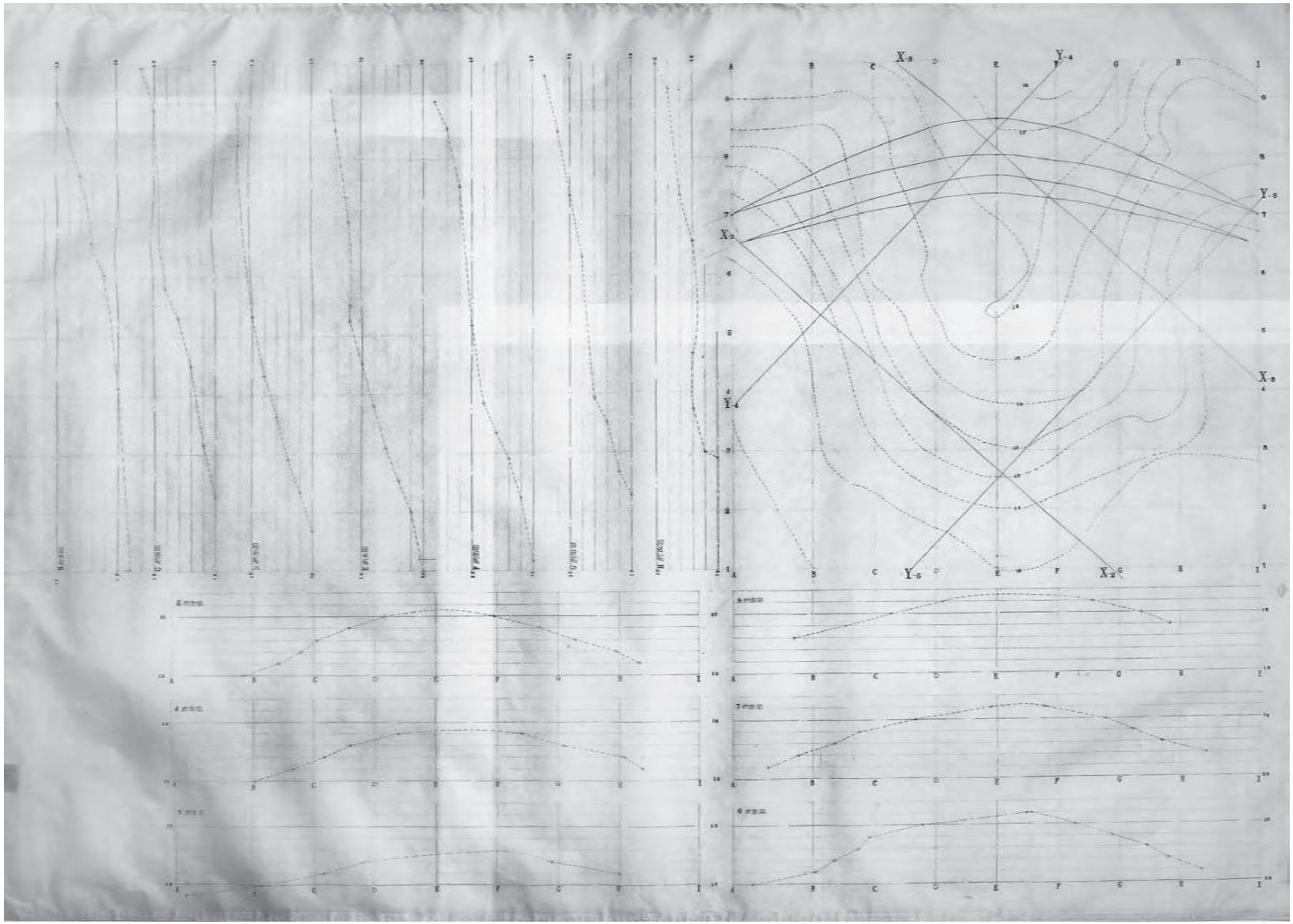


fig.45 イサム・ノグチ《＊児童館西側切り通し平面図・地形断面図》作図：大谷研究室（旧設計連合）、1965-66年、鉛筆、トレーシングペーパー、78.8×108.3cm、大谷研究室旧蔵「こどもの国児童館・A地区児童遊園」資料群
Isamu Noguchi 〈Plan and Sections of Pathway cutting the hill behind Children's House in Zone A of the Kodomo No Kuni〉 Drawn by Otani Associates (former Sekkei Rengo), 1965–66, pencil, tracing paper, 78.8×108.3cm, Otani Associates Kodomo No Kuni Collection

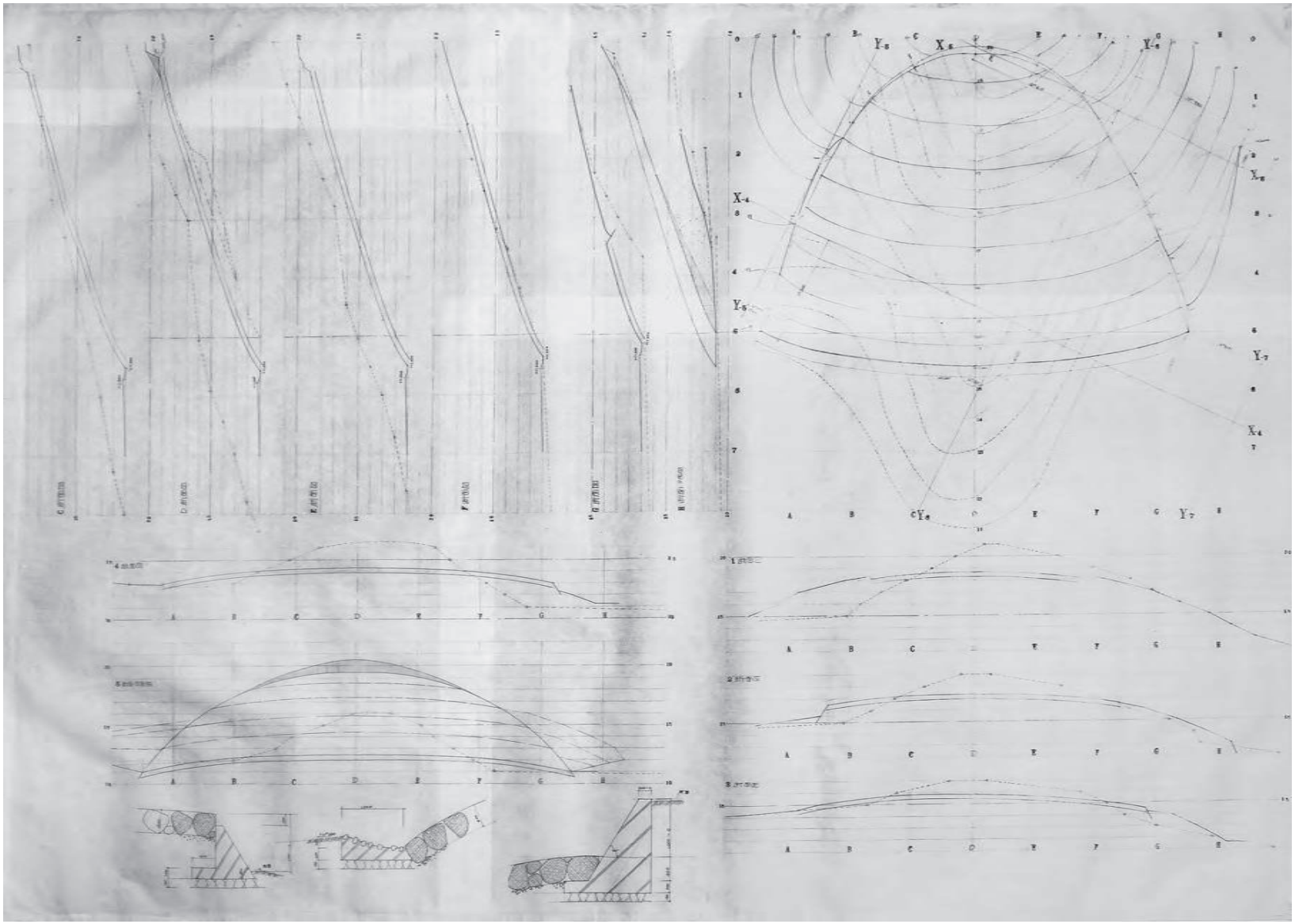


fig.48　イサム・ノグチ《＊こどもの国 A地区児童遊園 岩山平面図・断面図》作図：大谷研究室（旧設計連合）、1965-66年、鉛筆、トレーシングペーパー、78.6×108.2cm、大谷研究室旧蔵「こどもの国児童館・A地区児童遊園」資料群
Isamu Noguchi 〈Contoured Plan, Elevations and Sections of the Site for “Iwayama”〉 Drawn by Otani Associates (former Sekkei Rengo), 1965-66, pencil, tracing paper, 78.6×108.2cm, Otani Associates Kodomo No Kuni Collection

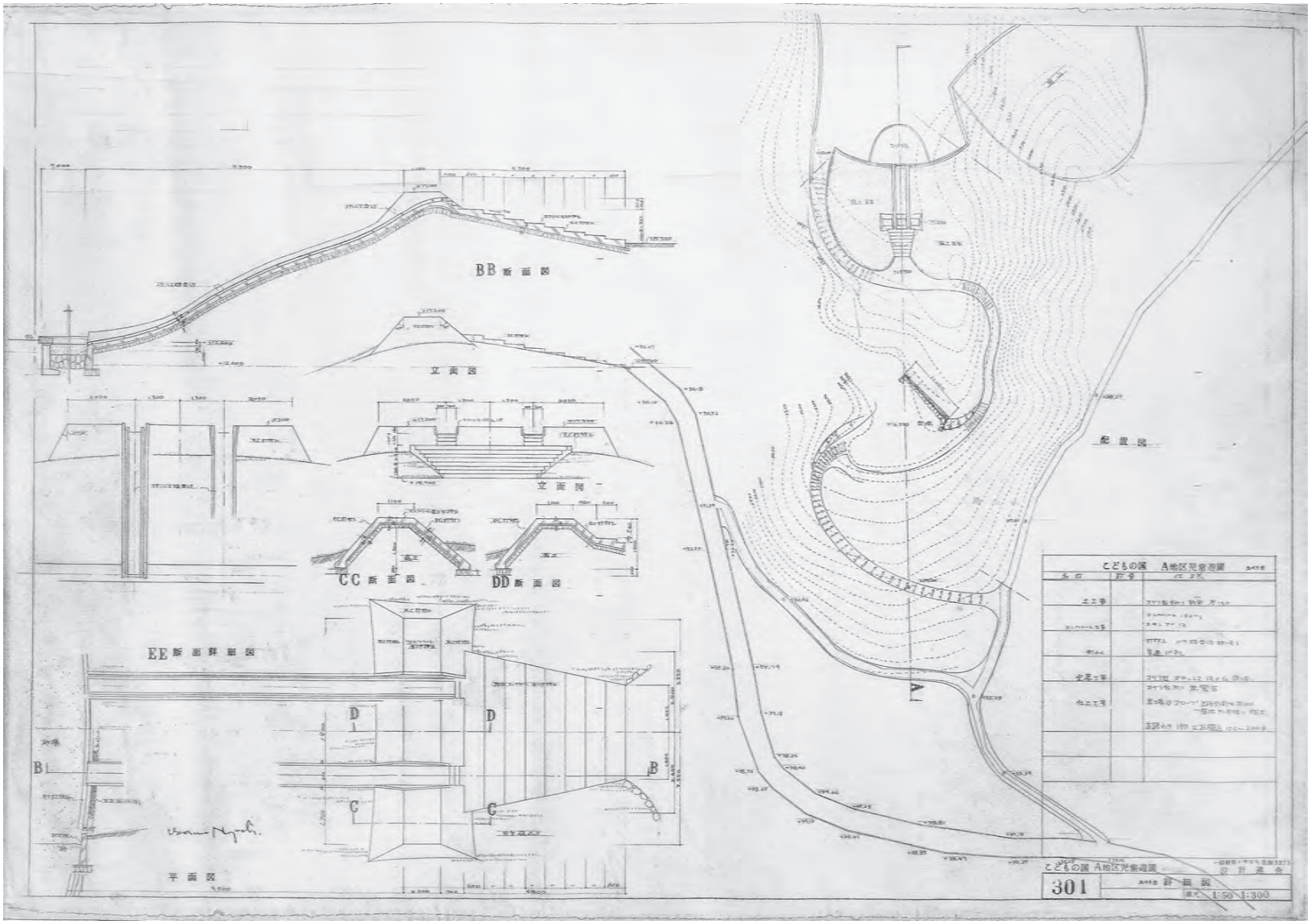



fig.49　イサム・ノグチ《こどもの国 A地区児童遊園 301 スベリ台詳細図》作図：大谷研究室（旧設計連合）、1965-66年、鉛筆、インク、トレーシングペーパー、54.9×80.1cm、大谷研究室旧蔵「こどもの国児童館・A地区児童遊園」資料群
Isamu Noguichi 〈301 Detail Drawings of the “Slides” in Zone A of the Kodomo No Kuni〉 Drawn by Otani Associates (former Sekkei Rengo), 1965-66, pencil, ink, tacing paper, 54.9×80.1cm, Otani Associates Kodomo No Kuni Collection

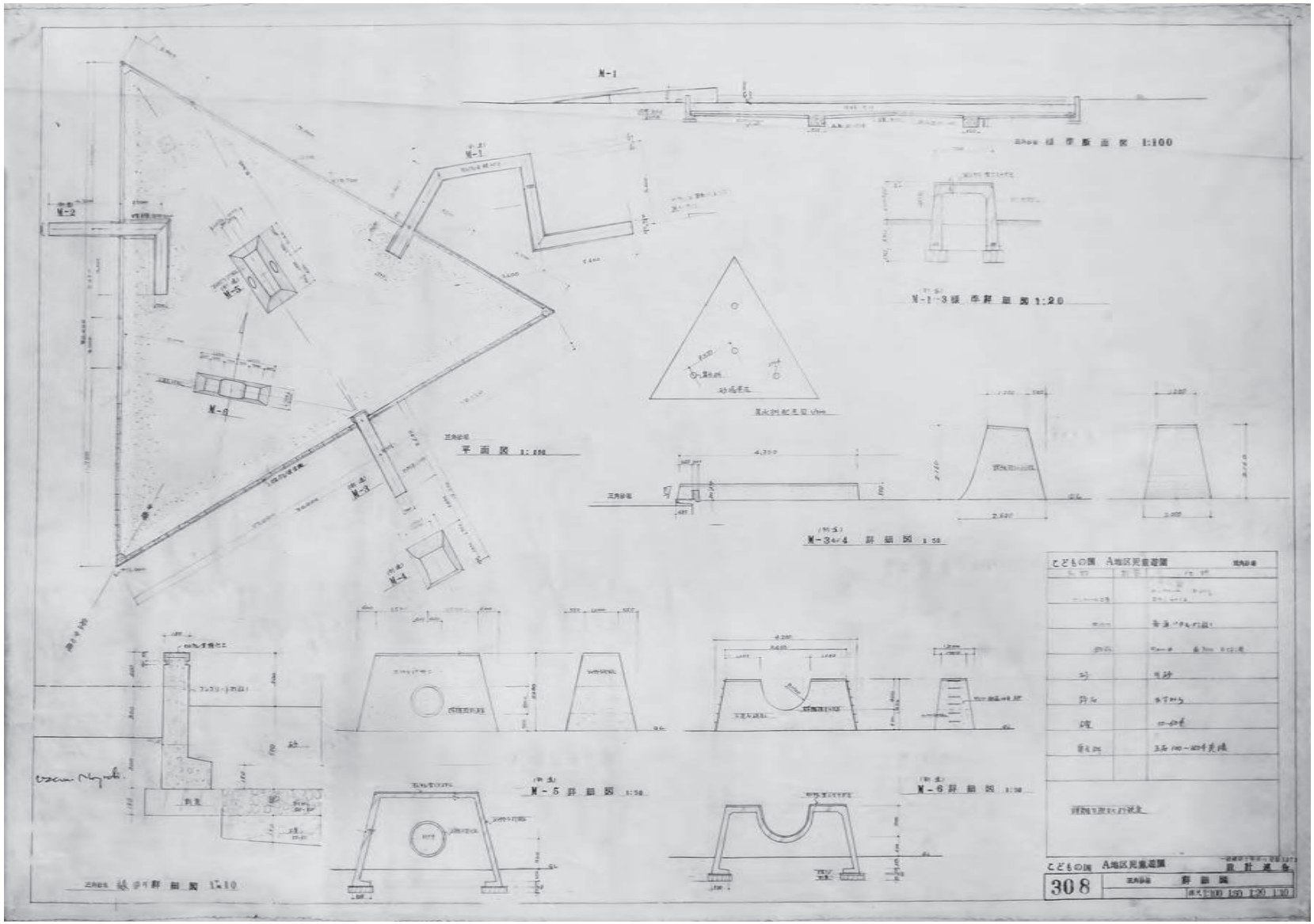



fig.50　イサム・ノグチ《こどもの国 A地区児童遊園 308 三角砂場詳細図》作図：大谷研究室（旧設計連合）、1965-66年、鉛筆、インク、トレーシングペーパー、54.7×80.0cm、大谷研究室旧蔵「こどもの国児童館・A地区児童遊園」資料群
Isamu Noguchi 〈Detail Drawings of “Triangle Sandpit.” Playground in Zone A of the Kodomo No Kuni〉 Drawn by Otani Associates (former Sekkei Rengo), 1965-66, pencil, ink, tracing paper, 54.7×80.0cm, Otani Associates Kodomo No Kuni Collection

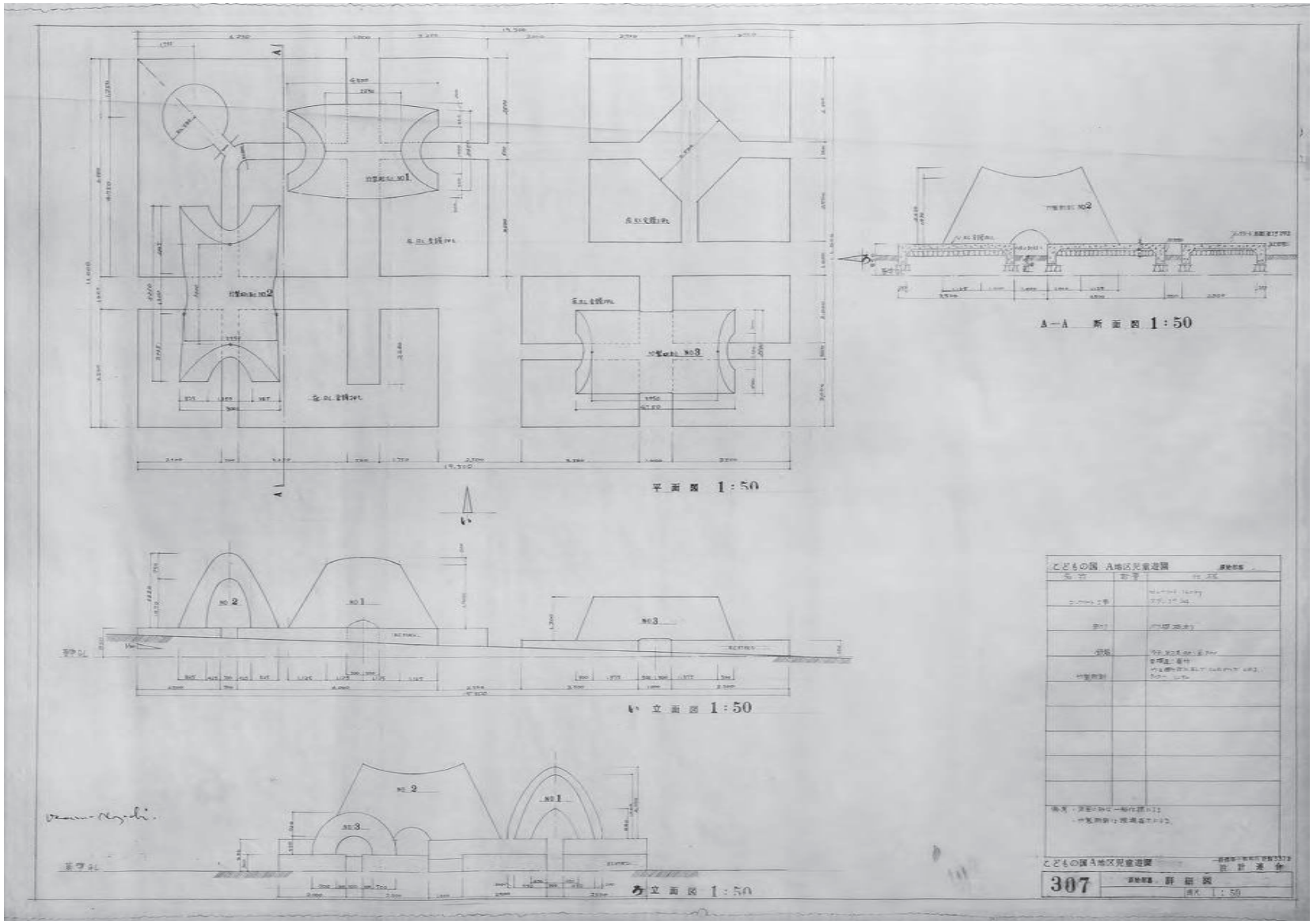



fig.52 イサム・ノグチ《こどもの国 A地区児童遊園 307 原始部落詳細図》作図：大谷研究室（旧設計連合）、1965-66年、鉛筆、インク、トレーシングペーパー、55.0×80.0cm、大谷研究室旧蔵「こどもの国児童館・A地区児童遊園」資料群
Isamu Noguchi 〈307 Detail Drawings of “Primitive Village.” Playground in Zone A of the Kodomo No Kuni〉 Drawn by Otani Associates (former Sekkei Rengo), 1965-66, pencil, ink, tracing paper, 55.0×80.0cm, Otani Associates Kodomo No Kuni Collection

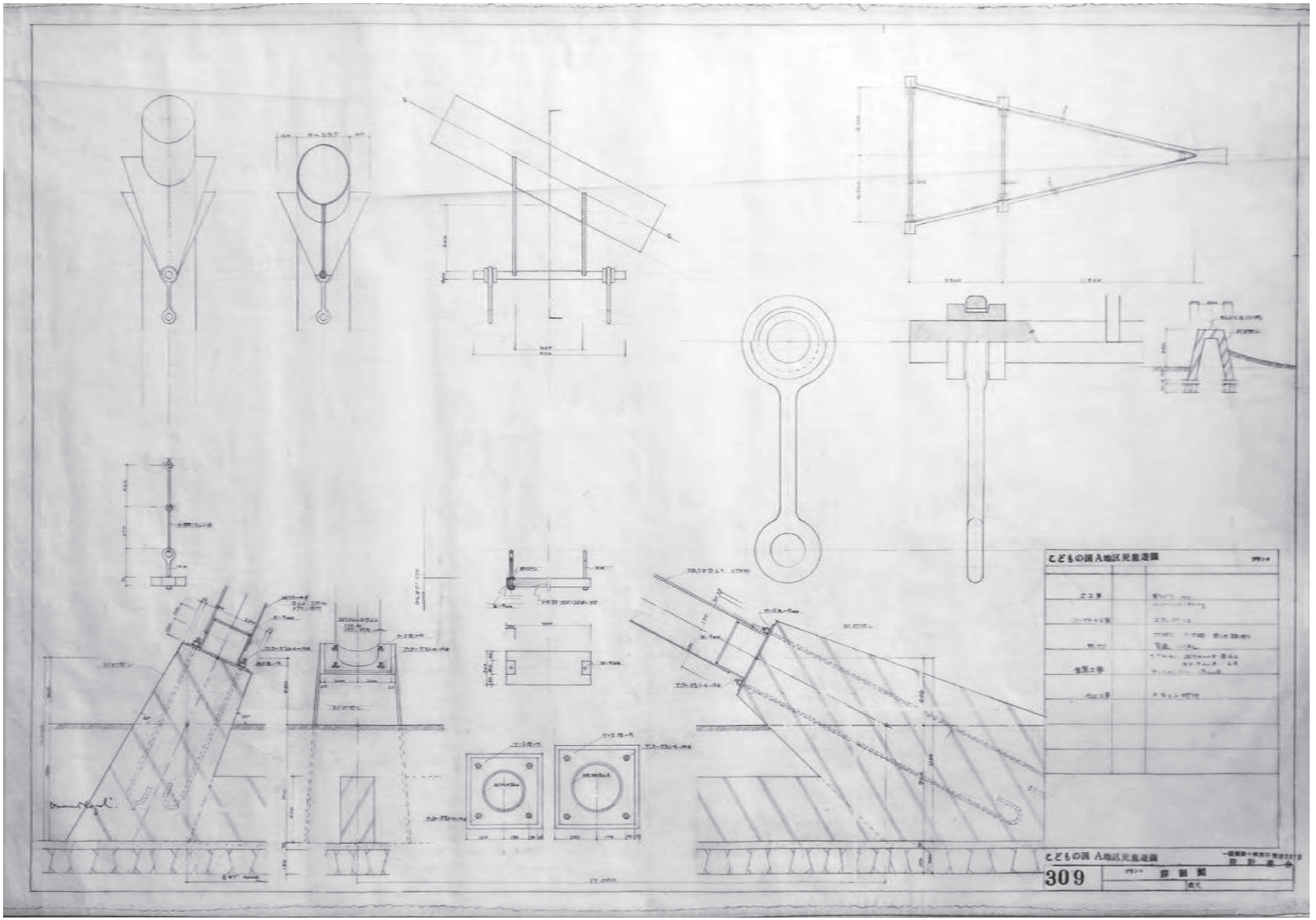



fig.53　イサム・ノグチ《こどもの国 A地区児童遊園 309 ブランコ詳細図》作図：大谷研究室（旧設計連合）、1965–66年、鉛筆、インク、トレーシングペーパー、54.8×80.0cm、大谷研究室旧蔵「こどもの国児童館・A地区児童遊園」資料群
Isamu Noguchi〈309 Detail Drawomgs of “Swings.” Playground of Zone A of the Kodomo No Kuni〉Drawn by Otani Associates（former Sekkei Rengo）1965–66, pencil, ink, tracing paper, 54.8×80.0cm, Otani Associates Kodomo No Kuni Collection

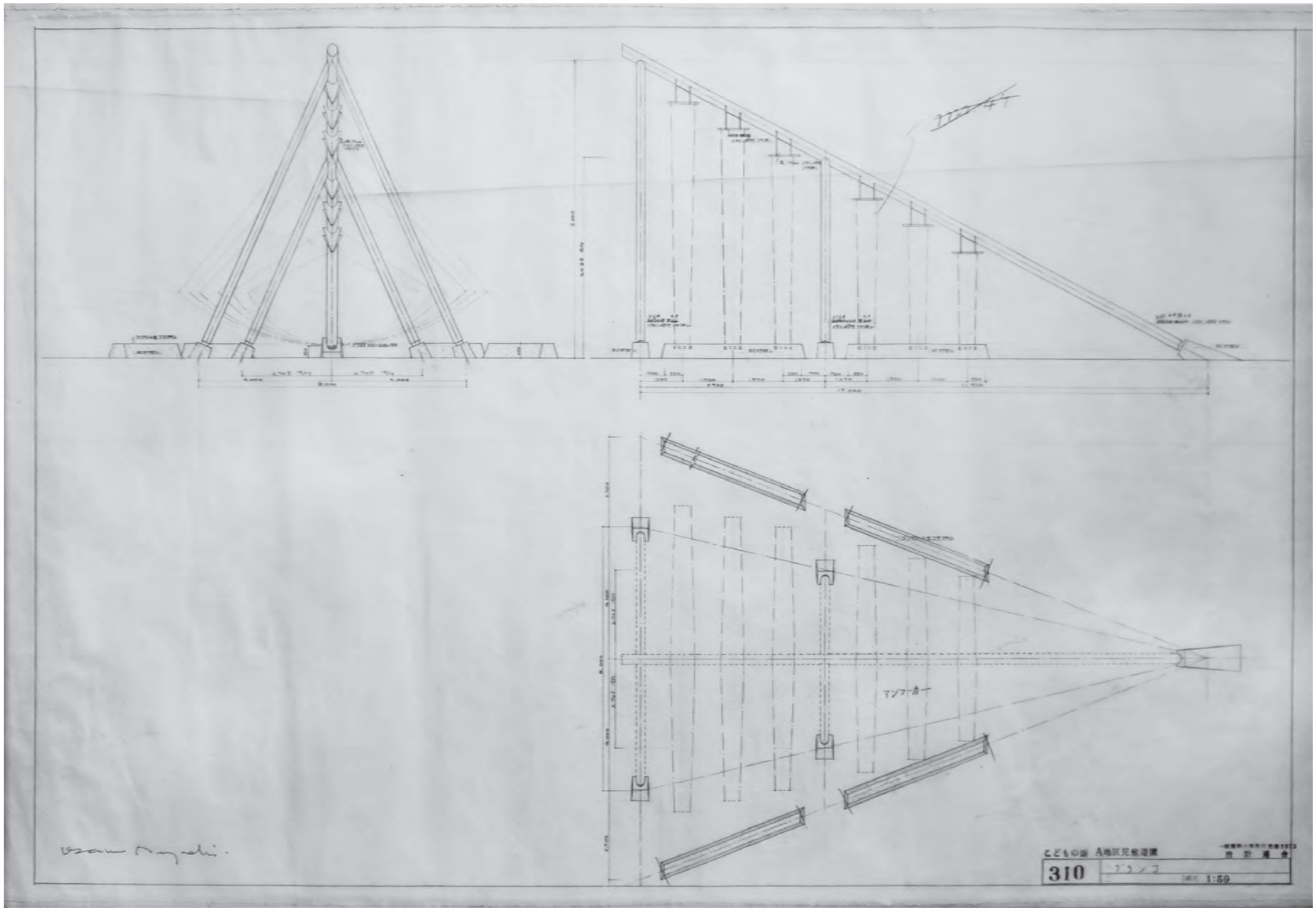



fig.54 イサム・ノグチ《こどもの国 A地区児童遊園 310 ブランコ（立面図・平面図）》作図：大谷研究室（旧設計連合）、1965–66年、鉛筆、インク、トレーシングペーパー、55.0×80.2cm、大谷研究室旧蔵「こどもの国児童館・A地区児童遊園」資料群
Isamu Noguchi：〈310 Elevations and Plan of "Swings." Playground of Zone A of the Kodomo No Kuni〉 Drawn by Otani Associates (former Sekkei Rengo), 1965–66, pencil, ink, tracing paper, 55.0×80.2cm, Otani Associates Kodomo No Kuni Collection

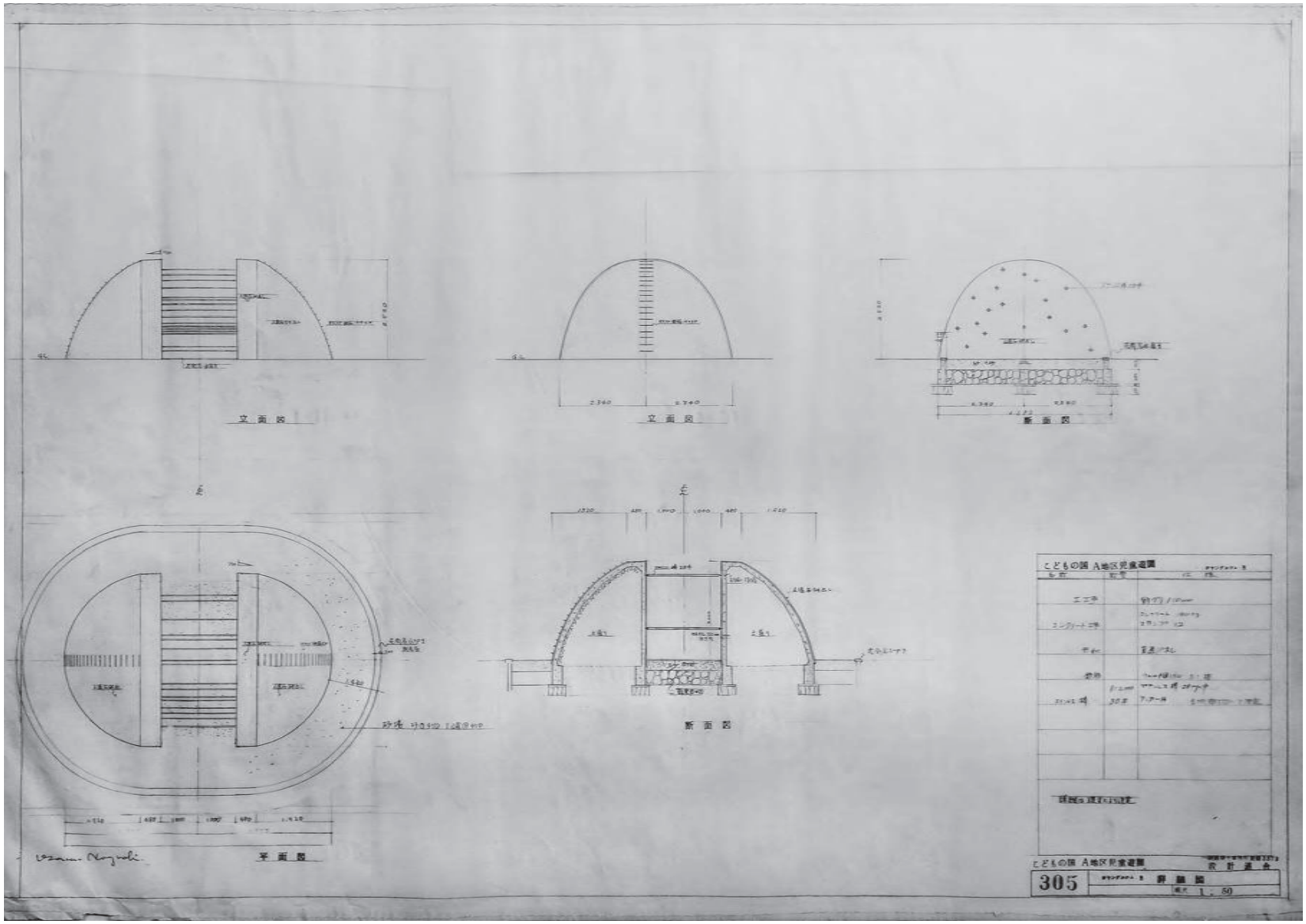



fig.56　イサム・ノグチ《こどもの国 A地区児童遊園 305 ジャングルジムB 詳細図》作図：大谷研究室（旧設計連合）、1965-66年、鉛筆、インク、トレーシングペーパー、55.0×80.2cm、大谷研究室旧蔵「こどもの国児童館・A地区児童遊園」資料群
Isamu Noguchi 〈305 Detail Drawings of "Jungle Gym B." Playground in Zone A of the Kodomo No Kuni〉 Drawn by Otani Associates (former Sekkei Rengo), 1965–66, pencil, ink, tracing paper, 55.0×80.2cm, Otani Associates Kodomo No Kuni Collection

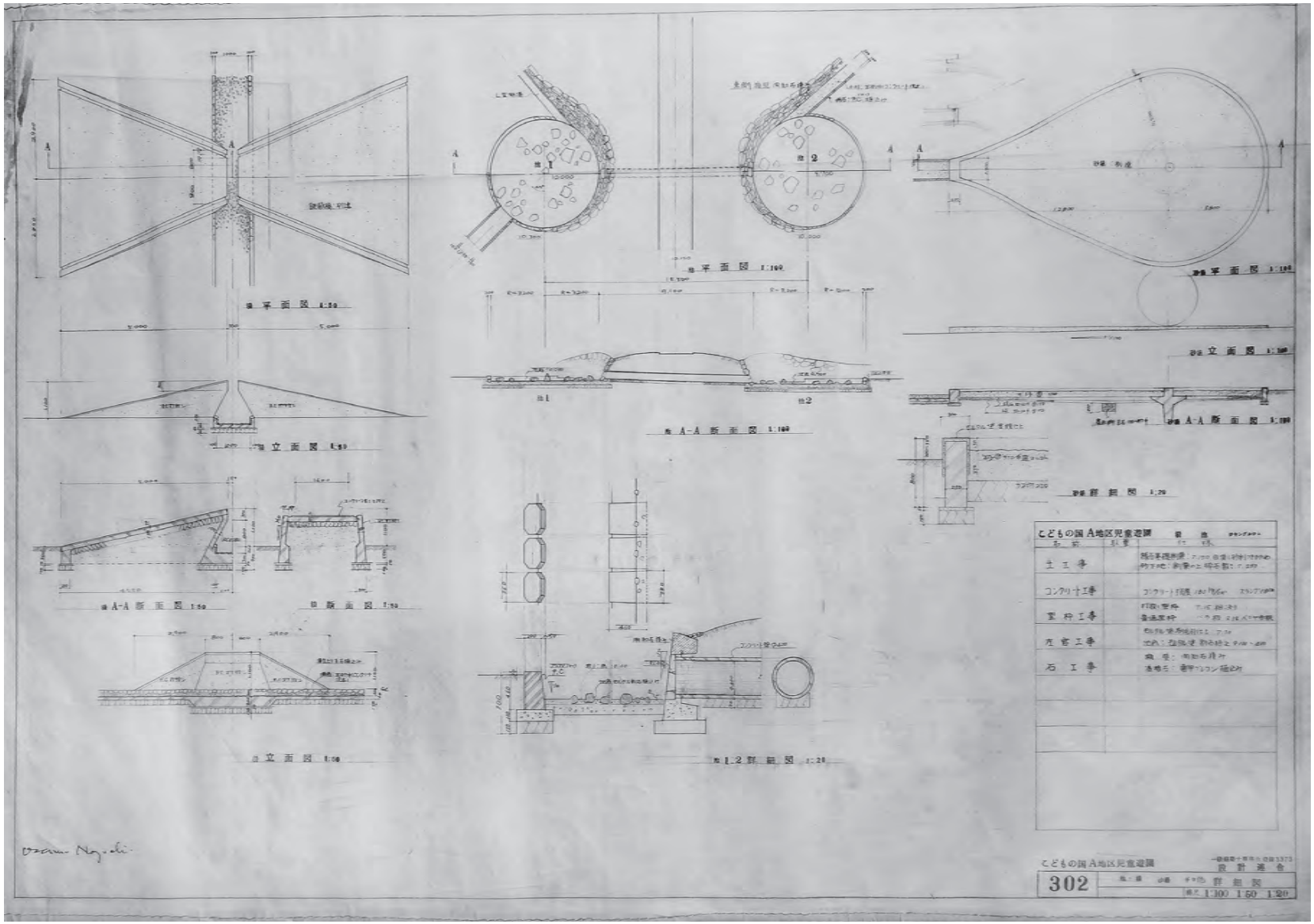



fig.57 イサム・ノグチ《こどもの国 A地区児童遊園 302 池・橋・砂場 その他詳細図》作図：大谷研究室（旧設計連合）、1965–66年、鉛筆、インク、トレーシングペーパー、54.8×80.0cm、大谷研究室旧蔵「こどもの国児童館・A地区児童遊園」資料群
Isamu Noguchi 〈302 Detail Drawings of "Ponds, Bridge, Sandpit etc." Playground in Zone A of the Kodomo No Kuni〉 Drawn by Otani Associates (former Sekkei Rengo), 1965–66, pencil, ink, tracing paper, 54.8×80.0cm, Otani Associates Kodomo No Kuni Collection

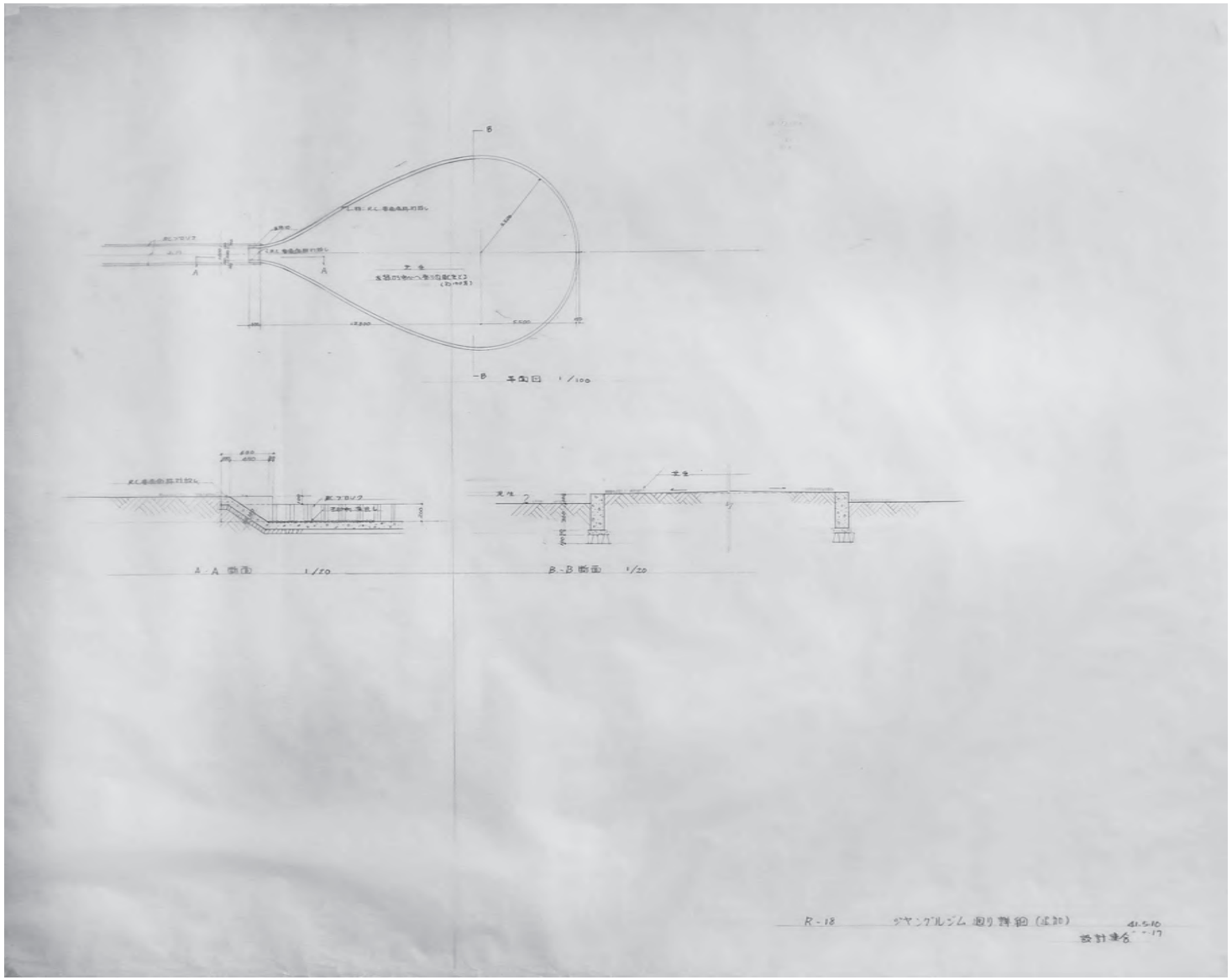



fig.58　イサム・ノグチ《R-18 ジャングルジム廻り詳細(追加)》作図：大谷研究室(旧設計連合)、1966年5月10日／17日、鉛筆、トレーシングペーパー、56.2×74.0cm、大谷研究室旧蔵「こどもの国児童館・A地区児童遊園」資料群
Isamu Noguchi 〈R-18 Detail Drawings of Jungle Gym Place (additional)〉 Drawn by Otani Associates (former Sekkei Rengo), May 10/17, 1966, pencil, tracing paper, 56.2×74.0cm, Otani Associates Kodomo No Kuni Collection

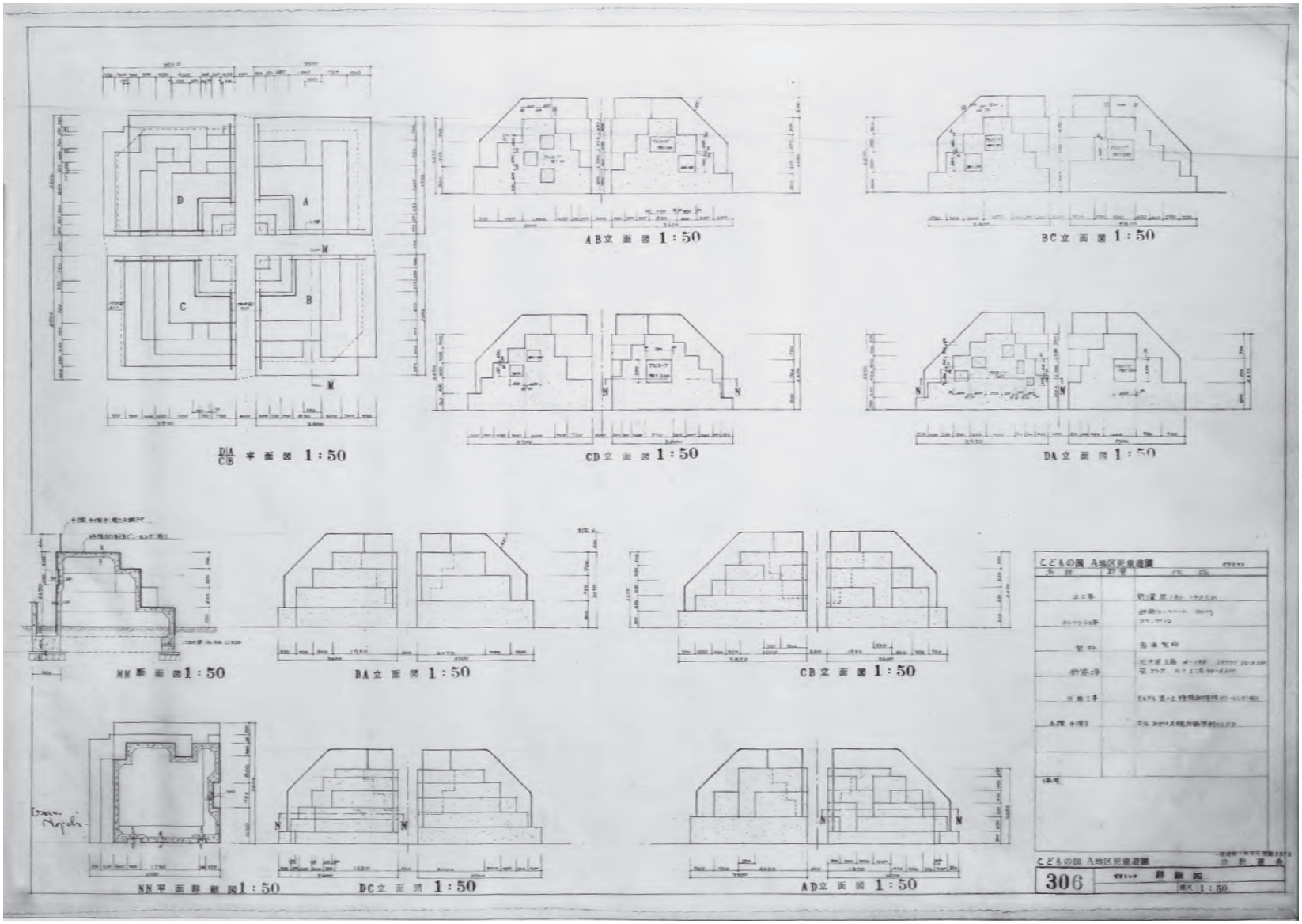



fig.61 イサム・ノグチ《こどもの国A地区児童遊園306 ピラミッド詳細図》作図：大谷研究室（旧設計連合）、1965–66年、鉛筆、インク、トレーシングペーパー、54.7×79.8cm、大谷研究室旧蔵「こどもの国児童館・A地区児童遊園」資料群

Isamu Noguchi 〈306 Detail Drawings of "Pyramid." Playground in Zone A of the Kodomo No Kuni〉, Drawn by Otani Associates (former Sekkei Rengo), 1965–66, pencil, ink, tracing paper, 54.7×79.8cm, Otani Associates Kodomo No Kuni Collection

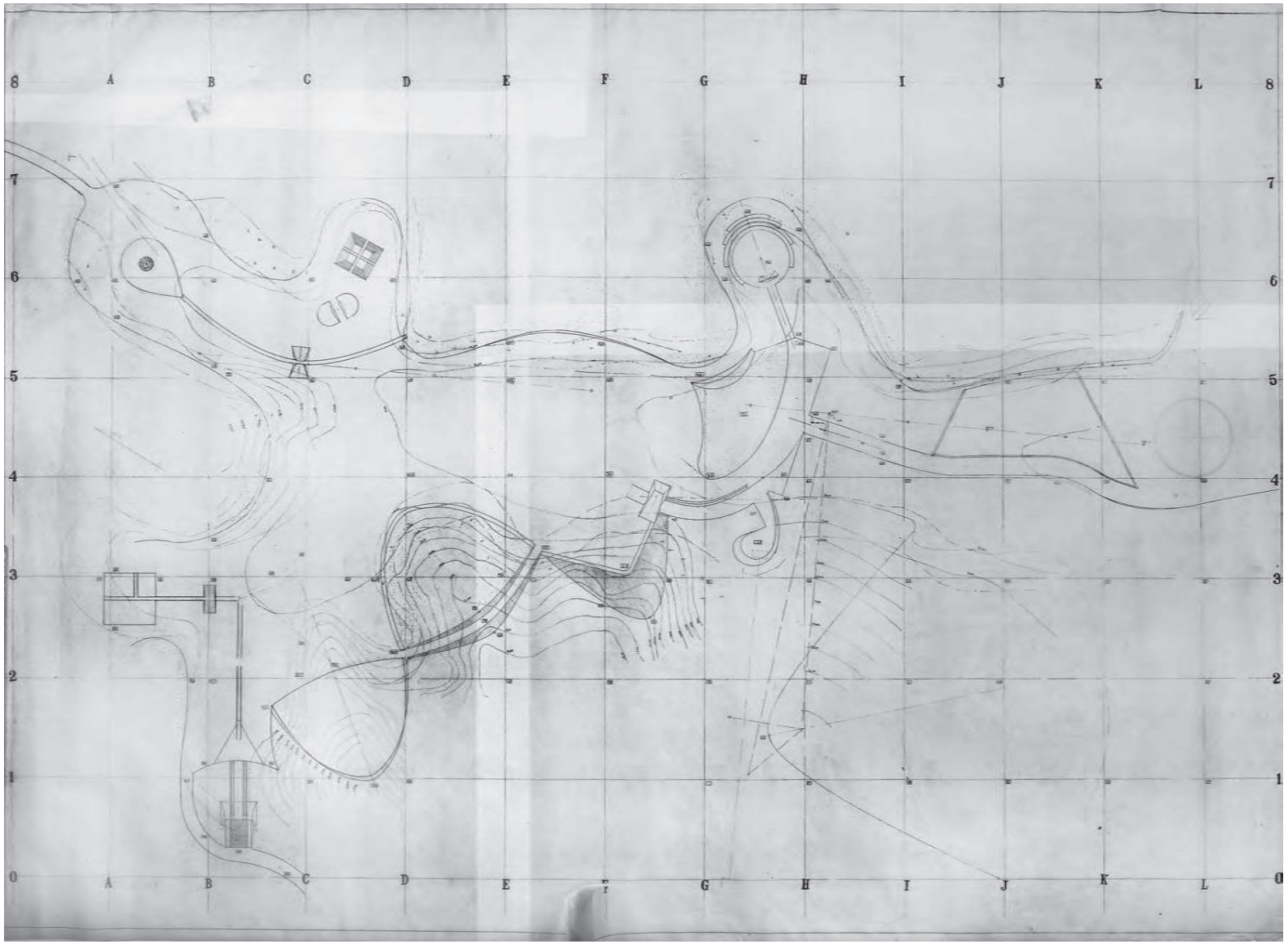



fig.62　イサム・ノグチ《＊こどもの国A地区児童遊園 N1 配置図（コンタ入り）》作図：大谷研究室（旧設計連合）、1965年、鉛筆、色鉛筆、インク、トレーシングペーパー、78.6×109.3cm、大谷研究室旧蔵「こどもの国児童館・A地区児童遊園」資料群
Isamu Noguchi〈＊N1 Contoured Site Plan of Playground in Zone A of the Kodomo No Kuni〉Drawn by Otani Associates (former Sekkei Rengo), 1965, pencil red-pencil, ink, tracing paper, 78.6×109.3cm, Otani Associates Kodomo No Kuni Collection

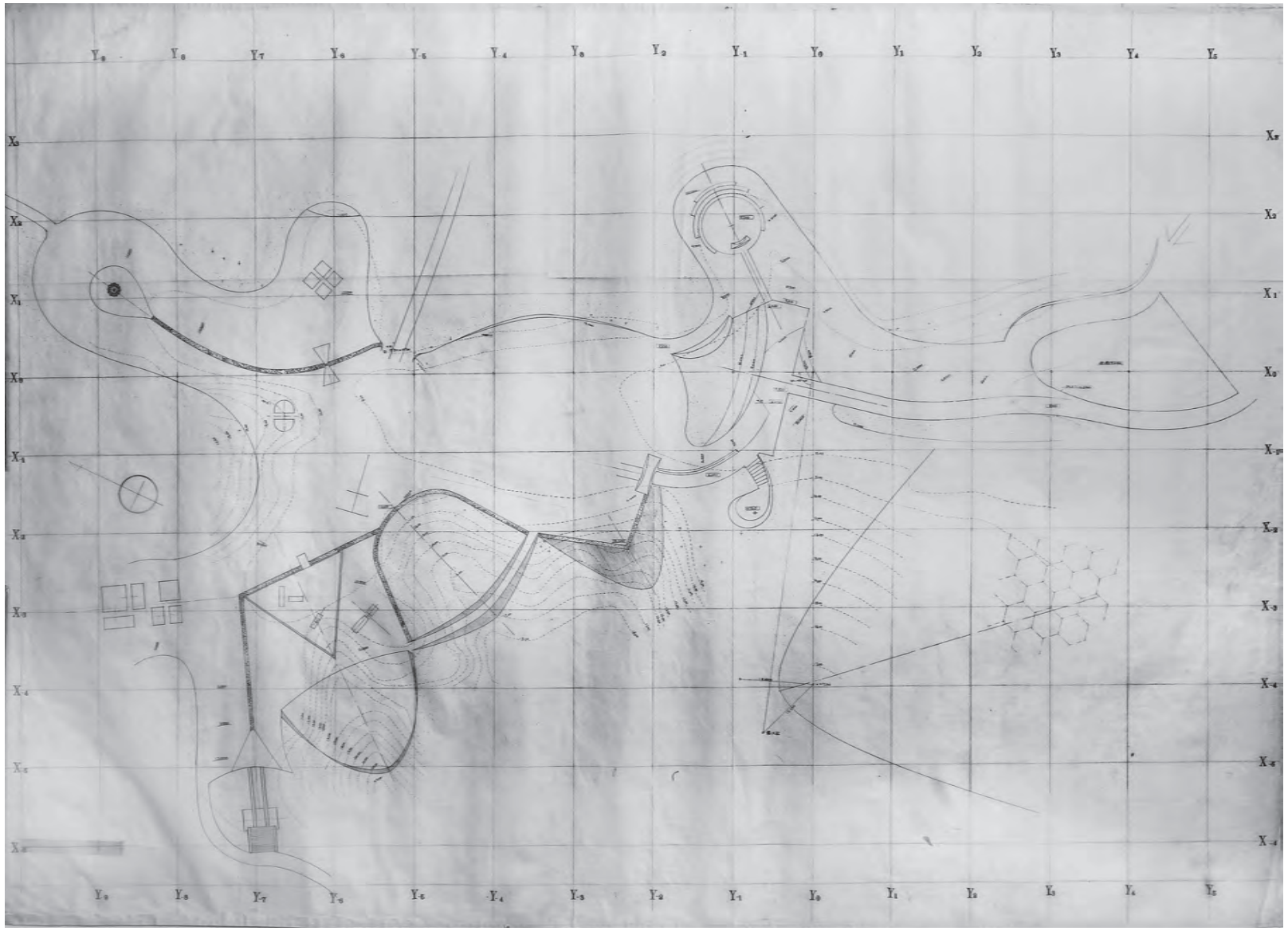


fig.63　イサム・ノグチ《＊こどもの国A地区児童遊園 N2 配置図》作図：大谷研究室（旧設計連合）、1965年、鉛筆、インク、トレーシングペーパー、78.7×107.7cm、大谷研究室旧蔵「こどもの国児童館・A地区児童遊園」資料群
Isamu Noguchi〈＊N2 Site Plan of Playground in Zone A of the Kodomo No Kuni〉, Drawn by Otani Associates (former Sekkei Rengo), 1965, pencil, ink, tracing paper, 78.7×107.7cm, Otani Associates Kodomo No Kuni Collection

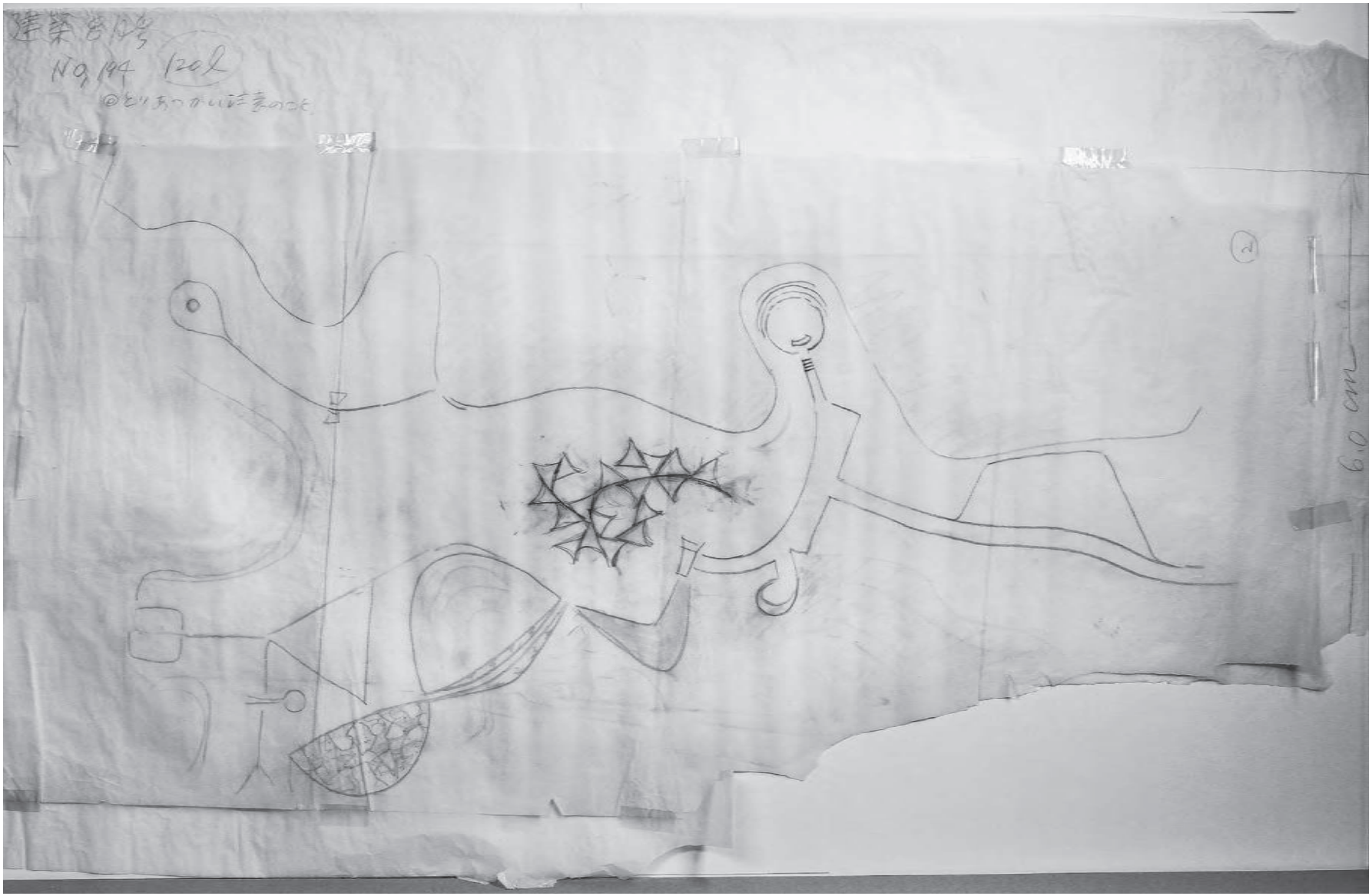


fig.65　大谷幸夫《こどもの国児童館 屋根エスキース》1965年、鉛筆、色鉛筆、トレーシングペーパー、73.7×121.8cm、大谷研究室旧蔵「こどもの国児童館・A地区児童遊園」資料群
Sachio Oani〈Sketch of Roofs. Children's House in Zone A of the Kodomo No Kuni〉1965, pencil, red-pencil, tracing paper, 73.7×121.8cm, Otani Associates Kodomo No Kuni Collection

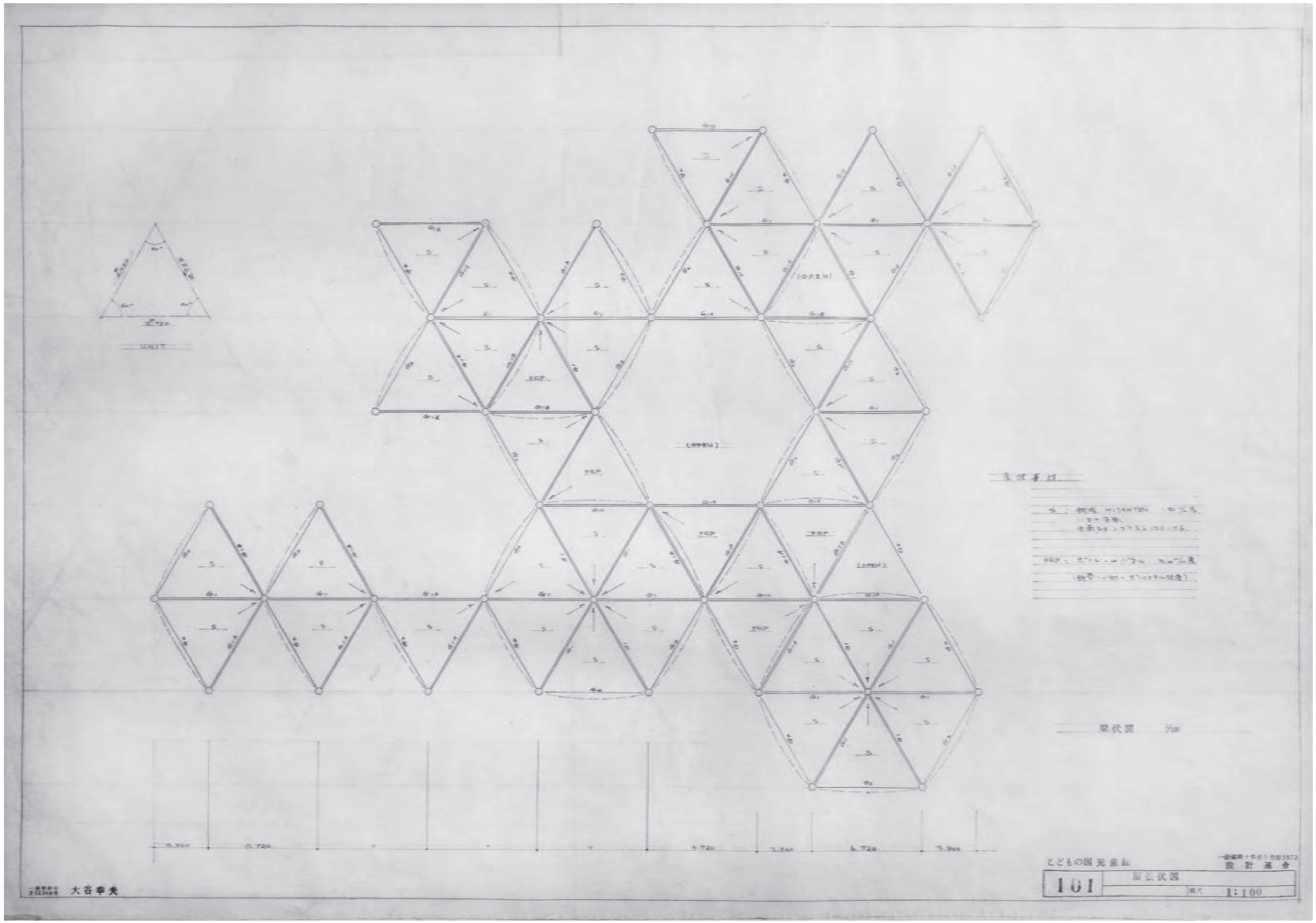



fig.66 大谷幸夫《こどもの国児童館 101 児童館屋根伏図》作図：大谷研究室（旧設計連合）、1965-66年、鉛筆、インク、トレーシングペーパー、55.2×81.0cm、大谷研究室旧蔵「こどもの国児童館・A地区児童遊園」資料群
Sachio Otani 〈101 Roof Plan of Children's House in Zone A of the Kodomo No Kuni〉 Drawn by Otani Associates (former Sekkei Rengo), 1965-66, pencil, ink, tracing paper, 55.2×81.0cm, Otani Associates Kodomo No Kuni Collection

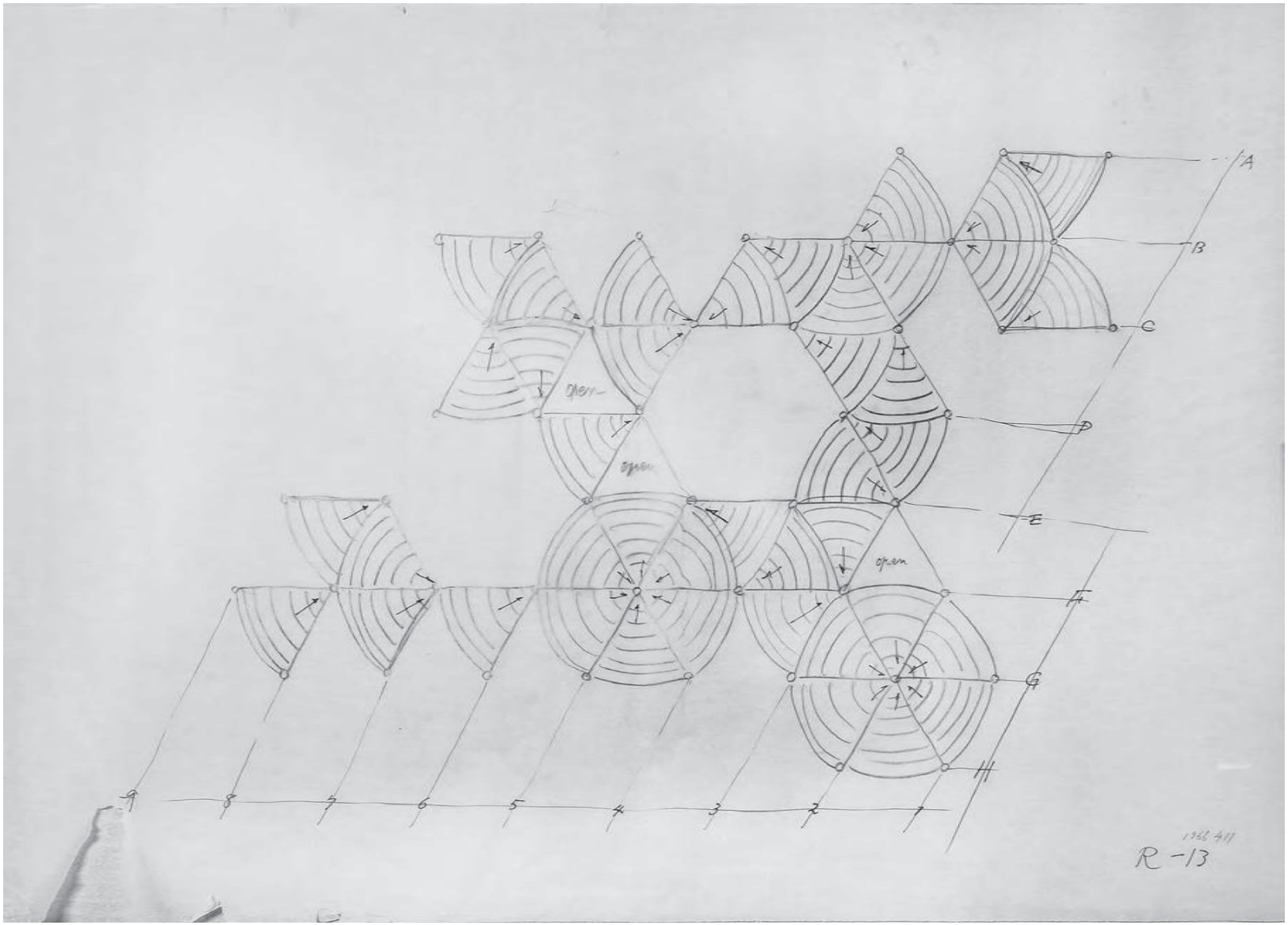



fig.67　大谷幸夫《＊こどもの国児童館 R-13 児童館屋根平面図》作図：大谷研究室（旧設計連合）、1966年4月11日、鉛筆、トレーシングペーパー、57.5×84.3cm、大谷研究室旧蔵「こどもの国児童館・A地区児童遊園」資料群
Sachio Otani 〈R-13 Roof Plan Sketch. Children's House in Zone A of the Kodomo No Kuni〉 Drawn by Otani Associates, April 11, 1966, pencil, tracing paper, 57.5×84.3cm, Otani Associates Kodomo No Kuni Collection

# 横浜市所蔵カメラ・写真コレクションにおける カテゴリー［カメラ］に属する収蔵品の概要

日比谷 安希子

## はじめに

横浜市民ギャラリーあざみ野では、1993、94年に横浜市がアメリカの収集家、故サーマン・F・ネイラー氏（Thurman F. Naylor, 1919–2007）から購入したカメラ・写真コレクションを「横浜市所蔵カメラ・写真コレクション」（旧ネイラーコレクション）として、2006年より収蔵管理している。本コレクションはカメラ、写真、写真関連アクセサリー、資料及び文献の総数約12,000件から成る。ネイラー氏がまとめたリストには不明な部分が多いため、当館では現在もネイラー氏から提供された目録と実物を照らし合わせながら、各収蔵品データを確認し、確認済のデータを横浜市民ギャラリーあざみ野のホームページに公開する作業を進めている。

今年度、大分類［カメラ］について、実物が確認できる約2,650件のデータ整理が終了する見通しとなり、全体像が見えてきた。そこで、この機会に改めてネイラーコレクションのカメラについて概観し、その収集の意図やコレクションの特徴について考察したい。

第一章では、コレクションの概要と分類について述べる。第二章では、大分類［カメラ］に含まれる資料の製造された年代と地域のデータを元に、コレクションの傾向を分析する。第三章では、ネイラー氏の目録を参照し、その分類に着目しながら本コレクションのカメラの分析を行うことによって、その特徴と意義について考察する。

## 1. 横浜市所蔵カメラ・写真コレクションの概要

### 1-1. 旧ネイラーコレクション

横浜市所蔵カメラ・写真コレクションは、アメリカ合衆国マサチューセッツ州ボストンのコレクター、サーマン・F・ネイラーが約40年にわたって世界各地から収集した、写真機材と写真作品を中心とするコレクションである。ネイラーは第二次世界大戦に陸軍航空軍パイロットとして従軍、大戦後は自動車用サーモスタットの実用製品の発明家としても知られるエンジニアで、マサチューセッツ州ウォルサムの自動車と飛行機の部品製造会社、スタンダード・トンプソン社のCEOを1960年から25年間務めた実業家でもある。1940年代に50セントほどの古いカメラの購入から収集を始め、オークション、ディーラー、店舗、骨董屋等での購入、寄贈など様々な収集方法でコレクションを拡大していった。ネイラーは、写真の技術革新を学ぶにつれて、写真の“Why”と、特に“How”に興味を持つようになったと述べている。[1] その言葉の通り、ネイラーは、カメラ、写真をそれぞれ単体で考えず、写真技術の発展と写真文化の相互関係を理解できる内容を目指しており、それぞれの資料に関連品があるときは、セットで収集している。1981年からはコレクションを展示するために、

温湿度管理の行き届いたプライベート・ミュージアムをボストン市ウォルサムにある自宅に設置し、要望に応じて公開していた(fig.1)。

(fig.1)　ネイラー・ミュージアム内部の様子
(平成5年横浜市による撮影)

### 1-2. 横浜市によるネイラーコレクションの取得の経緯

1989年に、ネイラーからコレクションを散逸することなく後世にわたって公共に生かしてくれるところとして、本市に譲渡の申し出があったことを受け、市は1992年にカメラや写真の専門家による現地調査を実施する。調査結果として「カメラと写真の歴史がたどれる厳選された良質の総合コレクション」との報告を受け、購入方針を固めている。[2] コレクションは1993、94年度にアメリカより日本に2回に分けて移送後、一時、横浜市歴史博物館、横浜市立図書館などに収蔵され、横浜市の管理のもと、検品作業、資料カードの作成が進められた。2005年度には横浜市民ギャラリーあざみ野の開館に伴い、同ギャラリーの収蔵庫に収蔵され、2006年度からは指定管理者の公益財団法人横浜市芸術文化振興財団が、整理・保存・活用業務を受託。以来、年1回のコレクション展でコレクションを公開するとともに、横浜市から引き継いで、収蔵・保存・管理を行っている。

### 1-3. コレクションの分類

博物館・美術館等のコレクションは一つの総体でありながら、そこに含まれる事物を体系づけるために分類される。本コレクションも横浜市が管理していた時期に、大分類を[カメラ]、[写真]、[レンズ]、[図書]、[汎用]とする分類が設定され、当館でもその大分類を引き継いでいる。内訳は下記の通りである。

カメラ：約2,700件
写真：約2,900件
写真関連アクセサリー：約2,000件(レンズ約300件を含む)
資料及び文献：約2,000件

大分類[カメラ]については、撮影に使用するものを中心とした光学機器を指す。ただし、プロジェクターやステレオヴュワー等の画像鑑賞装置は大分類[汎用]に分類されているため含まない。

中分類については、当館に収蔵する前に作成された分類表では、[フォールディングカメラ][ジュメユ&リジッド]等形状別、[レフレックスカメラ]等のファインダー構造別、[ロールフィルムカメラ][カートリッジ

カメラ]等感材種別、[パノラマカメラ][ステレオカメラ]等撮影する写真の形式別など様々な基準による分け方が混在し、複数の項目に該当するカメラが発生すること、35mmフィルムカメラが主流の時代の分類のため[35mm一眼レフ][35mmカメラ(一眼レフを除く)]で独立した項目が設けられていることから採用していない。現在、当館では中分類として写真撮影機能を持つ[スチルカメラ]、動画撮影機能を持つ[シネカメラ]、カメラ・オブスクラ等写真発明以前の光学機器を含む[その他の光学機器]として機能別に分類している。中分類の内訳は以下の通りである。

[スチルカメラ]　2,526件(シネ・スチル兼用カメラ4件を含む)
[シネカメラ]　111件
[その他の光学機器]　9件

上記の中分類から更に、コレクションを系統だてて管理を行うために、小分類の設定が必要である。小分類の設定にはカメラの形状、ファインダー形式、感材種等様々な基準が考えられるが、感材種等既にデータをとっている項目に関しては、デジタルデータベースの導入によって検索が可能になっている。現在、データベースの検索項目を鑑みながら小分類をどう設定するか、日本カメラ博物館をはじめとする関係機関の協力を仰ぎ検討を重ねている。

## 2. 大分類[カメラ]のデータによる分析

各収蔵品は、資料カードを作成するとともに、デジタルデータベース上で管理している。大分類[カメラ]について、現在確認しているデータ項目は下記の通りである。

資料名／Title／製作者(和文)／Manufacturer／製作年／製作地／レンズ名／レンズ製作者名／サイズ(最小)／感光材料／感材規格／画面サイズ

今回、データ整理が終了したことで集計が可能になったため、それぞれの年代と地域の分布を示した表を作成した。

尚、本文のカメラ名の後の[　]の番号は資料番号を指し、当館の収蔵品データベース(https://jmapps.ne.jp/azamino/)から資料名または番号検索で詳細データを確認できる。

**(表1)**

| 年代地域 | -1838 | 1839-1859 | 1860-1879 | 1880-1899 | 1900-1919 | 1920-1939 | 1940-1959 | 1960-1979 | 1980-1999 | 不詳 | 合計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| アメリカ | 1 | 12(2) | 10 | 135 | 186 | 299 | 271 | 118 | 42 | 34 | 1108 |
| アルゼンチン | | | | | | | 2 | 1 | | | 3 |
| イギリス | 2(1) | 3 | 3 | 32 | 36 | 45 | 46 | 13 | 3 | 3 | 186 |
| イタリア | | | | | 6 | 1 | 21 | 2 | 1 | | 31 |
| インド | | | | | | | | 1 | | | 1 |
| オーストリア | | 1(1) | | | | 1 | 5 | | | | 7 |
| オランダ | | | | | 1 | 1 | 1 | | | | 3 |
| カナダ | | | | | 1 | 1 | | 1 | | | 3 |
| シンガポール | | | | | | | | 1 | | | 1 |
| スイス | | | | 2 | 2 | 3 | 5 | 6 | | | 18 |
| スウェーデン | | | | | | | 2 | | | | 2 |
| スペイン | | | | | | | | 1 | | | 1 |
| ソビエト連邦 | | | | | | 5 | 22 | 20 | 6 | | 53 |
| 台湾 | | | | | | | | 7 | 21 | 1 | 29 |
| チェコスロバキア | | | | | | 1 | 6 | 4 | | | 11 |
| 中国 | | | | | | 1 | 4 | 10 | 9 | 4 | 28 |
| ドイツ | | | | 19 | 45(1) | 257 | 192 | 66 | 5 | 6 | 590 |
| 日本 | | | | | 1 | 20 | 209 | 122 | 32 | 10 | 394 |
| ハンガリー | | | | | | | 2 | | | | 2 |
| ブラジル | | | | | | | | 1 | | | 1 |
| フランス | 2 | 6(2) | 4 | 25 | 17 | 28 | 26 | 2 | | 4 | 114 |
| ベルギー | | | | | | 1 | | | | | 1 |
| ポーランド | | | | | | | 2 | 2 | 1 | 1 | 6 |
| 香港 | | | | | | | 2 | 14 | 6 | 10 | 32 |
| マカオ | | | | | | | | 1 | | | 1 |
| メキシコ | | | | | | | 1 | | | | 1 |
| モロッコ | | | | | | | 1 | | | | 1 |
| ラトビア | | | | | | 1 | | | | | 1 |
| 不詳 | | | 2 | 2 | | | 2 | 1 | 1 | 9 | 17 |
| 合計 | 5 | 22 | 19 | 215 | 294 | 665 | 822 | 395 | 127 | 82 | 2646 |

※年代については写真が発明される1839年とそれ以前を分けるために、最初だけ「-1838」とし、以降は20年ごとに区分した。
※製造期間が複数年に渡るカメラは、初号発売年が属する年代で集計した。
※ソビエト連邦、チェコスロバキアはネイラー収集当時の国名を記載した。
※( )内は、記載された値のうち、後年製造されたレプリカの数を示す。

ネイラーコレクションは写真術発明以前の映像器具に始まり、写真術の黎明期から展開期を経て大衆化するまでの、19〜20世紀の様々な特徴を持ったカメラが、ほぼ総合的に収集されている。年代としては、1940〜59年の製品が最も多く、全体の31%を占める。コレクションはデジタルカメラが普及する1990年代後半より前のもので構成されているため、デジタルカメラは無い。撮像素子を使用するが、記録はビデオフロッピーディスクにアナログ方式で行う「電子スチルビデオカメラ」と呼ばれるカメラは、「RC-250 ザップショット」[2735](1988年)を収蔵している。

地域別の分布で見ていくと、1839年に発表され世界で最初の写真術となったダゲレオタイプ(銀板写真)が

発明されたフランスと、同時期に写真の発明が行われていたイギリスのカメラや光学機器は、写真史初期のものから20世紀の製品まで広く収蔵されている。

ネイラーの居住国であったアメリカの製品が最も多く、42%に上る。同国では1839年のうちに写真が伝わり、早くから写真産業が勃興した。ネイラーは初期のダゲレオタイプカメラから収集し、最初期のポートレイト用カメラ「ウォルコット・ダゲレオタイプカメラ」についてはレプリカ[2400]を制作するなど、自国のカメラ史への意識が感じられる。製作者としては、イーストマン・コダック社(イーストマン乾板&フィルム社、イーストマン社時代の製品を含む)の製品が最も多く、496件含まれ、次いでポラロイド社が72件となっている。

ドイツについては、「ライカ」、「ローライフレックス」、「コンタックス」、「イコンタ」等、革新的な近代カメラが多く登場し、ドイツの写真工業が隆盛した1920〜39年製の製品が多く集められている。

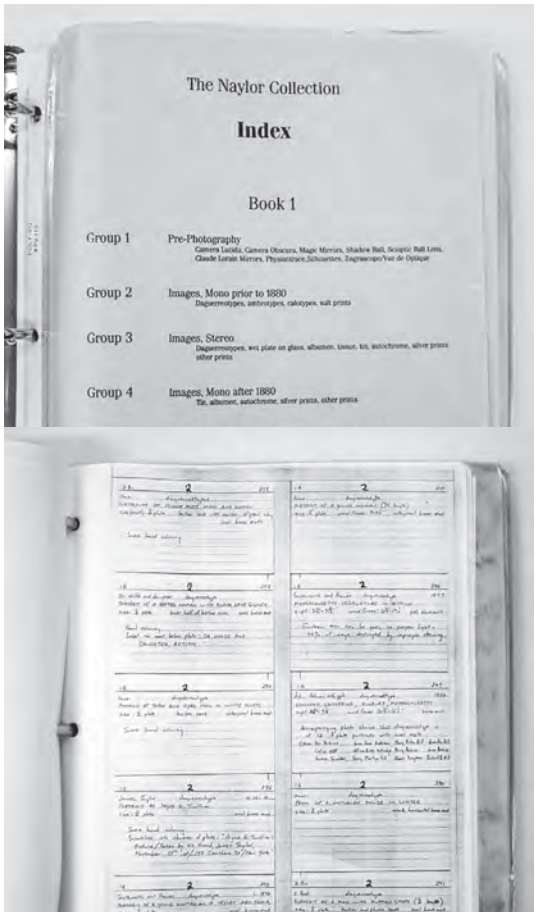
日本製カメラはアメリカ、ドイツに次いで多く、1940〜59年、1960〜79年製の製品が中心となっている。この時期は、日本が第二次世界大戦後の復興期を経て、カメラの製造・輸出大国になっていく時期にあたる。[3]

## 3. ネイラーの分類によるカメラの分析

### 3-1. ネイラー収蔵時の分類

ネイラー所蔵の時、コレクションはネイラー自身によって、(表2)のとおり22種類に分類され、全3巻の手書きの目録が作成されている(fig.2)。カメラのみで一つのグループが構成されているものもあれば、カメラ、写真、文献等様々な資料が含まれているグループも存在している。

特徴としては、ゼラチン乾板が普及し、ロールフィルムが発明される1880年代以前と以後で写真、カメラ、文献を分類するなど、収集活動を通じて写真技術の発展と写真表現との関係を探っていたコレクターの収集方針がわかる分類がなされている。また、Group 3 “Images, Stereo(ステレオ写真)”、Group 14 “Cine(映画)”等、技術史とは別にメディアの形式や種類によって収められているグループもある。また、Group 10 “Kodak(コダック)”は一企業であるコダック社の製品、広告、関連資料で一つのグループが設けられているほか、Group 20に“Memorabilia(注目すべき事柄)”として、特定の人物の関連資料を一つのグループに収めるなど、個人コレクターならではの分類も見られる。全体を見ると分類の基準として、メディア、時代、技法、メーカー等、様々な分け方が混在している。




(fig.2) ネイラー目録のINDEX及び内容の複写

## (表2) The Naylor Collection Index

| Group | Contents |
|---|---|
| Group 1 | Pre-Photography<br>Camera Lucida, Camera Obscura, Magic Mirrors, Shadow Ball, Scioptic Ball Lens, Claude Lorain Mirrors, Physiontrace（原文ママ）, Silhouettes, Zograscope/Vue de Optique |
| Group 2 | Imaged, Mono prior to 1880<br>Daguerreotypes, ambrotypes, calotypes, salt prints |
| Group 3 | Images, Stereo<br>Daguerreotypes, wet plate on glass, albumen, tissue, tin, autochrome, silver prints, other prints |
| Group 4 | Images, Mono after 1880<br>Tin, albumen, autochrome, silver prints, other prints |
| Group 5 | Camera, Lenses and Equipment-1880 and earlier<br>Daguerrean, wet plate, studio equipment, studio furniture |
| Group 6 | 3D Cameras, Lenses, Equipment, Viewers<br>Stereo, lenticular, other 3D, vectographs, stereo viewers, mono viewers |
| Group 7 | Camera after 1880 Dry plate, field, studio, roll film<br>(except as otherwise indexed) |
| Group 8 | Cameras<br>Detective, spy, subminiature |
| Group 9 | Cameras<br>35mm, excluding pre-Leica and copies & Kodak |
| Group 10 | Kodak<br>Camera, accessories, advertising, related Kodak material |
| Group 11 | Cameras and memorabilia<br>Polaroid, other instant cameras, Polaroid prototypes, related instant photography items |
| Group 12 | Cameras<br>Leica, Pre-Leica 35, Leica copies, accessories, Leica related advertising and memorabilia |
| Group 13 | Photo Miscellaneous<br>Shutters, lenses, rangefinders, timers, Waterhouse stops, darkroom equipment, enlargers, furniture, tripods, stands after 1880 |
| Group 14 | Cine<br>Cameras, equipment, lenses, magic lanterns, lantern slides, pre-Cinema |
| Group 15 | Cameras<br>Street, color separation, underwater, police, electronic, robotic, medical, special purposes, toy, novelty cameras and devices, aerial/aircraft, military |
| Group 16 | Books Prior to 1880 |
| Group 17 | Books 1881 and later |
| Group 18 | Cases, jewelry, meters, Stanhopes, frames, etc.<br>Union cases, other cases, photo jewelry, ceramics, photo toys, Stanhopes, souvenirs, albums, exposure meters and calculators, statuary, frames, coins, stamps, lithopane, device with photos |
| Group 19 | Photographic Advertising<br>Wood and metal signs, cartoons, engravings, Japanese Ukiyo-E, woodblock prints |
| Group 20 | Memorabilia<br>Margaret Bourke-White; Godowsky-Mannes; Wheatstone; Edgerton; Ansel Adams; Victor Keppler; Sam Shere (Hindenburg) |
| Group 21 | Other |
| Group 22 | Acquisitions after April,1991 |

### 3-2. 各分類の特徴とそこに含まれるカメラ

(表2)のグループ名に下線が付いたものが、カメラが含まれるグループである。本稿ではカメラが含まれるグループについて解説し、特徴的な資料を見て行く。

#### (1)Group 1　Pre-Photography

| |
|---|
| Camera Lucida, Camera Obscura, Magic Mirrors, Shadow Ball, Scioptic Ball Lens, Claude Lorain Mirrors, Physiontrace(原文ママ), Silhouettes, Zograscope/Vue de Optique |

写真前史の光学機器と、シルエット等の影をなぞることによる肖像表現が含まれる。光学機器は、カメラの前身と言われる「携帯用カメラ・オブスクラ」、「テント型カメラ・オブスクラ」、「カメラ・ルシーダ」がこのグループに入る。

#### (2)Group 5　Camera, Lenses and Equipment-1880 and earlier

| |
|---|
| Daguerrean, wet plate, studio equipment, studio furniture |

主に最初に普及した写真技法、ダゲレオタイプ用のカメラと1850年代から用いられたコロジオン方式湿板用のカメラが属する。初期の写真は写真館を中心に発展し、技法上の制約から薬品処理から撮影、印画制作までの一連の工程が撮影現場で行われていたため、スタジオ用品や薬品処理道具が同じ項目に入れられている。個別の収蔵品としても、「アメリカン・ダゲレオタイプカメラ」[2399](fig.3)は、薬品処理用具、三脚、木製首押さえ計27点とセットで収蔵されている。名刺判(60×90mm)やジェムサイズ(25×30mm)の写真を一度の露光で複数枚撮影する多眼カメラも9台を所蔵している。

(fig.3)　アメリカン・ダゲレオタイプカメラと薬品処理用具

#### (3)Group 6　3D Cameras, Lenses, Equipment, Viewers

| |
|---|
| Stereo, lenticular, other 3D, vectographs, stereo viewers, mono viewers |

写真史初期から20世紀後半までの立体視に関連したカメラやヴュワーなどの道具が属する。1880年以前のステレオカメラはGroup 5に含まれるため、本グループには含まない。

1832年に発表された立体視の理論は1839年に写真が発表されるとすぐにステレオ写真(立体写真)として応用され、新たな視覚体験をもたらすメディアとして写真の普及とともに広まっていった。このグループにはレフレックスカメラ「ソホ・ステレオ・レフレックス」[1884](1909年)、35mmフィルム用「ステレオ・リアリ

スト モデル1041」[88](1947年)(fig.4)、レンチキュラー写真用「ニムスロ3D」[539](1980年)等各時代を代表する立体写真撮影用カメラが含まれ、ステレオ写真の主な担い手がプロフェッショナルからアマチュアへと移っていった歴史をたどることができる。ステレオ写真についても、Group 3に単独で項目が設けられている通り多数の収蔵があり、ネイラーのこの分野への関心の高さがうかがえる。

(fig.4)　ステレオ・リアリスト モデル1041

### (4) Group 7　Camera after 1880

Dry plate, field, studio, roll film(except as otherwise indexed)

1880年以降に製造されたカメラのうち、他グループに含まれないものが属する。1880年代以降は、1870年代に工業製品化したゼラチン乾板と1880年代に実用化したロールフィルムの普及によって、カメラに感材を装填したまま、複数枚の写真を手持ちで撮影できるようになった。以来、感材用マガジンやシャッターを搭載するなどカメラの機能は複雑化し、急激に新しいカテゴリーのカメラが増えていった。このグループに含まれるカメラもクラップカメラ、ジュメユ・リジッド型カメラ、フォールディングカメラ、ボックス・カメラ、初期の一眼レフ、二眼レフ、20世紀後半に登場したレンズ付きフィルムまで多種多様なカメラがあり、19世紀末から20世紀のカメラのバリエーションの広がりを示している。

### (5) Group 8　Cameras

Detective, spy, subminiature

ディテクティヴカメラとは、1880年代以降につくられた手持ちで目立たないように撮影できるカメラを指す。[4]Detective(探偵)と付いているが、必ずしも捜査のために設計されたものではなく、被写体に気づかれないうちに撮影する「キャンディッド・フォト」と呼ばれる写真を撮るために使用された。狭義には箱型のマガジンカメラ(fig.5)を指すこともあるが、時計や双眼鏡等、他の日用品の形をした製品のことを含むこともあるため、カメラの分類では「偽装カメラ」や「スパイカメラ」と呼ばれるカメラとセットに扱われることが多く、ネイラーも同分類に入れている。

超小型カメラは、20世紀の製品については画面サイズが24×36mm未満の製品が分類される。コレクションには日本で戦後に進駐軍の土産物として大量に製造された「ヒットタイプ・カメラ」あるいは「豆カメラ」と呼ばれる17.5mmロールフィルムを使用する超小型カメラも多数含まれる。

(fig.5)　T&Wディテクティヴカメラ [1715]

### (6) Group 9　Cameras

35mm, excluding pre-Leica and copies & Kodak

独立した項目が設けられているGroup 10 “Kodak(コダック)”、Group 12 “Camera Leica, Pre-Leica 35,

Leica copies(ライカ、プレ・ライカ、ライカ・コピー)"を除いた35mmロールフィルム使用カメラを集めたグループである。透視ファインダーカメラ、一眼レフカメラが多く、画面サイズは24×36mmの他、通称ハーフサイズと呼ばれる18×24mmの製品も含まれる。一眼レフは初期の「スポルト」[1424](1935年)や、世界初のペンタプリズム搭載一眼レフ「コンタックスS」[1928](1949年)、電気露出計内蔵ファインダーを搭載した「ニコンFフォトミック」[815](1962年)、ハーフサイズの「オリンパスPEN」[2517](1963年)等が含まれ、一眼レフが20世紀後半に発展し、小型精密カメラの中心になっていく歴史を追うことができる。透視ファインダーカメラも、世界で初めてオートフォーカス機構を搭載した市販カメラ「コニカ C35 AF」[1092](1977年)等、カメラ史上重要なカメラを含む。35mm距離計連動カメラに関しては、その多くがGroup 12にライカ・コピーとして分類されているが、「コンタックス」シリーズの距離計連動カメラと「コンタックス」に影響を受けたカメラはこの分類に入れられている。

### (7) Group 10　Kodak

Camera, accessories, advertising, related Kodak material

1881年にアメリカでイーストマン写真乾板社として創業したコダック社は、"You press the button, we do the rest.(あなたはボタンを押すだけ、あとは私たちがやります)"というキャッチコピーとともに100枚撮りフィルム入りカメラ「ザ・コダック」[1598](1888年)(fig.6)を売り出した。使いやすさを追求したカメラの開発によって写真の大衆化に大きく寄与したメーカーである。コダック社は感材とカメラを両輪で開発し、新たなカメラを販売したときの専用のロールフィルムには規格番号を割り当てている。よく知られたところでは映画用35mmフィルムをパトローネに入れて規格化した135フィルムと135フィルム用カメラ「レチナ I(タイプ 117)」[91](1934年)、126カートリッジフィルムと126フィルム用カメラ「コダック・インスタマチック」シリーズ(1963年)をそれぞれ同時に発売している。これらのフィルム規格は他のメーカーにも採用され、コダック社が生み出したカメラとフィルムのシステムは、19世紀末〜20世紀のカメラ産業に大きな影響を与えた。このグループには、様々なフィルム規格やカラーバリエーションのカメラ、感光材料、暗室用品、広告等が含まれ、コダック社の企業としての戦略が見える内容になっている。

(fig.6)　ザ・コダック

### (8) Group 11　Cameras and memorabilia

Polaroid, other instant cameras, Polaroid prototypes, related instant photography items

カメラ内部で撮影から現像、画像形成までを行うイン・カメラ・プロセスのカメラと関連資料が属する。古いものは「ボールズ＆スミス現像処理機構内蔵カメラ」[1320](1857年)がある。これは本体下部に薬品処理用の3個のタンクが付いた湿板写真用カメラで、上部のレバーでガラス原板を上下させることによって、薬品処理を行いながら撮影を行う。

ポラロイド社の製品も、最初に発売された「ポラロイド・ランドカメラ モデル95」[1367](1948年)から、「スパイス・カム」[2768](1997年)まで72機を収蔵している。この中には、「ポラロイド SX-70 ランドカメラ」の

プロトタイプ[2232](fig.7)、[2233]、[2234]、「ポラロイドSX-70ソナー・オートフォーカス」のデモンストレーション用カメラ[1390]、ISO600の高感度フィルムと、比例式補助光機構を持つエレクトロニック・フラッシュを組み合わせたサン・システムに対応した機種「ポラロイド660」(1982年発売)のプロトタイプ2機[2542]、[1989]など、ポラロイド社の研究所で製作・試用されたカメラも含まれる。

(fig.7)　ポラロイド SX-70 ランド カメラ プロトタイプ

**(9)Group 12**　Cameras

Leica, Pre-Leica 35, Leica copies, accessories, Leica related advertising and memorabilia

1925年にドイツのエルンスト・ライツ社から発売された「ライカ」(fig.8)は、その精密さと機動性で、それまで専ら映画用フィルムとして認識されていた35mmフィルムを写真のプロフェッショナルの使用に耐えうる規格へと押し上げ、小型精密カメラという分野を確立した。「ライカ」が採用した24×36mmの画面サイズは、現在のデジタルカメラの撮像素子の規格「フルサイズ」にも踏襲されている。カメラ史の中で、「ライカ」とその影響を受けたカメラは、35mm小型精密カメラが発展する過程を表す分野として研究対象になっている。プレ・ライカは、「ライカ」以前に発売された35mmフィルムを使用するカメラ群を指す。ライカ・コピーは「ライカ」に範を取って世界各地で製作されたカメラを指す。この分類のカメラを通じて、20世紀に35mmフィルムカメラが主流になっていく過程をたどることができる。

(fig.8)　ライカ I (A)[375]

**(10)Group 14**　Cine

Cameras, equipment, lenses, magic lanterns, lantern slides, pre-Cinema

映画はロールフィルムの完成で実用化できたこともあり、写真に近接した分野として、映画前史関連資料、映写機、シネカメラも収集されている。シネカメラは小型の9.5mm、8mm、16mm用の製品を中心に収蔵されており、ビデオカメラは含まれていない。初期のものとしては、35mm用「キナモ」[2612](1921年)、世界的に流行した9.5mm用「パテ・ベビー」[2620](1922年)、最初の16mmシネカメラ「シネコダック　モデルA」[2116](1923年)を収蔵し、8mmフィルム用もシングル8、スーパー8、ストレート8、ダブル8の各規格用のカメラを揃えている。

**(11)Group 15**　Cameras

Street, color separation, underwater, police, electronic, robotic, medical, special purposes, toy, novelty cameras and devices, aerial/aircraft, military

特殊用途のために製造されたカメラと、トイカメラが属する。特殊用途のカメラは、特定の専門業務に使用するものや特殊な環境での使用に対応できる仕様のものがあり、市販されていないものも含まれる。スト

リートカメラは街角で営業する写真師用カメラで、その場でプリントできるインスタントカメラの機構を持つ。三色分解カメラは、印刷、カラープリントを作成するために三色分解ネガを撮影するカメラで、カラーフィルムが発明される以前に使用された。水中カメラは浸水を防ぎ、一定の水圧に耐える構造を持つ。警察用カメラはマグショットカメラや指紋カメラが含まれる。医療用カメラは、歯科用カメラや「ガストロカメラGTF-A」[13588](1965年)を含む。軍用カメラは、記録や偵察に使用する小型カメラ、プレスカメラ、航空カメラ等が含まれる。航空カメラは望遠で高精細画像を得るために大型のカメラが多く、最大のものはアメリカ空軍偵察機「U-2」に搭載された画面サイズが9×18inch、本体が1009×560×380mmに及ぶ高高度諜報写真撮影用カメラ「フェアチャイルド K-38」[2169](fig.9)である。

トイカメラは、古くは1876年に子ども向けに発売された「ハーゾーグ・カメラ」[1665]から、20世紀後半に製造された126、110フィルムカートリッジを使用するプラスチック製のカメラまで、光学メーカーによる製品だけでなく、日用品や玩具を製造するメーカーの製品を含む。特殊用途カメラとトイカメラという性質の異なるカメラが同じグループに入れられている理由は不明であるが、写真の活用分野と、カメラの使用者層の広がりを示している。

(fig.9)　フェアチャイルド K-38(右)

### (12) Group 20　Memorabilia

Margaret Bourke-White; Godowsky-Mannes; Wheatstone; Edgerton; Ansel Adams; Victor Keppler; Sam Shere(Hindenburg)

特定の写真家、写真技術者等に紐付いた資料である。

写真家関連のカメラでは、1935年に『ライフ』誌の創刊号の表紙を飾った写真家、マーガレット・バーク＝ホワイト(Margaret Burke-White,1904-1971)が使用した木製一眼レフカメラ、「トロピカル・ソホ・レフレックス」[1759](PL.5)を収蔵している。

サム・シェア(Sam Shere, 1905-1982)は『ライフ』誌上を中心に活躍した報道写真家である。関連品は写真、カメラ、賞状、新聞記事で構成され、シェアの作品で最も知られる1937年の飛行船ヒンデンブルク号の爆発の様子を撮影した際に使用していた「スピード・グラフィック」[1262]と「ライカⅢ」[547]がある。

エレクトロニック・フラッシュの開発者で、「ミルク・ドロップ・コロネット」などのハイスピード写真でも知られるハロルド・E・エジャートン(Harold E. Edgerton, 1903-1990)は、ネイラーが居住するボストン近隣のマサチューセッツ工科大学で教授を務めていたこともあり、長年にわたる交流の中でカメラ、写真、装置等が収集されている。カメラとしては、初期のハイスピード写真の撮影に使用したフォールディングカメラ「ベルクハイル」[2090](1914年)を改造したものがある。また、エジャートンは1950～80年代に海洋探検家ジャック・クストー(Jacques Cousteau, 1910-1997)のために水中写真・動画撮影の技術開発に携わっており、その際に使用したエジャートン、ジェルムズハウゼン＆グリアー社(以下EG&G社)の「シャロウ・タイプCA-8」[2099]等の水中カメラがある。「ラパトロニック」[2087、11320、11321](fig.10)はEG&G社が原子力委

員会の依頼により開発した核爆弾撮影用の撮影装置である。核爆発の撮影には強い光量と核反応の速さに対応する超高速のシャッター速度が求められた。「ラパトロニック」は通電することによって開閉する光磁気式シャッターで、2マイクロ秒のシャッター速度を実現した。

(fig.10)　ラパトロニック

1935年にイーストマン・コダック社が発売し、世界で最初に商業的に成功したカラーフィルム「コダクローム」の開発者、レオポルド・ゴドウスキー(Leopold Godowsky, 1900–1983)とレオポルド・マンネス(Leopold Mannes, 1899–1964)の関連資料は、二人の家族から寄贈された実験道具、関連文献、カメラ、写真、音楽家でもあった二人の楽譜や楽器等幅広い資料で構成されている。カメラはゴドウスキーが使用していたもので、「コダック・ステレオカメラ」[83]、「ミノルタ・オートパック　500」[167]等、市販されていた製品である。シネカメラは「シネコダック　モデルK」[2246]があり、1935年に撮影された16mmフィルムも付随している。

主にアメリカを中心に活動した人物の資料が多く、技術者関連では、その研究活動に関わる貴重な資料も含まれている。これらの人物は写真史の中にも大きな足跡をのこす人々であり、特に本コレクションの重要性を示す資料群といえる。

## おわりに

これまで見てきた通り、ネイラーコレクションに含まれるカメラは、ヨーロッパで誕生した写真技術が19〜20世紀を通じてどのように発展したかを示すものになっている。また、トイカメラやコダック社の製品をはじめとする大衆機も多く含んでおり、技術の発展という視点にとどまらず、どのように写真文化が拡がっていったかを探求する視点も合わせもっている。一方で、各時代の最先端技術で開発された特殊用途カメラも収蔵し、光学技術者たちがいかに人間の視覚を切り拓いて来たかを示す資料も含まれている。

写真研究の分野では近年、芸術的写真と非芸術写真に分けられて主に芸術的写真を中心に論じられて来た写真論が見直され、市井で撮られた肖像写真や科学写真、商業写真をはじめとするヴァナキュラー写真にも研究の対象が広がっている。写真は光学技術によってイメージが形成され、撮影目的によって用いられる機材や感光材料の選択が大きく異なるため、それらについて探求することは、撮影時の状況や、撮影の社会的背景を知るための手がかりとなる。本コレクションのカメラはその多様性によって、市井の写真から特殊用途の写真まで、様々な目的で撮影された写真がどのような状況や背景で制作されたものかを探れるものとして、更なる研究が期待される。

今後の課題としては、大分類[カメラ]の小分類を策定するとともに、更に詳細なデータを採って公開し、より体系的なデータベースの検索機能を強化したい。また、先に述べた通り、コレクションのカメラは、写真、広告、文献、アクセサリー等の収蔵品を関連付けて収蔵されているものもある。2023年9月〜2024年3月

までの期間限定として「〈WEB展覧会〉横浜市所蔵カメラ・写真コレクション 来日30周年 みどころキューブ」と題して、Web上の鑑賞コンテンツでコレクションの一部を閲覧できるようにしてみたが、今後、他の大分類の資料の調査を進めて他分類の情報を公開し、収蔵品間の相互関係を示しながら、写真の発展が複合的な視点から捉えられるようにデータを整備していきたい。また、本コレクションはデジタルカメラを含まない。デジタルによる写真が主流になった現代において、コレクションが内包する歴史を現在の写真文化につなげていくための方策について検討が必要である。

（横浜市民ギャラリーあざみ野 学芸員）

**［謝辞］**

本稿の執筆にあたり、日本カメラ博物館学芸員の井口芳夫氏に貴重なご助言を賜りました。ここに記して厚く御礼申し上げます。

---

1 Thurman F. Naylor, *Working Inventory of the Naylor Collection,* The Naylor Collection, 1988、(i)sdv X

2 詳細な経緯は以下を参照。日比谷安希子「横浜市所蔵カメラ・写真コレクション（旧ネイラーコレクション）個人コレクションの分類と写真史をめぐる考察」『横浜美術館研究紀要 第14号』／2013年／pp.41–42

3 日本のカメラ輸出台数は、1967年に西ドイツを抜いて世界1位となった。

4 ディテクティヴカメラの定義については以下を参照。Introduced by Peter C Bunnell and Robert Sobieszek, *Encyclopedia of Photography,* 1974, Arno Press, pp.168–169
Todd Gustavson, *500 Cameras,* Sterling Publishing, 2011, p.73

【主要参考文献】

- 日本写真機光学機器検査協会、歴史的カメラ審査委員会編『日本カメラの歴史 歴史編・資料編』毎日新聞社／1975年
- 酒井修一『ライカとその時代』朝日新聞社／1997年
- クエンティン・バジャック『写真の歴史』（伊藤俊治監修）創元社／2003年
- Todd Gustavson, *Camera: A History of Photography from Daguerreotype to Digital,* Sterling Publishing, 2009

# The Principles and Achievements of the Yokohama Museum of Art's Citizens' Workshop

Mori Mineku
(Assistant Educator, Yokohama Museum of Art)
Kitagawa Yusuke
(Assistant Curator / Assistant Educator, Yokohama Civic Art Gallery Azamino)

In the 1980s, Japanese museums began to attach greater importance to the participation and experience of citizens. When the Yokohama Museum of Art opened in 1989, it was equipped with a full-fledged creative component known as the Citizens' Workshop. The workshop is made up of the Painting Room, the Sculpture Room, and the Printmaking Room, and organizes programs targeting participants 12 and over. While the name Citizens' Workshop refers to a facility, it also refers to an organization.

In 1986, ahead of the museum's opening, a committee called the Citizens' Workshop Study Group, consisting of invited specialists such as artists and educators. Over the following two years, the group discussed a variety of issues related to the nascent workshop, including principles, type of activities, and management structure. The Citizens' Workshop subsequently began its activities according to these policies. From the time the museum opened until the 1990s, it built a foundation for its activities and promoted large-scale businesses. Then, in the 2000s, the museum began to place greater emphasis on attracting visitors and raising revenue. Finally, since the 2010s, the museum's focus has shifted to projects concerned with social issues that call for enhanced cooperation with external agencies. Over the last over 30 years, the museum has adopted an integrated foundation and a designated administrator system, and experienced a reduction in financial resources. Similarly, the Citizens' Workshop has modified the content of its projects in response to various circumstances and social demands.

In comparing the workshop's achievements with its original principles, dating to the opening of the museum, the authors noted two significant points: the workshop has continued to function as a research facility and strived to enhance its international outlook. Moreover, the workshop's original mission to "consider art through the act of creation," is another key policy, as it encourages a cycle of creation and thought based on the joy of the creative experience.

The museum environment has changed over the years, and today there is a need for a perspective rooted in inclusivity, diversity, and sustainability. While the Citizens' Workshop endeavors to address these trends, there is also a need for the organization to reassess its significance as a creative site within the museum. In our opinion, this means embarking on enhanced a learning process involving people in a variety of positions on an equal footing, giving deeper consideration to the relationship between creation and appreciation, and deriving fundamental joy from the act of creation. The Citizens' Workshop is a place that was founded on creation in where people consider and acquire the power to live.

# Isamu Noguchi and Sachio Otani's Playground and Children's House at Kodomo No Kuni: A Plaster Model and Drawings from the Otani Associates

Nakamura Naoaki
(Senior Curator, Yokohama Museum of Art)

Along with monuments, memorials, parks, and gardens, playgrounds occupied an important place in the work of the socially committed sculptor Isamu Noguchi (1904-1989). Beginning with a proposal for Play Mountain (model, 1933), Noguchi designed playgrounds and playground equipment for seven known projects, most of which were never realized. The first to be realized, though not fully completed, was the playground he designed for Zone A of Kodomo No Kuni (Children's Land), a national recreation center for children located in Yokohama and Machida (1965-1966). In this work, Noguchi collaborated with the architect Sachio Otani (1924-2013), who designed the Children's House, consisting of a number of shelters for the playground, and provided Noguchi with access to his studio and staff to work on the model and drawings.

The exact history of Noguchi's Kodomo No Kuni playground is unclear. There is an original plaster model of the entire playground, but photos of the completed site dating from 1966 show that only the shelters and some elements of the playground around them were actually built. Moreover, the majority of these structures were destroyed in 1985, with the exception of a few components designed by Noguchi. As a result, it is difficult to determine what stood on the site.

In 2023, Mr. Takanori Yamamoto, director of Otani Associates (the firm Otani established after separation from Sekkei Rengo in 1967), gifted the Yokohama Museum of Art the original plaster model of the Kodomo No Kuni playground as well as all of the 157 extant drawings (including sketches and documents) for Noguchi and Otani's Kodomo No Kuni projects. The Otani Associates Kodomo No Kuni Collection (or the Otani Collection) enables us to trace the evolution of Noguchi's design as far as the construction stage. It also provides us with insight into the collaborative process between the sculptor and the architect. Notably, the collection also includes two of Otani's plans for the Children's House predating Noguchi's participation in the project, shedding new light on the history of this project.

This paper includes descriptions of the plaster model and selected drawings from the collection, and also summarizes Noguchi and Otani's Kodomo No Kuni projects, spanning Otani's first plan for the Children's House in 1964 to the completion in late 1965 of Noguchi's original playground design (as represented by the model). Changes to the playground design, the initial construction, and an additional project, which was eventually abandoned will be discussed in a future paper, also scheduled to include an inventory of the Otani Collection.

The paper deals with the following subject matter:

1. Overview of the Otani Associates Kodomo No Kuni Collection
   A. Original plaster model of the whole playground, created after a clay model in 1965, photos of which were first published in the January issue of SD architecture magazine the following year.
   B. 157 Drawings, sketches, and related documents, which can be divided into 12 groups based on the design process.
2. The construction of the Kodomo No Kuni projects, beginning with the 1961 master plan by Takashi Asada, who assembled a design group made up of 14 specialists from the fields of architecture, landscaping, sculpture, and zoology. Otani, one of five architects, was tasked with designing the

Children's House. He submitted two plans for the work in 1964 and 1965, the first of which called for the structure to be built next to Kiyonori Kikutake's School in a Grove (in the southern part of the Kodomo No Kuni). This plan included educational functions such as several classrooms and a library. The second plan envisioned the work on the site that eventually housed Noguchi's playground. The complex consisted of a classroom, library, and a large free space for playing and resting. These plans were unrelated to Noguchi's playground design.

3. Initially, Noguchi was not an official member of Asada's design group; he was instead referred to as a "special participant." In a 2006 interview with the author, Otani recalled that Asada recommended Noguchi as the designer of the playground. In a signed but undated contract between Noguchi and the Kodomo No Kuni Construction Committee (another document suggest that the contract was signed on November 1, 1965), the artist agreed to provide the basic design for the playground and a children's house in Zone A. This would then be supplemented with a more detailed plan made by Otani.
4. Noguchi came to Tokyo in mid-August 1965 and stayed in Japan until late November to visit the playground site and work in Sekkei Rengo studio. He suggested that Otani use Buckminster Fuller's Geodesic Domes and Octet Truss (exhibited at the Museum of Modern Art, New York in 1959) as the basis for the Children's House and two jungle gyms. Although Fuller and Shoji Sadao were receptive to this idea, Otani instead began looking for a similar kind of construction.
5. According to Otani, he was waiting for Noguchi to complete his playground design before submitting a plan for the Children's House. The Otani Collection includes the architect's first draft, showing triangular roofs in the middle of Noguchi's playground design. The arabesque design of the roofs was, as Otani wrote, inspired by falling leaves blowing down a street in late autumn, which might suggest that Noguchi's design was nearing completion in November.
6. Mr. Koichi Fujita, a designer at Otani's studio during the period, executed a majority of the drawings of the playground and Children's House. In a 2023 interview with the author, he recalled that Noguchi only made clay models, which Fujita then used to make his drawings under Noguchi's supervision. This suggests that the original drawings, depicting the playground as whole and the individual pieces of equipment, were made after the models. In an *Asahi Shimbun* newspaper interview (published on November 27, 1965), Noguchi said that the proposal was based on his over 30 years of experience in the field.
7. In the final section of the paper, the author analyzes Noguchi's plaster model of the entire playground by comparing each element with drawings in the Otani Collection. By examining how the elements changed over the course of multiple drawings, and comparing them with 1966 photos of the completed site, the author was able to determine which parts were actually built. Some of the elements were also based on earlier Noguchi projects such as Ala Moana Park, United Nations Playground, and Riverside Park Playground.

# An Overview of the Items in the Camera Section of the Collection of Camera and Photography of the Yokohama City

Hibiya Akiko
(Curator, Yokohama Civic Art Gallery Azamino)

In 2006, the Yokohama Civic Art Gallery Azamino began to house and administer the Collection of Camera and Photography of the Yokohama City, which was acquired from the late American photography collector Thurman F. Naylor (1919-2007) in 1993 and 1994. The collection is made up of five sections: cameras, photographs, accessories, lens, and books. While checking the inventory provided by Naylor against the actual items, we are currently involved in confirming the information regarding each piece and publishing it on the museum website.

As the process of cataloging this information for the approximately 2,650 items in the camera section whose whereabouts are currently known, it is now possible to grasp the entire picture. The cameras manifest a nearly comprehensive collection, which includes everything from visual equipment that predates the invention of photographic technology to cameras equipped with a variety of 19th- and 20th-century features that emerged with the popularization of the devices following the dawn and subsequent development of the technology. At the same time, the fact that Naylor's inventory also includes a subsection devoted to American manufacturers such as Eastman Kodak and Polaroid, and another one called "Memorabilia," made up of documents dealing with particular people, including Margaret Bourke-White (1904-1971) and Harold E. Edgerton (1903-1990), indicates that the items were amassed by a private collector.

In this paper, I analyze the cameras contained in the collection while referencing Naylor's inventory, and provide summaries of the items along with descriptions of their features.

横浜美術館研究紀要　第25号

令和6年3月31日発行

編集：横浜美術館学芸グループ

翻訳：クリストファー・スティヴンズ（pp.121-124）

発行：横浜美術館
（公益財団法人　横浜市芸術文化振興財団）
〒220-0012 横浜市西区みなとみらい3-4-1

印刷・製本：株式会社 野毛印刷社

Ⓒ横浜美術館　2024

Bulletin of Yokohama Museum of Art No.25

Date of Issue：March 31, 2024

Edited by Curatorial Department, Yokohama Museum of Art

Translated by Christopher Stephens (pp.121-124)

Published by Yokohama Museum of Art (Yokohama Arts Foundation)
3-4-1, Minatomirai, Nishi-ku, Yokohama 220-0012 Japan

Printed by NOGE Printing Corp.

©Yokohama Museum of Art 2024